プレイヤーキラー伝説!　～死神プレイの最強PK～

カゲムチャ

真面目な高校生「切崎恭夜」は、誕生日プレゼントに貰ったVRゲーム【アドベンチャーズ・オンライン】β版を、死蔵させるのも悪いという理由でプレイした。

しかし、前評判の高い注目作であった【アドベンチャーズ・オンライン】は、娯楽にあまり興味のない恭夜ですら魅了し、彼は存分にゲームを楽しむ事ができた。

そして、来る正式サービス開始の日。

彼はプレイヤーネーム「キョウ」として、再び【アドベンチャーズ・オンライン】の世界にログインしたのだった。

――これは、β版において、最強のプレイヤーキラー『死神』と呼ばれた、一人の少年の物語である!!

◆◆◆

小説家になろうとのマルチ投稿です。

目次

1 ログイン 1
2 キャラクターメイキング 9
3 初戦闘 19
4 プレイヤーキル 35
5 掲示板 45
6 召集 57
7 闇ギルド 69
8 素材集め 83
9 アーマードベア 93
10 第一回公式イベント　開始 105
11 『剛力』 119

12 乱戦 133
13 激突 145
14 『剣聖』 157
15 ラストスパート 171
16 決着 183
17 掲示板 201
18 イベント後 219
19 ギルド設立クエスト　開始 235
20 『剣聖』のパーティー 247
21 ダンジョン攻略 261
22 ドラゴンゾンビ 271
23 同業者 285
24 冒険の終わり 297

25 『サクリファイス』復活 305
26 割のいいクエスト 317
27 護衛の道中 325
28 ダークマター襲来 337
29 敗北 347
30 急転 359
31 対策会議 369
32 同盟を組む 379
33 ダークマター討伐 387
34 混戦 395
35 『破壊王』 405
36 討伐作戦を終えて 417

1　ログイン

マルチ投稿第三弾始めまーす。

「お兄ちゃ～ん、あ～そ～ぼ～！」

貴重な夏休みのある日。

俺、切崎恭夜（きりさききょうや）の平穏は、そんな子供っぽい台詞を言いながら部屋に突撃してきた妹の舞（まい）によって終焉を迎えた。

妹よ……。

お前ももう中学三年生だと言うのに、なんでそんなに幼いんだ。

「舞、宿題は終わらせたのか？」

「あっはっは！　何言ってんの、お兄ちゃん？　夏休みの宿題っていうのは最終日に終わらせるのが常識だよ？」

「帰れ。今すぐ部屋に戻って勉強しろ」

それだけ告げて舞を部屋からつまみ出す。

我が家ではこいつが宿題を溜め込むのと、テスト前の一夜漬けに俺が付き合わされるのが恒例行事になりつつある。

その度に泣きつかれて拒否して娘に甘い両親の援護射撃が炸裂し、俺が手伝わされるまでがお約束だ。

ここらでそんな負の連鎖は断ち切るべきだろう。

今度こそ俺は手伝わんぞ。

「え!?　ちょっと待ってお兄ちゃん！　今日は一緒に遊ぶ約束でしょ！　忘れちゃったの!?」

部屋のドアをドンドンと叩きながら舞が何事かほざいているが無視する。

今回の俺は泣き落としにも、壁ドンにも、ドアノックにも屈するつもりはない。

「お兄ちゃん本気で忘れちゃったの!?　今日はあれだよ！　【アドベンチャーズ・オンライン】の正式サービス開始の日だよ！　一緒にやろうって言ったじゃん！　お兄ちゃんだって楽しみにしてたじゃん！　お願いだからドアを開けて！」

まだわめくか。

近所迷惑だからいい加減に……あ。

忘れていた記憶を思い出した俺は舞の発言に正当性を見いだし、籠城をやめて素直にドアを開けた。

「……入れ」

短くそれだけ言って舞を部屋に入れる。

直後、妹がキレた。

「ムッキー!!　お兄ちゃん！　可愛い妹との大事な約束を忘れた挙げ句部屋からつまみ出すなんて酷いよ！　最低だよ！　罰として私の宿題を代わりに全部やること！」

こいつ……！

怒ったふりをして凄まじく図々しいお願いをしてきやがった。

その理屈が通ると思っているのか！

「約束を忘れた事に関しては謝るが調子に乗るな。宿題は自分でやれ。最終日に泣きたくなければコツコツとやれ」

「断る！　今年の夏休みはゲームに捧げるんだ！　そこにおもしろいゲームがあ

るのに宿題なんてやってられないよ！」

それで良いのか受験生。

いや、駄目だこいつは。

早くなんとかしないければ。

「おい、舞……」

「とにかく！　今日は一緒にゲームだからね！　ログィン地点で待ち合わせだよー！」

「ちょっと待て！」

舞はそれだけ言って逃げるように自分の部屋へと戻っていった。

追いかけてドアを叩くも反応がない。

しまいには鍵までかかっていた。

今度はお前が籠城か。

こうなったらもう出てこないな。

舞の追跡を諦め、自分の部屋へと戻る。

すると机の近くにVRゲームをやるための機材が置いてあるのが目に入った。

そういえば昨日自分で用意したんだったな。
すっかり忘れていたが今日は前評判の高い新作VRゲーム【アドベンチャーズ・オンライン】の正式サービス開始の日だった。
【アドベンチャーズ・オンライン】。
よくテレビでもCMが流れている注目のタイトルだ。
従来のVRゲームとは一線を画すリアルな映像と激しい戦闘アクション、自由度の高いプレイスタイルを売りにした作品。
名前の通りプレイヤーは冒険者となり、剣と魔法の世界で大冒険を繰り広げる。
それがコンセプトらしい。
俺と舞は、人気が高すぎて入手が難しいこのゲームを手に入れた。
俺は運で。舞は努力で。
そして確かに言われてみれば舞と一緒にプレイするという約束をしていたような気がする。
はしゃぎ回る舞があまりに煩くて適当に生返事を返していたのが裏目に出た。
とはいえ約束は約束だ。

破る訳にはいかない。
妹との約束を平気で破る奴は人間じゃない。
それに俺だってこのゲームの事が嫌いな訳じゃないのだから。
サラッと忘れる程度には優先順位が低かったが、それでも楽しみにはしていたのだ。

事の始まりは数ヶ月前の俺の誕生日。
娯楽の類いにあまり興味を示さない俺を心配したのか、両親は誕生日プレゼントとして最新型のVRギア（VRゲームをする為の機材）をプレゼントしてくれた。
そして舞は「たまには息抜きも必要だよ」と言い、誕生日プレゼント代わりに俺のIDを勝手に使って当時βテスターを募集していた【アドベンチャーズ・オンライン】の抽選に応募。
幸か不幸か俺はかなりの倍率の抽選をくぐり抜けβテスターとなった。
……ちなみに、同じく応募していた舞は抽選に外れ、行列に並んで正規版を購入する事を余儀なくされた。

一時期βテスターとして正規版の優先販売予約券を貰った俺に凄まじい嫉妬の視線を向けてきてとてもうざかったのを覚えている。

そうしてあまりやる気もなかったが、せっかくの誕生日プレゼントを物置の肥やしにするというのも気が引けた俺は、【アドベンチャーズ・オンライン】β版をプレイする事にした。

だが、さすがは注目作と言うべきか、普通に面白かった。

ゲーム内での知り合いも出来た

対戦していて楽しいライバルも出来た。

正規版を買っても良いと思えるくらいにはハマった。

両親の試みは、見事大成功に終わった訳だ。

過去を振り返っているうちに正式サービス開始時刻である午前12時がやってきた。

本当なら開始直後ではなく気が向いた時に始めようと思っていたんだがな。

だが今回は舞もいるし、もう少し真剣にプレイしてみるのも良いかもしれない。

そんな事を思いながら俺はVRギアをセットし、再び【アドベンチャーズ・オンライン】の世界にログインした。

2　キャラクターメイキング

VRゲーム特有の眠るように意識が薄れるログインの感覚。
脳から身体への命令が遮断され、バーチャルの世界へと繋がる。
そうして気づけば白くて何も無い場所にいた。
アドベンチャーズ・オンラインの初期設定を行う場所だ。
β版の時も最初にここに来た。
そしてオープニングムービーが流れ出す。

『冒険者とは、何かを探し求める者の事である』
『何を求めるのか？　それは何でもいい』
『未知の世界を、神秘を求め、それを解き明かす旅をするのも良いだろう』
『強さを、強者との戦いを求め、ただひたすらに己を磨くのも、また一興』
『はたまた、安穏とした平和な日常を求め、心穏やかな生活を送るのも悪くない』
『道を外れ、破壊を混沌を求めて、裏の世界を生きるのも、一つの道である』

『新たなる冒険者よ。君が何を探し、何を求め、どんな人物となるのか、それは君の自由だ』

『ただ私は、君を、君達の未来を祝福しよう』

『ようこそ！　冒険者達の世界【アドベンチャーズ・オンライン】へ！』

やたらと貫禄のある声と共に綺麗な映像のムービーが流れた。

この映像だけでも生粋のゲーマーならば心踊らせ、これから始まる冒険の日々に期待を膨らませる……らしい。

それくらいによく出来ているのだそうだ。

俺にはよく分からないが。

そして、オープニングが終わり、初期設定画面が出現した。

《プレイヤーネームを入力してください》

音声ガイドに従って目の前に出現した透明なディスプレイを操作し『キョウ』と入力する。

本名から一文字抜いただけの安直なネーミングだが、それで困る事もないし別に

いい。

《キャラクターメイキングを開始します。アバターの容姿を設定してください》

《β版のデータを確認しました。データを引き継ぎますか？　ｙｅｓ／ｎｏ》

プレイヤーネームの次はアバターの設定。

ここでデータ引き継ぎを選べばβ版で使っていたのと同じアバターでプレイする事になる。

ちなみに、β版から引き継げるのは容姿とゴールド（ゲーム内通貨）、そして一部のアイテムのみだそうだ。

引き継ぎを拒否すれば全く新しいアバターを作る事もできるが、面倒なので素直にｙｅｓを選んでβ版のデータを使う。

すると俺の身体が変化した。

リアルでの自分の体からゲーム内で慣れ親しんだアバターの姿へと。

目の前に出現した大きな鏡で自分の姿を確認する。

身長や体格等は現実の体とほぼ変わらない。

俺はゲーム内での体が現実と違いすぎると動かしづらく感じるタイプだから仕方

なくこうした。

本当ならゲームと現実の区別をきちんとつける為にリアルとは完全に違う姿にしたかったんだがな。

それでも顔立ちを微妙に弄ったり、髪や肌の色を白くしたり、目の色を赤くしたりと、変えられる所は変えている。

顔も１から設定すれば全くの別人になれるのだが、俺に絵心の才能はないらしく自分で作った顔には違和感しかなかった。

だからこうして微調整にとどめている。

それが一番自然なのだから仕方がない。

《初期ステータスを設定してください》

容姿の次はステータスの設定。

目の前のディスプレイに、【アドベンチャーズ・オンライン】の基本である、ステータス画面が表示された。

ーーー

キョウ　ＬＶ１

HP　100／100
MP　50／50
STR（攻撃）：0
VIT（防御）：0
AGI（速度）：0
INT（知力）：0
DEX（器用）：0
ステータスポイント　100

スキル
なし
スキルポイント　30

装備
武器：なし

頭部：なし
胴体：なし
右腕：なし
左腕：なし
脚部：なし
装飾：なし

ーーー

このステータスポイントを割り振って初期ステータスを決め、スキルポイントを使って初期スキルを習得する。

ステータスポイントは、HP、MPに振った場合は10ずつ、他は1ずつ上昇する。

スキルポイントは最下位のスキルを取得するのに10ポイント。

上位のスキルになるほど取得に必要なポイントが増える。

30なら基本の武器スキル一つと弱めのスキル二つか、強めのスキル一つという構成にするのが定石となる。

早速β版の時と同じ方針でポイントを割り振った。

ーーー

キョウ　ＬＶ１

ＨＰ　１００／１００

ＭＰ　５０／５０

ＳＴＲ：５０〈＋６〉〈＋１〉

ＶＩＴ：０

ＡＧＩ：５０〈＋１〉

ＩＮＴ：０

ＤＥＸ：０

ステータスポイント　０

スキル

《大鎌：ＬＶ１》《攻撃力上昇：ＬＶ１》《速度上昇：ＬＶ１》

スキルポイント　０

装備
武器：『駆け出し冒険者の大鎌』
頭部：なし
胴体：なし
右腕：なし
左腕：なし
脚部：なし
装飾：なし

ーーー

俗に極振りと呼ばれる手法。
スキルは基本の武器スキルとステータス上昇系スキルを選択。
武器スキルにβ版でも世話になった《大鎌》を選んだ事によって、装備欄に初期装備の大鎌が追加された。
ステータスの＋分は武器とスキルによるものだ。
この武器スキルのレベルを上げていくと、必殺技のような攻撃手段『アーツ』を

取得できる。
そして、対応武器による攻撃力や防御力に補正がつくから、このゲームにおいては必須のスキルだ。
ロマン武器と呼ばれる大鎌に、ロマン仕様と呼ばれる極振りステータス。
案の定、知り合い全員にロマンの塊と言われたこのやり方だが、俺としては合理性を突き詰めた果てに選んだスタイルだ。
文句は受け付けない。
設定を終了させる為に決定ボタンを押す。
《キャラクターメイキングが完了しました》
《全ての項目の設定が終了しました。これよりゲームを開始します》
《いってらしゃい。【アドベンチャーズ・オンライン】の世界へ》
そうして白かった視界が晴れ、俺は最初期のログイン地点、『はじまりの街』の噴水広場に立っていた。
さて、ゲームスタートだ。

3　初戦闘

人混みを避け、噴水広場の端の方に陣取る。
舞に位置情報とアバターの特徴を書いたメールを送り、やって来るのを待った。
引き継ぎアイテムの確認やβ版で登録したフレンドリストの確認等をしながら待つ事三十分。
舞は未だに現れない。
「遅い……」
舞め。
人を待たせておいて何をやっているんだ。
しかも返信すら寄越してこないとは。
それにしても三十分は長い。
確か初期設定を行っている間は思考加速システムによって体感時間が五倍になっていた筈。
つまり舞が三十分遅れるという事は、初期設定に二時間半もの時間をかけている

という事になる。
それはいくらなんでも長すぎる。
そもそも設定中でもメールは届く筈だ。
返信してこないのはおかしい。
まさか何かトラブルにでも巻き込まれたのか？
バグか何かでメッセージが届いていない、もしくはそもそも正常にログインできていない可能性もある。
あるいは変な輩に絡まれているのか？
あり得なくはない。
ここのような街の中は非戦闘エリアであり、PK等の戦闘行為はできないが、逃げられないように手を掴んだり、大人数で囲んで恫喝したりといった迷惑行為はできてしまう。
もちろんそんな事をすれば運営からアカウント削除等の処分を受ける。
初日からそんな馬鹿なマネをする奴はそうそういないだろうが、どこにでも馬鹿は沸くものだ。

ないとは言いきれない。
もしそうならここでじっとしている訳にはいかない。
妹の危機を放置するのは兄として失格だ。
待っていろ舞。
今、探しに行って……
「あ！　いたいた！　おーい、お兄ちゃーん！　遅れちゃってごめんね。ちょっとキャラメイクに熱が入っちゃってさ～。いや～、やっぱりこれからずっとお世話になる自分の分身を作るんだから色々悩むよね～。こだわるのが当たり前と言うか、むしろこだわらないのは逆に失礼……いひゃい！」
人が心配していた所に呑気に現れて、聞いてもいない事をペラペラと喋り出したうざい妹の減らず口を塞ぐ為、とりあえず頬をつねっておいた。
両側の頬を掴んでおもいっきり左右に引っ張る。
「いひゃい！　いひゃいよお兄ちゃん！」
痛い訳がないだろう。
このゲームに痛覚は設定されていないのだから。

そのまま俺が満足するまでつねってから開放してやった。

さて、次は尋問の時間だ。

「舞。俺は連絡を入れた筈だよな。遅れるなら遅れると、なんで返信を寄越さなかった？」

「い、いや、その、さっきも言ったけど、キャラメイクに熱中しちゃって……気づいてませんでした」

「ああ、確かに随分とこだわったみたいだな。人を待たせていたというのに、時間をかけて」

「うぐっ！」

舞の姿は俺と同じくリアルの姿を元にしていると思われるが、細部がかなり弄られていた。

兄妹で思考が似たのか髪の色は俺と同じく白。

リアルでは肩口までのボブカットだが、今は腰まで届くロングヘアをポニーテールにしていた。

目の色は晴天の空のような青色。

俺が赤だから目の色は真逆だ。
顔もリアルとは雰囲気が大分違う。
パーツのバランスを崩さない範囲でできるだけ変えたのだろう。
まるで化粧でも始めたかのように、身内である俺から見てもちょっと可愛くなっていた。
そして装備欄にすら『なし』と表示される、今俺達が着ている初期装備『布の服』のデザインすら弄っている。
ここまで作り込みながらも一から作るのではなくリアルの姿を元にしているのは、こいつもまた俺と同じで絵心がなく、リアルとゲームで体格が変わると動かしづらく感じるタイプだからだろう。
そこら辺は血の繋がりを感じる。
「ハァ。本当ならこのままお説教でもしたいところだが、せっかくのゲーム時間をそれで削るのも馬鹿らしいからな。今回だけは見逃してやる」
「おお！　お兄ちゃん寛大！　ありがたやー」
「ふざけてるようなら、ゲームが終わった後に正座させるからな」

「さあ、お兄ちゃん！　真面目にゲームスタートだよ！　早速、戦闘に行こう！」
「レッツゴー！」と言って舞は先に進んで行く。
露骨に話題を逸らされたが、まあ、いいだろう。
こんな事でゲーム時間を削りたくないのは本音だ。
舞にはゲームの後で、説教の代わりに夏休みの宿題をやらせればいい。

そうして俺達はパーティーを組み、戦闘の為に街の外に行くべく、始まりの街の正門に向かって歩いて行く。
このゲームは街の作りも意外とリアルに出来ていて、ちゃんとＮＰＣの住人が暮らす住宅街や、お尋ね者の潜むスラム街等がある。
そっちは一部のイベントでしか行く機会はないから、今は関係ないが。
そうして歩いている内に、舞がＮＰＣの露天の前で足を止めた。
「ん？　どうした舞？　戦闘に行くんじゃなかったのか？」
「チッチッチ。お兄ちゃん、戦闘の前にアイテムを補充しておくのはゲームの定石だよ。回復アイテムもなしに死に戻りするのは愚か者のやる事だよ。あ！　ちな

みに、私のプレイヤーネームは『マイン』ね。ゲームではそっちの名前で呼んで」
なるほど。
アイテムが欲しかったのか。
それにしてもマインか……。
「本名に一文字足しただけか。安直な名前だな。ちなみに、俺のプレイヤーネームは『キョウ』だ」
「……本名から一文字引いただけじゃん。安直とかお兄ちゃんにだけは言われたくないなぁ」
ここでも兄妹で思考が似たみたいだな。
それがどうしたという話でしかないが。
そして舞、改めマインは薬草をいくつか買い込んだ。
「お兄ちゃんは買わないの？」
「俺は引き継ぎアイテムの中に回復ポーションがいくつかあったからな。必要ない」
「ちょ!?　先に言ってよ！　あああ!!　知ってたら１０００ゴールドしかない初期資金を薬草なんかに使わなかったのにィ!!」

「お前……。兄にたかる気だったのか」

まあ、俺の、というよりβテスターの資金には余裕があるから、そのくらい別に構わないが……。

それでも、その躊躇なく兄を利用しようとする姿勢には呆れを通り越して感心する。

リアルと全く変わらんという意味で。

マインの恨みがましい視線を背後に感じながら正門を通過し、初戦闘にちょうどいいエリア『始まりの草原』にやって来た。

ここにいるのは最弱クラスのモンスター。

角の生えたウサギ『ホーンラビット』や、二足歩行の犬『コボルト』に、言わずと知れた最弱モンスターの代表格『スライム』に『ゴブリン』。

そんな感じの雑魚モンスターしかいない場所だ。

チュートリアルにはちょうどいいだろう。

その証拠に、俺達以外にも雑魚狩りで経験値を溜めようとするプレイヤーの姿が

ちらほらと見える。
「よーし！　初めての戦闘！　張り切って行ってみよう!!　お兄ちゃんはそこで見ててね。そして危なくなったら助けて！」
モンスターを見て機嫌を直したらしいマインは、さらっと保険をかけながら、三体で固まっているゴブリン目掛けて突撃して行った。
あいつは俺と違って結構なゲーマーだが、やはり初めてのゲームだと操作感覚が違うのだろう。
だから、万一の時の為に、このゲームに慣れたβテスターである俺を保険に使ったと。
したたかと言うか、何と言うか……。
「とりゃー！　《ライトボール》!!」
そうして始まった戦闘。
マインはまず《光魔法：ＬＶ１》で覚えられる魔法を一匹のゴブリン目掛けて発射し、それに当たってダメージが蓄積したところに首筋へ向けて剣を突き刺した。
首筋はゴブリンの、というより人型モンスターの弱点。

それを突かれ、大ダメージを受けたゴブリンは、HPが0になり、光の粒子となって消滅した。

それを見ていた残り二体のゴブリンが、手に持った棍棒を振りかぶってマインに襲いかかる。

「よっ！　ほっ！」

それをマインは上手くステップでかわし、反撃に剣を振るう。

一撃では倒しきれなかったが、二回、三回と当てていく内にゴブリンの体には赤く光る傷痕が増えていき、HPは確実に削れていく。

そうして二体目も倒れた。

残り一体。

「《スラッシュ》!!」

最後の一体に対して、マインは《剣：ＬＶ１》で覚えるアーツ、《スラッシュ》を使った。

アーツは魔法と似たようなもので、発動には魔法と同じくMPがいる。

《スラッシュ》は攻撃力を若干強化するだけの微妙な技だが、レベル１のアー

ツなんてそんなものだ。
それをマインは上手くゴブリンの首筋に直撃させ、最後の一体を一撃で倒した。
「どうだー！」
マインがピースサインを決めながらこっちに戻って来たので、とりあえず拍手しておいた。
「良かったんじゃないか。初戦闘にしては見ごたえがあった。俺の助けもいらなかったみたいだしな」
「でしょー！　今のでだいぶ感覚掴めたし、レベルもいっこ上がったよ！　幸先良いなぁ！」
見たところ、マインは魔法剣士タイプだな。
ステータスを物理と魔法の両方に振るから中途半端になりやすいが、純粋にゲームを楽しむには一番良いと言われているスタイルだ。
武器も魔法も両方使えて楽しいらしい。
それに、どんなスタイルでもプレイヤースキル次第でトップを狙える。
こいつの力量なら結構強くなりそうだ。

「さあ！　じゃあ次はお兄ちゃんの番だよ！　βテスターの力を私に見せてみろ！」

「いいだろう」

マインの言葉に応えるように、俺は背中の大鎌を引き抜きながら駆け出した。

標的は、さっきのゴブリンと同じく三匹で固まっているコボルト。

まずは一匹目を大鎌で薙ぎ払った。

「ブギャ!?」

俺の攻撃力と重量武器である大鎌の一撃は、防御に回した腕ごとコボルトの体を引き裂き、その一撃で消滅させた。

足を止めずに残りの二匹も狩る。

薙ぎ払いの勢いを殺さずに体を回転させ、回転の軌道上に二匹目のコボルトを巻き込んで薙ぐ。

これで二匹。

残り一匹。

「ワンッ!?」

ナイフを片手に突撃してきた最後の一匹の攻撃が届く前に、大鎌を縦に振り下ろした。
コボルトの体に、縦一文字の傷が入る。
ゲーム特有の赤く光るだけの傷痕。
現実なら確実にスプラッタになるような大ダメージを食らい、最後のコボルトは消滅した。
《レベルアップ！　ＬＶ１からＬＶ２になりました！》
《ステータスポイントを入手しました！》
《スキルポイントを入手しました！》
頭にレベルアップの通知が響く。
それを聞きながら、俺はマインの所に戻った。
「うわっ!?　お兄ちゃん速っ!?　強っ!?　え？　どんなステ振りしたらこうなるの？」
「こんな感じだ」
ステータス画面をマインにも見える設定に変えて表示する。

「わー……。ロマンの塊だー……。大鎌見た時から思ってたけど、真面目なお兄ちゃんらしくないね。意外だ」

「俺としては合理性を突き詰めたつもりなんだがな。大鎌も慣れれば使いやすい」

「えー……」

納得してなさそうだな。

攻撃力に極振りしたステータスは、ミスさえしなければ格上であろうとも容易く屠れる。

そこに大鎌という重量武器の攻撃力を組み合わせれば、一撃必殺なんてざらだ。

大鎌や斧、ハンマー等の重量装備は、取り回しがしづらい代わりに攻撃力が高い。

同じ初期装備でも、マインの持っている『駆け出し冒険者の片手剣』の攻撃力は〈ＳＴＲ＋３〉。

俺の『駆け出し冒険者の大鎌』は〈ＳＴＲ＋６〉。

二倍もの差がある。

そういう話をこんこんと語ってやってもいいが、今はマインが戦闘を楽しむ時間だからやめておこう。

そうしてしばらく狩りを続け、俺達のレベルは5にまで上昇した。
一回のレベルアップごとにステータスポイントもスキルポイントも5ポイントずつ手に入る。
俺もマインもそのポイントでステータスを強化し、新しいスキルを取得。
それなりに強くなった。
……そろそろいいか。
「マイン。お前もだいぶこのゲームに慣れたみたいだし、俺は自分の狩りをしに行くが、お前はどうする？　一緒に来るか？」
「行く行く！　私もそろそろ狩場変えようと思ってたんだ！　ここじゃレベルも上がらなくなってきたしね」
「そうか。じゃあ、とりあえずそこで見てろ」
「へ？」
俺はメニュー画面を操作し、装備を変更する。
引き継ぎアイテムの中にあった雑魚装備、『傷だらけのローブ』を身に纏い、『死

神の仮面』を被る。

そして『染髪スプレー』で髪の色を白から黒に変更し、『駆け出し冒険者の大鎌』を握り締めて新たな……いや、俺にとっては本来の獲物に向かって駆け出した。

標的は、経験値稼ぎに夢中になっているプレイヤー達。

――さあ、本当のゲームの始まりだ。

4　プレイヤーキル

最初の標的はこの辺りでは強めのモンスター、『ビックボア』という大きめの猪を倒してはしゃいでいる三人組。
隙だらけだ。
戦闘エリアに出たのなら、常に襲撃を警戒しておくべきだろう。
このゲームの敵はモンスターだけではないのだから。
俺は大鎌の刃で一人目の首をはね飛ばした。
「え？」
状況が呑み込めていないのか、首だけとなったプレイヤーが間抜けな声を上げる。
その首の断面はダメージを受けた証として赤く光っていた。
このゲームでも首をはねられれば当然即死。
首を切られたプレイヤーはモンスターと同じように、光の粒子となって消滅した。
死に戻りだ。
そうなるとデスペナルティーを食らい、所持金の半分と、ランダムにいくつかの

アイテムをロストする。
今みたいに他のプレイヤーにキルされた場合、そのロストした分の金とアイテムをキルした側が獲得できるというシステムになっている。
「「は？」」
突然目の前でパーティーメンバーの首が飛ぶという衝撃の光景に動揺していた残りの二人も、同じように大鎌の錆にした。
大鎌をバトンのように操って斬殺する。
二人目は胴体を真っ二つにされて。
三人目はさっきのコボルトと同じように、頭から縦に切り裂かれて。
それぞれ一撃でHPを全損し、死に戻った。
《レベルアップ！　ＬＶ５からＬＶ６になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
《レベルアップ！　ＬＶ６からＬＶ７になりました》
《ステータスポイントを入手しました》

《スキルポイントを入手しました》
一気に二つレベルアップ。
やはりプレイヤーはここらの雑魚モンスターよりも遥かに獲得経験値が高い。
それも当然の事。
経験値というものは強い敵を倒した時ほど多く手に入る。
モンスターよりも、それを倒してレベルを上げたプレイヤーの方が強く、獲得経験値が多いのは道理だ。
そして、俺はそんな美味しい獲物であるプレイヤー達に次々と襲いかかった。
入手したポイントを使う時間すら惜しみ、次の獲物を狙う。
次の標的は、そこそこ立派な装備をした四人組。
剣士の男が一人、弓使いと魔法使いの女が一人ずつ、そして大盾を持った男が一人。
前衛二人、後衛二人のバランスのとれたパーティーだ。
おそらく俺と同じβテスターだろう。
戦い慣れている感じがする。

その証拠に、彼らはすでに迎撃態勢を整えていた。
俺が他のプレイヤーを殺したのを見ていたのだろう。
対応が早い。
大盾使いが他のメンバーを守るように、突撃する俺の正面に陣取った。
「まさか初日から『死神』に襲われるなんてな……！　ついてないにも程がある！」
「そう言うなって！　ポジティブに考えよう！　死神を討ち取れば一躍有名人だ！」
「撃ち抜いてやるわ！　《速射》!!」
「ア、《アイスボール》!!」
盾使いの斜め後ろから、弓使いと魔法使いが矢と魔法を撃ち込んで来る。
それを前傾姿勢になって避け、サイドステップでかわし、時には大鎌を盾にして防ぐ。
敵の遠距離攻撃を最小限の動きで無力化し、走るスピードを欠片も緩めずに突撃した。

「さすがは死神……！　化け物じみてるなッ!!」

大盾使いに向けて真上から大鎌を振り下ろす。

大盾使いは盾を傘のように構えてそれを受け止めようとしたが、俺は直前で大鎌の軌道を変える。

弧を描くように振り下ろしから薙ぎ払いへと変化した大鎌の一撃が、大盾使いの脇腹に深く突き刺さった。

「マジか……!?」

だが、浅い。

大盾使いはちゃんとした鎧を装備していた。

それに、パーティーの壁役ならば防御力に多くのステータスを振っている筈。

いくら俺の極振り攻撃力を持ってしても、弱点でもない場所を斬った程度じゃ殺せないか。

「やあああ！！！」

俺の攻撃によって体勢を崩した大盾使いに代わって、剣士が斬りかかって来た。

その攻撃を大鎌の柄で防ぎ、滑るような足さばきで剣士に密着する。

直後、剣士の背中に矢と魔法が突き刺さった。
「嘘ッ!?」
「す、すみません!!」
剣士の攻撃に合わせて至近距離から狙い撃ちにする作戦。
悪くはないが、俺には通用しない。
その手の戦法はβ版で何度も見た。
だが、このゲームにフレンドリーファイアのシステムはない。
故にパーティーメンバーの放った攻撃に当たったところでダメージは受けない。
つまり、剣士はまだ健在だ。
俺は腰に差していたナイフを左手で引き抜き、味方の攻撃で体勢の崩れた剣士の首筋を切り裂いた。
「なにッ!?」
俺が今着ている装備『傷だらけのローブ』には、腰の部分にアイテムを収納する小さなポケットがある。
それはこの装備に限った話ではなく、大抵の胴体装備には咄嗟にポーション等を

使えるように、そういうポケットやポーチ、あるいはベルトなんかがついている。
俺はそこに、コボルトからドロップした雑魚アイテム『錆びたナイフ』を入れていただけだ。
こんな雑魚アイテムでも、俺の攻撃力で首筋という弱点を突けば、一撃でプレイヤーを殺せる凶器になる。
剣士のHPが0になり、光の粒子となって消滅した。
「このォ!!」
剣士を殺られて怒った弓使いが、再び矢を放とうとしていた。
だが、それが放たれる事はない。
何故なら、矢が放たれるよりも早く、弓使いの喉を『錆びたナイフ』が貫いたからだ。
「なん……で……!?」
簡単だ。
スキル《投擲》。
マインとのレベル上げで手に入れたスキルポイントを使って取得したこのスキ

ル。

それを使って左手に持っていた『錆びたナイフ』を投げつけた。

それだけの事だ。

命中率に作用するステータスであるＤＥＸが０の俺だと、ゲームによる弾道補正の恩恵を受けられないが、このくらいならプレイヤースキルでどうとでもなる。

相当練習はしたがな。

急所を穿たれた弓使いもまた、剣士と同じくＨＰを全損して消滅した。

残り二人。

だが油断はしない。

二人でも前衛を後衛がサポートして戦われたら厄介だ。

確実に、狩れる奴から狩る。

俺は魔法使いに接近した。

そして大鎌で肩から腰にかけて切り裂く。

「ひうっ……！」

後衛は寄られると弱い。

特に魔法を使わなければ戦えない魔法使いは尚の事だ。
魔法やアーツは技名を口に出して言わなければ発動しない。
ここまで近づかれれば、そんな事をしている暇はないからな。
そして、魔法使いは怖かったのかギュッと目を閉じながら大鎌で真っ二つに切り裂かれて消滅した。
残りは一人。
脇腹をごっそりと削られた瀕死の大盾使いだけだ。
「たった数秒で全滅かよ……。回復ポーションを使う暇すらないとはな……。マジで強いぜ、あんた」
そう言いながらも、大盾使いは最後まで俺に立ち向かった。
そして、その僅か数秒後、彼は他のメンバーと同じように死神の鎌の餌食となった。
《レベルアップ！　ＬＶ７からＬＶ８になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》

彼らの死後も、俺は他のプレイヤーを殺し続けた。

ああ。

やはり楽しいな。

PK（プレイヤーキル）は。

いくら高性能AIが搭載されてるとはいえ、決められた行動しかとらないモンスターを倒すのはほとんど作業と変わらない。

だが、同じ人間、同じプレイヤーを相手にするのは全く違う。

彼らの動きは複雑で、感情的で、戦っていてとても楽しい。

やはりゲームは誰かと一緒にやるのが一番楽しいという事だな。

そんな事を考えながら、俺は虐殺を続けた。

5　掲示板

【ついに】アドベンチャーズ・オンライン雑談スレ【開幕!!】

２４０：名無しの冒険者
なんか、骸骨っぽい仮面つけた奴に襲われて、気がついたら首飛ばされて死んでたんですけど……。
何アレ？

２４１：名無しの冒険者
なんだそりゃ!?
詳しく！
場所どこよ？

２４２：名無しの冒険者

あー。俺らも殺られたわ。
奴を知らないとは、貴様ら、さては正規版からの新入りだな。
ちなみに、場所は『始まりの草原』ね。
今は近づかない方がいいぞ。

２４３：名無しの冒険者
えー！　現在、事件現場である始まりの草原から書き込んでおります！
突如現れた、骸骨の仮面をつけた大鎌使いの男がプレイヤーを殺しまくっております！
ジェノサイドが!!　ジェノサイドが吹き荒れている!!
いったい、これからどうなってしまうのでしょうか!?
以上、現場からでした！

２４４：名無しの冒険者
おいおい。

勇者がいたよ。

２４５：名無しの冒険者
実況とか、貴様正気か!?

２４６：名無しの冒険者
近づかない方がいいって言われたそばからｗｗｗ

２４７：名無しの冒険者
詳しく。
実況詳しく。

２４８：名無しの冒険者
大鎌使いの人めちゃくちゃ強いです!!
この場に居合わせた複数のパーティーが共闘して迎撃に当たるも、歯牙にもかけ

ておりません！
２秒に一人は死んでおります！
無双！　まさに無双状態であります!!
あれ？
なんかこっちに来ｔ

２４９：名無しの冒険者
勇者あああああ！！！？

２５０：名無しの冒険者
書き込みが途絶えた。
死んだか。

２５１：名無しの冒険者
おお勇者！　死んでしまうとは情けない！

２５２：名無しの冒険者
勇者……。いい奴だったよ。
冗談はさておき。骸骨仮面で大鎌使いの凄腕PKって、絶対あの人でしょ。

２５３：名無しの冒険者
ほぼほぼ確定だな。
格好だけ真似た模倣犯という可能性もなくはないが、大鎌で無双するようなプレイヤースキル持ってる奴はそうそういないだろう。

２５４：名無しの冒険者
だよなー。
まさか初日から暴れるとは思わなかったけど。
俺今中央ギルドにいるんだけど、早速、手配書貼り出されてた。
しかも、リアルタイムで懸賞金がガンガン上がってるわ。

どんだけ殺ってるんだよｗｗｗ

２５５：名無しの冒険者
あの～。
なんかさっきから一部の人達は犯人の正体知ってるみたいな感じですけど、我々にも教えてもらえませんか？

２５６：名無しの冒険者
お前らβテスターだろ!?
内輪だけでわかり合ってないで、新参の俺らにも情報くれ！

２５７：名無しの冒険者
そうだそうだ！

２５８：名無しの冒険者

おっと、こいつは失礼。
では、奴について説明しよう。
奴はβ版において対人戦最強と呼ばれた男……その名も『死神』だ！
ランダムにエリアを徘徊して視界に入った奴をキルしてるから、もし出会ったら死を覚悟しとけ。

２５９：名無しの冒険者
なんだそりゃ!?
超迷惑じゃん!!
運営に通報とかしないのか？

２６０：名無しの冒険者
ところがどっこい。
このゲームではPK（プレイヤーキラー）も立派なプレイスタイルの一つとして認められてるんだな～これが。

２６１：名無しの冒険者
オープニングムービーでも、そんな感じの事言ってたっしょ。
道を踏み外すのもなんたら～、みたいな感じで。

２６２：名無しの冒険者
ああ!!
そういえば言ってたような気がする!!

２６３：名無しの冒険者
それでもPKが気に食わない連中はβの時もいたから、大手のギルドとかPK（プレイヤーキラーキラー）
……このゲームじゃ賞金稼ぎって呼ばれてる連中が、躍起になって死神を狩ろうとしてた事もあったけどね。
最終的には、全員皆殺しにされたけど。

２６４：名無しの冒険者
あれな。
死神と『剣聖』の戦いは見ごたえあったわ。

２６５：名無しの冒険者
皆殺しとか、死神どんだけ強いの!?
チート？

２６６：名無しの冒険者
いや、正面からぶつかった訳じゃなくて、隠れながら一撃離脱のゲリラ戦みたいな事された。
俺も『王道騎士団』の一員として参加してたけど、あれは怖かったなぁ……。

２６７：名無しの冒険者
御愁傷様。

２６８：名無しの冒険者
それにしても『死神』って……。
中二病かよ。
仮面の下は痛い人なのか？

２６９：名無しの冒険者
いや、本人が言い出した訳じゃないぞ。
悪乗りした奴らが掲示板で有名なプレイヤーを二つ名で呼んでるうちに定着した感じだ。

２７０：名無しの冒険者
運営まで乗ってきたしな。

２７１：名無しの冒険者

他にも『剣聖』とか『聖女』とか呼ばれてる人達もいるぞ。
PKだと『死神』の他には、『妖刀』とか『剛力』あたりが有名だぜ。

２７２：名無しの冒険者
全員、戦ったら死を覚悟するレベルの凄腕だから注意！

２７３：名無しの冒険者
注意のしようがなくね？

２７４：名無しの冒険者
たしかに！

２７５：名無しの冒険者
まあ、とにかく遭遇しない事を祈るしかないわな。

6　召集

「ギャアアアア！！！」

《レベルアップ！　ＬＶ９からＬＶ１０になりました》

《ステータスポイントを入手しました》

《スキルポイントを入手しました》

最後の一人を斬り伏せ、俺はようやく一息ついた。

もうこの場にプレイヤーは俺とマインの二人しか残っていない。

他の奴らは、逃げた奴以外全員殺した。

数の暴力を相手にするのは中々に骨が折れたが、対大人数用の戦い方というものがある。

立ち回りによって同士討ちを誘うのだ。

このゲームでフレンドリーファイアは発生しないが、それはパーティーメンバーに対してだけの話。

レイドクエストでもないのに複数のパーティーが共闘すれば、普通に同士討ちが

発生する。
相手の放った矢や魔法を他のパーティーを盾にして防ぐ。
ダメージを稼げる上に、それ以降はフレンドリーファイアを気にして動きが固くなる。
近接戦闘も同じく。
他の奴に当てないように武器を振るのは意外と難しい。
ましてや、この場に偶然居合わせただけの連中と連携をとるのは至難の技だ。
その隙を突けば、一見絶望的に見える数の暴力も崩す事ができる。
それでも俺の防御力を考えれば、一回か二回事故が起きただけでアウトだ。
難易度の高い戦闘だった事に変わりはない。
だが、それが良い。
実に楽しい時間だった。
結構な人数を狩ったおかげでレベルも大幅に上がった。
おそらく、現時点ではトップクラスのレベル帯に到達しただろう。
これほど経験値効率の良いレベル上げは早々ないからな。

早速ポイントを割り振る。
戦っている間はそんな暇がなかったのだ。
そうしてメニュー画面を弄りながら、マインの所に戻った。
「うわあああ！！！」
「ムッ!?」
突然マインが剣で斬りかかって来たので、あわてて大鎌で受け止めた。
いや、マインとはパーティーを組んだままだから、斬られてもダメージは発生しないが……。
それでも、突然襲われたら咄嗟に手が出るのが人間だろう。
「マイン。何のつもりだ？」
「お、お兄ちゃんが……!!　お兄ちゃんが……!!　お兄ちゃんが非行に走ったあああああああ！！！」
ヒコウ？
何を言ってるんだこいつは？
「うわあああ！！！」

「待て！　落ち着け！　何の話だ!?」
「とぼけないでよ!!　そんな中二病全開の格好で人を襲うなんて……!!　立派な犯罪者だよ!!　非行に走った不良少年そのものじゃん!!」
「誰が不良だ!!　そして誰が中二病全開だ!!」
俺をあんな人種と一緒にするな!!
このゲームでは、こういう格好が普通なだけだ!!
「ねえ？　なんでお兄ちゃんは道を踏み外しちゃったの？　学校で虐められたりしたの？　そのストレスをゲームで発散してるの？　なんでそうなる前に私達家族に相談してくれなかったの!?」
「頭の中で勝手にドラマを作るな!!　俺は単純にこのプレイスタイルが気に入ってるだけだ！　それ以外に理由などない！」
たしかに学校では少し孤立気味だが、ただのボッチだ。
断じて虐められている訳ではないぞ。
「うわあああ！！！」
「落　ち　着　け　！！！」

尚も剣を振り回すマインの頭に大鎌の腹を叩きつけた。
パーティーメンバーの攻撃でダメージは発生しないが、殴られた衝撃までは無効化されない。
それによってマインを地面に叩き伏せる。
「ハァ……。いいかマイン。俺はモンスターを狩るよりも、生産職をやるよりも、対人戦闘に楽しみを見いだしただけだ。それにこのゲームではPKも一つのプレイスタイルとして認められてる。お前が心配するような事は何もないからな」
「ぐすんっ……。本当に？　ゲームとリアルの区別がつかなくなって、リアルでも暴れたりしない？」
「する訳ないだろ。どこの異常者だそれは？」
「……そっか」
そこまで言ってようやくマインは落ち着いたのか、緩慢とした動きで立ち上がった。
もう暴れそうな気配はない。
「ごめんね……。まさか真面目なお兄ちゃんがPKに手を染めてるとは思わなくて。

思いっきり動揺しちゃったよ」

動揺どころか、もはや錯乱していたぞ。

まさかこんな事で実の妹に剣を向けられる事になるとは思わなかった。

「でもでも！　PKは色んなゲームで嫌われてる行為だからね！　ゲームを楽しむのは良い事だけど……程々に自重してね！」

「善処する」

まあ、頭の隅に置いておく程度には意識しておこう。

と、そこでピロリンという音が聞こえた。

メールの受信音だ。

俺はメニューを開いてメールボックスを弄り始めた。

「お兄ちゃん？　何してるの？」

「メールだ」

このゲームでは、メールや通信の際の音は当事者にしか聞こえないようになっている。

隠れている最中に敵に聞こえでもしたら致命的だからな。

だからこの音もマインには聞こえていなかったという訳だ。
俺は新着のメールを開いた。
『ギルド跡地にて待つ』
簡素な文章。
差出人は……あいつか。
無視してもいいが、さてどうするか？
「誰からだったの？」
「β版の時に所属していたギルドのギルドマスターからだ。召集のメールだった」
「おお！　お兄ちゃんの所属ギルド！　興味ある！　行きたい行きたい！」
マインがそう言うのなら行くか。
今日はこいつに付き合うという約束だから無視しようかとも思ったが、本人が行きたいというのなら別にいいだろう。
俺は「妹を一緒に連れて行く」という内容の返信をしてから、変装を解いて街に向かった。
「ねえねえ！　ギルドってどんな感じだったの？　楽しかった？　友達とか出来

た？」

「母さんのような事を聞いてくるなお前は……。まあ、俺の所属してたところはかなり緩い感じだった。各々が好き勝手にやって、必要な時だけ協力する。だが、メンバー同士の仲は良い方だったと思うぞ」

「へ～！　早く会ってみたいな～！」

そんな話をしている間に街の正門を通り過ぎる。

中に入るのではなく、街の周囲を囲む城壁に沿って歩いた。

「ねえ、お兄ちゃん……？　門通り過ぎちゃったよ？　こっちでいいの？」

「ああ。こっちで合ってる」

そこからさらに歩いた所で、ごちゃごちゃとして汚い雰囲気の場所についた。

スラム街だ。

設定としては、街の中に入れない貧乏人や荒くれ者、ならず者といった連中が集う場所となっている。

その証拠に、世紀末のチンピラのようなＮＰＣをよく見かけるようになった。

「ねえ、お兄ちゃん!?　本当に！　本当にこっちで合ってるの!?」

「合ってる」
不穏な空気を感じとったマインが悲鳴のような声で聞いてきたが、黙殺する。
行きたいと言ったのはお前だ。
まあ、チンピラに襲われるようなら助けるが。
スラム街の表通りとも言える場所を歩く。
ここも一応は街。
ボロい建物や怪しげな店舗が建ち並んでいるが、建物があれば街道もある。
街道になっている場所が表通りだ。
だが、目的地はここにはない。
俺はさらに裏道に入った。
マインが尻込みしながらもついて来る。
スラム街の裏道。
それはチンピラという名のモンスターが襲いかかって来る危険ゾーンだ。
表通りでもそれは変わらないが、遭遇率が違う。
まあ、スラム街とはいえ、ここは始まりの街。

そんなに強いチンピラＮＰＣはいない。
注意していれば、レベル５くらいの力でも突破できるだろう。
マインはギリギリだな。
幸いにしてそんなイベントは起こる事なく、目的地に辿り着く事ができた。
隠れた場所にある一件の酒場。
β版の時のギルドホームだ。
その扉を開いて中に入る。
前に来た時とは内装が違う。
β版の時は内装を弄っていたんだが、さすがにそれは初期化されているらしい。
今はただの殺風景な場末の酒場だ。
「待っていたぞ。我が同胞よ」
そして、酒場のカウンターに足を組んで座っている、目元を覆うタイプの仮面を付けた一人の男。
バーテンダーもいないのにグラスを手の中で弄んでいる姿は滑稽だが、本人はかっこいいと思っているのだろう。

口は挟むまい。

「そして、ようこそお嬢さん。我らが夢の跡地、闇ギルド『サクリファイス』の本拠地へ！　フハハハハハ!!」

突然マントを翻して笑い出すな。

ウチの妹が引いてるだろうが。

「お、お兄ちゃん……この人……何……？」

「こいつは……」

「おっと！　自己紹介が遅れてしまったな！　誠に申し訳ない。――私は闇ギルド『サクリファイス』ギルドマスター！　『深淵』のカタストロフ！　以後お見知りおきを！　フハハハハハ!!」

マインが理解できないモノを見る目でカタストロフを見ていた。

こいつがお前の会いたがっていた奴だぞ。

β時代、俺が所属していたギルド『サクリファイス』のギルドマスターにして、生粋の中二病患者、カタストロフ。

7　闇ギルド

「お兄ちゃん、ちょっと」
急に真顔になったマインに手招きされ、俺達は尚も高笑いを続けるカタストロフに背を向けて内緒話を始めた。
「色々言いたい事はあるけど、とりあえずあの人は何なの？」
「見ての通りただの変人だ。このゲームにはああいう人種もいる。付き合い方のコツは言動を一々気にせず、そういう生き物だと思って接する事だそうだ」
俺はこのギルドでの先輩にあたる奴からそう教わった。
マインは頭が痛いのか、額を押さえていた。
「……じゃあ次。闇ギルドって何？」
「正規の手段を使わずに作られたギルドの事だ。運営がやっている中央ギルドの支援を受けられない代わりに制約もないから、あらゆる意味で自由度が高い。ならず者やお尋ね者が所属できるくらいにな」
マインは頭を抱えてしまった。

小さなうめき声まで聞こえて来た。
「……つまり、ここはそんな闇ギルドの一つで、お兄ちゃんはそこに所属してたって事？」
「そういう事だ。もっとも、β版のデータはほとんど初期化されているから、ここにギルドホームとしての機能は残っていないようだがな」
ギルド設立クエストができるようになるのもまだ先だろうし、ここはまさしく跡地と言ったところか。
「まさか、そんなアングラな所に連れて来られるなんて……！」
「逆に聞くが。まともなギルドがこんな場所にあるとでも思ったのか？」
「思ってないよ!!　それでもお兄ちゃんを信じてついて来たんだよ!!　なのに案の定闇ギルドって!!　闇ギルドって!!」
二回言ったな。
「PKがまともなギルドに入れる訳ないだろ」
「PKも一つのプレイスタイルとして認められてるって言ったのお兄ちゃんだよね!?」

「だが、デメリットがないとも言っていない」
マインは項垂れてしまった。
その顔には諦めのような、嘆きのような複雑な感情が浮かんでいた。
そんな顔をされても困るんだが……。
「真面目なお兄ちゃんはどこに行っちゃったの……？」
「リアルに置いて来た。それに、ゲームで息抜きをしろと言ったのはお前だ」
「……そうだった」
その一言でマインは完全に沈黙した。
心の中でいったい何を思っているのか。
とりあえず、その死んだ目をして笑うのはやめろ。
痛ましくて見てられん。
何か悪い事をしたような気持ちになるだろうが。
「キョウよ。話は済んだのか？」
「見ての通りだ」
「ふむ。見てわからんから聞いたのだが、まあ、よかろう。

それより貴様、初日から盛大にやらかしてくれたようではないか！　先程中央ギルドに行って来たが、早速手配書が出回っていたぞ！　初日から懸賞金２００万ゴールドとは、さすがは『死神』と言ったところだな！　私も鼻が高いぞ！　フハハハハハ!!」

２００万。

一度のキルでそれだけの値がつくのは稀だな。

つまり、さっき暴れた時にそれだけの人数を殺していたという事か。

これも序盤ならではだろう。

スキルや装備が出揃い、連携がしっかりとした中盤以降の敵相手ではこうはいかない。

「ちょっと待ってください。懸賞金って何の話ですか？　あと、し、死神って……？」

項垂れていたマインがバッと顔を上げて質問してきた。

まるで聞いてはいけない事を聞こうとしているかのように、その顔は緊張で強張っている。

そんなに大した話じゃないぞ。
所詮ゲームの中の話だ。
「それは……」
「説明してやろう！　懸賞金とは！　何人ものプレイヤーをキルしたり、重要拠点の占拠、狩場の独占、そういった悪役プレイをしたプレイヤーの首に運営がかけるゴールドの事だ！
懸賞金のかかったプレイヤーは『賞金首』と呼ばれ、正規ギルドへの所属不可を始めとした様々な縛りを受ける！　さらにＰＫＫこと賞金稼ぎや街の衛兵に狙われるようになるぞ！
そして、こいつはβ版において夥しい数のプレイヤーを虐殺し、その首にゲーム内最高金額の懸賞金をかけられた最強のPK（プレイヤーキラー）なのだ！　人々は畏怖を籠めて、こいつの事を『死神』と呼んだ！　どうだ妹！　かっこよかろう！　フハハハハハ!!」
「カタストロフ、なぜお前が誇らしそうに語る……」
別にお前の手柄でも何でもないからな。

そして、マインはワナワナと震え出した。
衝撃の真実を知ってしまったという顔だ。
なんだか、そこはかとなく嫌な予感がするな……。
「あの……。その懸賞金を取り消すにはどうしたらいいんですか？」
「簡単だ！　他のプレイヤーにキルされればいい！　一度でも他のプレイヤーに敗れれば懸賞金は支払われリセットされる。故に懸賞金額を上げ続ける事は難しく、PKにとって己の首にかかった懸賞金は誇りであり、一種のステータスなのだ！」
「お兄ちゃん覚悟!!」
「やめい！」
案の定、カタストロフの話を聞いたマインが剣で斬りかかって来た。
まだパーティーは解消されていないのでダメージは通らないが、一応白刃取りで受け止めておく。
このスラム街は非戦闘エリアではないのだ。
「それよりカタストロフ。他の連中はどうした？」
荒れ狂うマインの相手をしながら、気になっていた事をカタストロフに聞く。

まあ、予想はついているがな。

「俺のメールに律儀に返信を寄越してくれたのはお前だけだ。サクラとマックスはお前の後に手配書が貼り出されていた。故にログインはしている。

武器子は作業場に入って行くのを見たからな。当分は缶詰だろう。

ハンターは完全に消息不明だ」

「何、その協調性のなさ!?」

マインが剣を振り回しながら突っ込みを入れてくるが、俺としては予想通りだ。

ウチのギルドはかなり緩い。

ギルドマスターからの召集を、ほぼ全員が無視するくらいにな。

かくいう俺もマインが興味を示さなければ無視していた。

それでも今日は初日だ。

気まぐれに一人か二人くらいは来るかとも思ったが、そうでもなかったらしい。

俺達が来なければ、カタストロフはここで一人寂しく初日を終えていたかもしれないな。

そんな事を思っていた時、酒場の扉が開けられた。
「なんだか騒がしいわね」
そうして入って来たのは、腰に刀を差した一人の女。
女にしては高い身長とモデルのようなスタイル、そして桜色の髪が特徴の女だ。
どうやらこのギルドは、俺が思っていたよりは好かれていたらしい。
「おお！　サクラか！　久しいな！　待っていたぞ！」
「あなたも相変わらずみたいね。元気そうで何よりだわ」
刀を持った女、サクラは無表情にそう言った。
この無表情は決してカタストロフに一切興味がない訳ではなく、こいつのデフォルトの表情だ。
いわゆるクール系というやつだろう。
よくわからんが。
「それより、そっちの子は初めて見る顔ね。随分キョウと仲が良いみたいだけど、あなたの彼女？」
サクラの視線がこっちに向いた。

今の俺はマインに襲われてる最中だぞ。
何をどうしたらそう見える？
……面倒な事になった。
「いや、あの、違いま……」
「ねえ？　あなた彼女が出来たの？　ゲームの中でもイチャついてるの？　リア充デビューしたの？」
マインが何か言おうとしたのを無視してサクラが捲し立てる。
こうなったら、こいつは人の話を聞かない。
無表情なのに冷たい殺気を纏って俺に詰め寄るサクラの姿に、マインはちょっと怯えていた。
「私がそういうの大っ嫌いって事知っててイチャつくなんて……。――――斬られたいの？」
「ひぅ!?」
殺気を爆発させて腰の刀を抜いたサクラを見て、マインが悲鳴を上げた。
サクラの目はイッてしまっている。

その瞳には、凄まじく深い闇が宿っている。
この目で見られると、まるで深淵を覗いているような気分になる。
「サクラ、落ち着け。こいつは俺の妹だ。彼女じゃない」
「……本当に？　神に誓って？」
「ああ」
「実は血の繋がらない妹で、これから彼女になるという可能性は？」
「ない。正真正銘血の繋がった実の妹だ」
「禁断の恋に落ちる可能性は……」
「ない。しつこいぞ」
俺はシスコンではない。
「……なら、いいわ。疑っちゃってごめんなさいね」
「ハァ……」
そこまで言ってようやくサクラは落ち着いたのか、刀を納めて近くのカウンターに座った。
相変わらず面倒な女だ。

マインがカタストロフに小声で質問しているのが聞こえた。
「あの……この人は……？」
「『サクリファイス』ギルドメンバーの一人、『妖刀』のサクラだ。見ての通り、リア充に対して並々ならぬ怨念を持っている。その怨みをゲームで発散する為にPKになった奴だ。もし貴様に彼氏が出来たのならば、奴にだけは知られない方がいいぞ。斬られるからな」
「なんでこのギルドは揃いも揃って……!!」
マインは再び頭を抱えてしまった。
まあ、このギルドは奇人変人の巣窟だからな。
ギルドマスターがそういう奴を狙ってスカウトしたのだから仕方がない。
その思考回路は理解できないが。
と、そこで俺はふと思い至ってメニューを開いた。
そして時間を確認する。
……もうこんな時間か。
思ったより時間が流れるのが早い。

「ああ!!　もういい!!　お兄ちゃん！　もう一回狩りに行くよ!!　こうなったらとことんゲームをエンジョイしてやる!!」

「待てマイン」

気炎を上げるマインを静止する。

お前にはこれからやらねばならない事があるだろ。

「何!?　お兄ちゃん!?」

「今日のゲームはここまでだ。俺は落ちる。お前も早くしろよ。――――――この後は宿題の時間だ」

「えええええ！!?」

絶叫を上げるマイン。

仕方ないだろう。

今からじゃないと、寝るまでの間にお前が宿題を片付けられない。

「という訳だ。またな」

「うむ！　人にはそれぞれ予定というものがあるからな！　仕方あるまい！　去らばだ！」

「おやすみなさい」
カタストロフとサクラに別れを済ませ、ログアウトのボタンに手を伸ばす。
「マイン。お前も早くしろ。落ちないようなら外から強制終了させるからな。……ちなみに宿題を手伝ったりはしない。俺は見張るだけだ。自分で頑張れ」
「ちょ、ちょっとお兄ちゃん!?　今日一日で凄まじいショックを受けた妹に対してその仕打ちは酷いよ!!」
「知るか」
このまま放置すれば、こいつは確実に夏休みの宿題を溜め込む。
最終日に手伝わされるくらいなら、環視の下で早期に終わらせてやった方がこいつの為だ。
安心しろ。
ノルマさえ果たせば、残りの時間はちゃんとゲームをやらせてやる。
「ああ、それと。その気になれば部屋の鍵くらい外せるからな。間違っても籠城なんて考えるなよ」
そう言い残して俺はログアウトした。

マインの絶望に染まる表情を見ながら。

そうして、【アドベンチャーズ・オンライン】初日は終わりを迎えた。

8　素材集め

疲れただの、手伝ってだのとほざく舞のケツを叩き、ある程度の宿題をやらせた翌日。

俺達は再び【アドベンチャーズ・オンライン】にログインした。

「今日こそ遊び尽くすぞーーー!!」

隣でマインが気炎を上げている。

今回は止めない。

しっかりとノルマは果たしたからな。

約束通り、存分にゲームを楽しむがいい。

「マイン。俺はギルドの方に行くが、お前は……」

「今日は別行動で!!　またね、お兄ちゃん！」

そう言ってマインは走り去って行った。

昨日の事が若干トラウマにでもなったか？

ウチのギルドメンバーは、インパクトのあるキワモノが多いからな。

仕方がないか。

気を取り直して、俺はギルドメンバーの一人にメールを送った。

そいつに頼みたい事があるのだ。

俺達は基本的に協調性がないが、必要となったらちゃんと力を貸し合う。

別に仲が悪い訳でも、チームワークが皆無という訳でもない。

そうしてギルドに向けて歩いてる間に返信が来た。

『とりあえずギルドに集合してください！　他の方からも依頼を受けているので、纏めて片付けます！』

との事だった。

ギルドには既に向かっている最中だから好都合だ。

『了解した』というメールを送り、やや早足でギルドに向かう。

正門を出て、スラム街に入り、今回は絡んできたチンピラＮＰＣを斬り捨ててギルドに辿り着く。

扉を開けて中に入れば、そこには三人のメンバーがいた。

その内二人は、昨日も会ったサクラとカタストロフだった。

「おはよう」
「ああ」
「フフフ。来たか死神。早かったな。今日は妹は一緒ではないのか？」
「今日は別行動だ」
「それは残念だ。あのツッコミは是非とも我がギルドに欲しかったのだが」
こいつはいったい何を基準にスカウトしているのだろうか。
そんないつも通りのカタストロフはともかく、サクラは昨日と違って髪を藍色に染め、狐の仮面を付けていた。
PKは素顔で手配書が出回ると何かと不便だから、殺る時は基本的に顔を隠して変装する。
俺が昨日変装したのも同じ理由だ。
カタストロフは常時変装状態だから関係ないが。
サクラがこの格好をしているという事は、つまりそういう事だろう。
この後の予定が読めた。
そして、最後の知り合いが声をかけて来た。

「待ってましたよキョウさん！　さあ、早く行きましょう！　迅速に！　速やかに！　時間は有限なのです！」

「武器子。とりあえず簡単な説明がほしいんだが……」

このせっかちな女が、今回俺が用のあった相手。

闇ギルド『サクリファイス』の専属鍛冶師、武器子。

三度の飯より武器と生産が大好きな廃ゲーマーだ。

「今回はお三方から装備作成の依頼を受けましたので、素材集めと私のレベル上げを兼ねてこれから四人で狩りに行きます！　以上！　説明終わり！　さあ、早く準備してください！　私は一刻も早く終わらせて作業場に籠って愛しの武器達を作りたいのです!!」

「了解した」

俺は生産職についてあまり詳しくは知らないが、彼らにも一定のレベルが必要だというのは知っている。

特に器用さのステータスであるＤＥＸは、生産職の命とまで言われているらしい。

それを高めるステータスポイントは必須。

故にレベル上げは必須なのだとか。
そして、素材だ。
素材がなければアイテムは作れない。
普段はどこぞで買うなり、依頼主に取りに行かせるなり、逆に自分で依頼するなりして素材を集める武器子だが、今回は自分のレベル上げを兼ねて同行すると。
パーティーを組んで、少しでも戦闘に参加すれば経験値はもらえるからな。
β版の時もたまにやっていた、武器子のパワーレベリングというやつだ。
早速、俺は昨日も使った変装セット一式を使って死神スタイルになり、他の三人とパーティーを組んでフィールドに繰り出した。
今回向かったのは『始まりの森林』。
昨日マインと一緒に行った『始まりの草原』よりは難易度の高い場所だ。
もっとも、初期の狩場という点は変わらない為、やはりそこまで強いモンスターはいない。
そして、道中での会話は、今回の依頼についての話になった。
「やはり、貴様らも装備作成の依頼を武器子に出したのだな」

「そうよ。やっぱり『紅桜』がないと落ち着かないもの」
「俺も早く『デスサイズ』を取り戻したい。あれが一番手に馴染むからな」
β版の時に俺達が使っていた武器の名前だ。
このゲームは初期の武器を後付けで強化し、中盤以降にも通じる性能にグレードアップさせる事ができる。
そのシステムを使って、俺とサクラ、それとハンターはずっと一つの武器を強化しながら使い続けていた。
愛着もあるし、手に馴染む武器が一番使いやすくて強いのは道理だ。
だからこそ、俺は二日目という早い段階で武器子に依頼を出した。
おそらくサクラも似たような理由だろう。
「わかるぞ！　俺も早くこの地味なマントを脱ぎ捨て、高貴なマントを身に付けたいからな！　こんなマントでは一週間後の第一回イベントに出られたものではない！」
カタストロフは若干目的が違うようだが、まあ、別にいいだろう。
困る事でもない。

そうして出てきたモンスターを倒しながら、森を進む。
武器子に投げナイフを使わせ、モンスターに若干のダメージを与えてから、俺達の誰かが仕留める。
こうすれば生産特化で戦闘能力皆無の武器子にも経験値が入る。
それが今回の目的の半分なのだから、面倒でもその過程を挟まなければならない。
そして、もう半分の目的を果たすべく、俺達は武器を振るう。
「ギャアアア！！！」
森の中を呑気に歩いていたパーティーを襲撃して殺す。
《隠密》のスキルを取得した俺とサクラが奇襲し、それで倒せなかった奴はカタストロフの闇魔法で葬る。
そして、イベントリをチェック。
目当ての素材はなかった。
「カタストロ……」
「おっと！　今は『深淵』と呼ぶがいい『死神』よ！　それが掟であろう？」
「……そうだったな」

ギルド内ルールの一つ。
変装中はプレイヤーネームではなく、二つ名で呼び合うべし。
カタストロフが決めたルールだが、これは一応必要な事でもある。
素顔でPKをやるのと同じように、プレイヤーネームがバレると、少し面倒な事になるからな。
……正直、このルールはカタストロフの趣味が理由の九割だとも思っているが。
「じゃあ、深淵。そっちは必要な素材が出たか？」
「ハズレだな。クズアイテムばかりだ。『妖刀』よ。そちらはどうだ？」
「私も同じく。まあ、さっきの連中じゃボスは倒せないでしょうし、当然かしらね」
今、俺達が狙っている素材の一つは、このエリアのボスモンスター『アーマードベア』のドロップアイテム。
他にも必要な素材はあるが、それは狩りを続ける内に手に入るだろうから問題はない。
だが、ボスモンスターとなると倒すのが面倒だ。
特に俺は対人特化のステータスをしているから、やられる可能性も高い。

防御力０じゃ、アーマードベアの一撃でノックダウンだろう。
戦わずに、PK行為でゲットできればそれが一番なんだがな。
その後もしばらく狩りを続け、武器子のレベルは充分に上がり、必要な素材も大体が集まった。
だが、アーマードベアの素材だけは出ない。
武器子曰く「なくても作れない事はないですが、性能は期待しないでください」との事だ。
できれば手に入れたい。
「これだけ狩って出てこないなんてね……」
「仕方あるまい。アーマードベア討伐は最低でもレベル10以上のプレイヤーが五人は必要という難易度。開始二日目で狩れる者など、ほとんどいないだろう」
「どうする？　俺達で狩りに行くか、それとも引くか」
俺の質問に、仲間達は考えこんだ。
「ハイハイ！　私は断然狩るに一票です！　やっぱり武器は強い方が輝きますから!!」

武器子は即答だったが。

「……私は正直どっちでもいいわ。確かに強い武器は欲しいけれど、死に戻ってこれまで集めたアイテムを失うのもアレだし」

そして、次にサクラが先に答えた。

俺もそれに続いて口を開く。

「俺もサクラと同意見だ。あとはお前が決めろ。どうする？　ギルドマスター」

俺とサクラは中立。

これで決定権はカタストロフに委ねられた。

なんだかんだで、こいつがリーダーだからな。

β版でも、最終的な決定はカタストロフが下す事が多かった。

「……フッ。ここで引いては最凶ギルド『サクリファイス』の名折れ。アーマードベアごときで引き下がる我らではないわ！　行くぞ!!」

そう言って、カタストロフはマントを翻してアーマードベアの生息地へ向かった。

俺達は顔を見合わせた後、肩を竦めてその後を追う。

そうして、俺達はボスモンスターに挑む事になった。

9　アーマードベア

目的地に向けて歩く事しばらく。
道中でもモンスターとプレイヤーを狩って、ある程度の経験値を稼ぎながら辿り着いた場所に、そいつはいた。
アーマードベア。
その名の通り、頭部や胸部、腕の先などに鎧のような甲殻を纏った熊のモンスター。
体長3メートルは超えるであろう巨体は、ボスモンスターの名に恥じない迫力を持っていた。
突撃を食らっただけで、俺や後衛職は一発アウトだろう。
それに、ボスモンスターというやつは、プレイヤーと比べて防御力やHPの桁が違う。
持久戦になれば、ミスれば終わりの俺はかなり不利。
強敵だ。

「では、始めるぞ」

呑気にハチミツっぽいものを食べているアーマードベアに、カタストロフが手に持った杖の先端を向けた。

こいつは純魔法使いタイプ。

『深淵』と名乗るだけあって闇魔法を使う。

アーマードベアはまだ俺達に気づいていない。

一方的に叩き込める初撃でどれだけ削れるかだな……。

「《ダークランサー》!!」

昨日、マインや他の魔法使いが使っていたボール系の魔法の一段階上。

カタストロフの放った闇の槍が無防備なアーマードベアの背中に突き刺さる。

「グオオオオオオオオオオオオ!!!!」

絶叫を上げて戦闘態勢に入るアーマードベア。

その頭上にHPバーが表示され戦闘が始まった。

アーマードベアが怒りの形相で、攻撃を加えたカタストロフに迫って来る。

純後衛職のカタストロフがこの突進を受けたら終わりだろう。

そうなる前に、前衛職である俺とサクラが飛び出した。
「一割も削れてないじゃない。……長くなりそうね」
「ボスモンスター相手ならそんなものだろう。――先に行くぞ」
サクラは物理系ステータスにバランス良くポイントを振った正統派剣士だ。
スピードでは極振りの俺に一歩劣る。
故に、サクラよりも俺の方が少しだけ早くアーマードベアと接触した。
鎧の付いた腕の一振りをサイドステップでかわし、脇腹に大鎌を突き立て、そのまま走り抜けた。
アーマードベアの体に、一筋の赤い傷痕がつけられる。
しかし、それでもアーマードベアのHPは思ったよりも減らない。
鎧のない部分を狙ったとはいえ、やはり初期装備では大したダメージは与えられないか。
「グオオオオオオオオオオオオ！！！」
だが、俺の攻撃が当たった事で、アーマードベアの標的がカタストロフから俺に移る。

滅茶苦茶に繰り出される爪撃をバックステップで避け、ついでに腕に攻撃を加えてみたが、案の定、ダメージは０。

これは、鎧部分を狙っても無駄だな。

それでも、こうして俺が的になって引き付けている間は、他の三人がフリーになる。

「《一閃》」

「《ダークランサー》!!」

「《投擲》!!」

サクラのアーツ、マインが使った《スラッシュ》の刀版のような技がアーマードベアの足を。

カタストロフの闇魔法が脇腹を。

武器子の投げナイフが右目を。

それぞれ貫いた。

それでも累計ダメージは、アーマードベアのHPの三割にも満たないが、確実に削れてきてはいる。

特に武器子の投げナイフが目を貫いたのは大きい。
この手のダメージは部位欠損という状態異常となり、HPを削る以上に大きなダメージとなる。
今、アーマードベアは右目が見えていない筈だ。
動き回る相手に対して、あの小さな的を狙って攻撃するとは、さすがはDEX特化。
あいつは戦力としてカウントしていなかったが、意外と良い仕事をしてくれた。
多分、偶然だと思うが。
「グオオオオオオオオオオオオ！！！」
右目が相当痛かったのか、アーマードベアは残った左目で武器子を睨み付け、雄叫びを上げながら突進しようとした。
隙だらけだ。
「《デスワルツ》」
「グオオオオオオオオ！！？」
《大鎌：LV1》で習得できるアーツ。

回転斬りのような攻撃が、アーマードベアの足を切り裂く。
俺とサクラの攻撃で足へのダメージが蓄積したのか、アーマードベアは地面に倒れこんだ。
目の前の標的から目を離すからそうなる。
モンスターに言っても仕方ないがな。
そして俺達は、倒れたアーマードベアに全員で猛攻を仕掛けた。
俺とサクラの斬撃が、カタストロフの闇魔法が、武器子の投げナイフが連続してアーマードベアに直撃し続け、HPをみるみる内に減らしていく。
だが、さすがにそれだけでは終わらない。
アーマードベアの残りHPが三割を切った時、明確な変化が起きた。
「グオオオ

んで衝撃を軽減した。
それでも、防御力０の俺では、かなりのダメージを受けた。
常時視界に表示されている自分のHPが半分を切っているのが見えた。
近くにいたサクラが声をかけて来る。
「大丈夫？」
「問題ない。まだ動ける」
「そう。良かった」
簡単なやり取りだが、それでいい。
俺達は、お互いの強さをよく知ってるからな。
「気をつけろ!!　来るぞ!!　状態異常『怒り』だ!!」
「グオオオ

俺は、怒りのままに振るわれる爪を冷静に避ける。
ステップでかわし、大鎌を使ってさばき、そらす。
その間に他の三人がダメージを稼ぐ。
標的が怒りに染まろうとも、俺達がやる事は同じだ。
そして遂に、アーマードベアのHPが一割を切る。
最後の抵抗とばかりに大きく振られた腕をジャンプして避ける。
俺は地面に叩きつけられた腕を踏み台にして、さらに跳ぶ。
空中で体を捻り、地面と逆さの体勢になってアーマードベアの後ろをとった。
そこで俺は勝負を決めにかかる。
スキル《大鎌：ＬＶ１０》で習得できるアーツを、アーマードベアに向けて放った。

「《斬首》」

モーションが大きく、しっかりと首筋に当てなければ発動しないという、とても

扱いの難しいアーツ。
対人戦ではまず使えない、大鎌という武器を象徴するかのような一撃。
故に、発動した時の威力は絶大。
アーマードベアの首が胴体を離れて宙に舞う。
残された胴体もまた、大きな音を立てて地面に倒れ伏し、光の粒子となって消滅した。
アーマードベアのHPは0になっていた。
《レベルアップ！　LV10からLV11になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
「ふぅ……」
そこまで見届けて、ようやく戦闘態勢を解く。
他のPKや賞金稼ぎが襲って来るかもしれない為、警戒は解かない。
それでも、アーマードベアとの戦闘は終わった。
他の三人が集まって来る。

「フハハハハ!!　やったではないか死神！　見事であったぞ！」
「おつかれさま」
「ああ。お前らもな」
「それよりも!!　皆さん早くドロップアイテムをチェックしてください!!　目的は討伐ではなく素材なんですよ!!　さぁ早く!!」
武器子が勝利の余韻を台無しにしてきたが、まあ、その通りではあるから良しとしよう。
言われるがままに全員がイベントリをチェックする。
俺のイベントリの中には、『鎧熊の爪』『鎧熊の骨』『鎧熊の甲殻』と、目的のアイテムが揃っていた。
問題なしだな。
「俺は問題ない」
「私も。爪か牙があれば刀は作れるんでしょう？」
「はい！　お任せください！」
「毛皮がない……だと……!?　これではマントが……！」

「あ。私の方にあるので、追加料金をいただければ作りますが」
「頼んだ!!」
そうして俺達は武器子に装備作成を改めて依頼し、武器子を街まで護衛した後に解散となった。
……やはりボスモンスターの相手は疲れたな。
今日はここまでにしておくか。
そして、俺はログアウトした。

10　第一回公式イベント　開始

「お兄ちゃん！　今日は遂にイベントの日だね!!」
アーマードベア討伐から約一週間。
朝食の時間に、舞がその話題を振ってきた。
父さんと母さんは早朝出勤でいない。
たまにはこんな日もある。
「そうだな」
「楽しみだなぁ～!!　どんな事やるんだろう？」
浮かれる舞を尻目にコーヒーを啜る。
美味くもなく、不味くもない。
いつものインスタントな味だ。
「ねえねえ！　β版の時はどんなイベントだったの？」
「あの時はシンプルなバトルロイヤルだった。今回もそんなに複雑な事はしないと思うぞ。初回だからな」

「そっか～！」

今日は【アドベンチャーズ・オンライン】のホームページで前々から告知されていた第一回公式イベントの日。

舞はワクワクが抑えられないようだ。

この日の為に、夏休みの宿題を消化するペースを上げて、今日一日分のノルマを先に終わらせていると言えば、どれだけ楽しみにしているのかがわかるだろう。

かくいう俺も楽しみだ。

今日は存分に暴れるとしよう。

そうして朝食を食べ終え、舞は即行で部屋へとダッシュした。

俺は洗い物を済ませてから部屋に戻り、VRギアを装着してログイン。

イベント開始は午前12時。

時間にはまだ余裕がある。

「ステータスの確認をしておくか」

街の中で死神スタイルになると悪目立ちするので、そういう心配のないスラム街

へと向かう。
前に取得しておいた《隠密》のスキルによって、チンピラＮＰＣに絡まれる心配もあまりない。
もし絡まれても、問題なく処理できる。
そんな場所で俺は死神スタイルに着替え、ステータス画面を開いた。

ーーー

キョウ　ＬＶ１５
ＨＰ　１００／１００
ＭＰ　５０／５０〈＋１５〉
ＳＴＲ：８５〈＋４０〉〈＋１０〉
ＶＩＴ：０〈－１８〉
ＡＧＩ：８５〈＋４〉〈＋１０〉
ＩＮＴ：０
ＤＥＸ：０
ステータスポイント　０

スキル
《大鎌：ＬＶ１５》《攻撃力上昇：ＬＶ１０》《速度上昇：ＬＶ１０》《危険感知：ＬＶ８》《投擲：ＬＶ８》《隠密：ＬＶ７》《気配感知：ＬＶ４》《ＨＰ自動回復：ＬＶ２》
スキルポイント　０

装備
武器：『デスサイズ』
頭部：『死神の仮面』
胴体：『魔術師のローブ』
右腕：『鎧熊の籠手』
左腕：『鎧熊の籠手』
脚部：『俊足のレザーブーツ』
装飾：『力のペンダント』

ーーー

『デスサイズ』

分類：大鎌

効果：〈ＳＴＲ＋30〉〈ＶＩＴ－30〉

ーーー

『死神の仮面』

分類：頭部装備

効果：〈ＭＰ＋10〉

ーーー

『魔術師のローブ』

分類：胴体装備

効果：〈ＭＰ＋5〉〈ＶＩＴ＋2〉

ーーー

『鎧熊の籠手』

分類：腕装備

効果：〈ＳＴＲ＋７〉〈ＶＩＴ＋10〉
ーーー
『俊足のレザーブーツ』
分類：脚部装備
効果：〈ＡＧＩ＋４〉
ーーー
『力のペンダント』
分類：装飾
効果：〈ＳＴＲ＋３〉
ーーー

レベルが上がり、俺も大分強くなった。
二日目の段階でレベル11まで上がったのに、残りの日数をかけて４レベルしか上がっていないが、これは仕方ない。
このゲームは格下を倒し続けても、あまり経験値が入らないようになっているからな。

大きくレベルを上げたいのなら、何度もアーマードベアのようなボスモンスターに挑む必要があっただろう。
それは面倒だからやらなかった。
そして、スキルの方も随分と増えた。
《危険感知》は自分が攻撃を受けそうになった時に知らせてくれるスキル。
ただし、本当にダメージを受ける直前にならないと発動しない上に、スキルレベルの低い内は発動自体しない事もざらという微妙な性能。
それでも、これに助けられた事は何度もある。
故に、俺は重宝している。
《投擲》は前にも使った、物を投げてダメージを与えるスキル。
これがあるのとないのとでは、投擲物でのダメージが大きく違う。
前に『錆びたナイフ』を投げた時に、一撃で相手を仕留められたのはこのスキルのおかげだ。
《隠密》は、その名の通り見つかりにくくなるスキル。
音の発生を抑えたり、感知系のスキルに引っ掛かりづらくしてくれる。

あくまでも見つかりにくいという程度で、見つかる時は普通に見つかるから過信は禁物だがな。

《気配感知》は、敵がどの辺りにいるのかがわかるようになる索敵スキル。

これを欺く為に《隠密》のスキルが存在すると言っても過言ではない程の高性能なスキルだ。

その分、取得するのに大量のスキルポイントが必要だった。

しかし、今のスキルレベルは4。

索敵範囲も狭く、現時点ではそこまで強いスキルとはいえない。

それでも、便利な事に変わりはない。

《HP自動回復》は、何もしなくてもHPを回復してくれるスキル。

ただし、その回復速度はかなり遅く、ポーションを使った方が手っ取り早い。

だが、俺はHPの数値自体が少ないから、その分回復が早いのだ。

それこそ、場合によっては戦闘中に全快できる程に。

俺のステータスは一発でも直撃を食らえば死ぬが、アーマードベアの時のように、かすり傷程度なら何回かは耐えられる。

このスキルはそれを補強する為に取った。
もっとも、一番最後に取得したスキル故に、まだスキルレベルは２。
今回のイベントでは、さほど役には立たないだろう。
そして、装備。
その中でも、一際異彩を放つ『デスサイズ』。
デスサイズは武器子が特殊な製法を使って作り上げた、俺の専用装備。
柄も刃も漆黒に染まった、まさに本物の死神が持っていそうな不気味な大鎌だ。
その性能は、圧倒的な攻撃力の代わりに防御を完全に捨てている。
せっかく他の装備で上がった防御力が相殺されてしまう程に。
武器子曰く、他の性能を犠牲にする事で特定の性能を大幅に向上させる製法があるらしい。
時間も金も素材も多く必要な上に、大体がこんな感じのキワモノ性能になるから、あまり使われない技術でもあるらしいが。
ちなみに、こうして見ると大きく防御力が低下したように見えるが、システム上、どれだけ数値が下がっても０を下回ってマイナスになる事はない。

つまり、俺の防御力は０のままだ。

だからこそ、デメリットを気にせずにデスサイズを使える。

他の装備は、間に合わせで済ませた。

『死神の仮面』は俺の代名詞だから別として、『魔術師のローブ』『俊足のレザーブーツ』『力のペンダント』はＮＰＣの店で適当に買い揃え、

『鎧熊の籠手』は、武器子がデスサイズをはじめとした装備の作成で忙しかったから、これまたＮＰＣの鍛冶師の所に素材を持ち込んで作ってもらった。

何故、鎧ではなくローブなのかというと、鎧を着けてもデスサイズのせいで防御力が上がらないからだ。

それなら、違う装備で少しでも他のステータスを上げた方がいい。

ＭＰはアーツで使うからな。

デスサイズと比べると大きく見劣りするような性能しかないが、現時点ではそれなりに上等な部類の装備。

今回はこれで充分。

β版の時に使っていた専用装備一式は、追々、武器子に作ってもらえばいい。

そうして確認作業を終え、最後の追い込みとばかりに多少の経験値稼ぎをしている内に、イベント開始時刻がやってきた。

『冒険者達よ。聞こえるか』

サーバー全体に響き渡るように、オープニングムービーの時にも聞いた、やたらと貫禄のある声が聞こえてきた。

『己の道を突き進む諸君に、試練の時がやってきた』
『今回の試練は戦いである。別々の道を進む諸君が一堂に会し、武を競う事となる』
『そして、試練を乗り越えし者達は、無二の報酬を得るだろう』
『この試練を受けるも良し。避けるも良し』
『ただ、己の心に従い、好きな道を選ぶがよい』

声が止むと同時に、運営から一通のメールが送られてきた。

ルールの説明と、参加の可否を問う内容。
メールの最後に、『このイベントに参加しますか？　ｙｅｓ／ｎｏ』という項目があった。
今回のルールは、β版の時と同じバトルロイヤル。
制限時間は１時間。
ただし、前回と違って、今回は最後まで生き残れば勝ちのサバイバルバトルではなく、ポイント制。
一人倒せば２ポイント。
逆に倒されれば―１ポイント。周囲に他のプレイヤーがいない地点からリスタートとなる。
そして、累計ポイントの多いプレイヤーの優勝。
上位入賞者には、特典が与えられる。
なるほど。
これなら即行で脱落するという事はなく、全員が最後までイベントを楽しめる訳だ。

β版の反省点を生かして改良を加えてきたか。
他の細かいルールにも一通り目を通し、『ｙｅｓ』を選択した。
すると、『登録名を入力してください』という画面が表れる。
このシステムは、イベントには出たいけど、目立つのは嫌だというプレイヤーへの配慮だ。
ここにプレイヤーネームとは違う名前を入力し、変装でもしていれば正体がバレるような事はまずない。
つまり、俺達のような賞金首も身バレを気にせずに参加できるという事だ。
俺は登録名の記入欄に『死神』と入力した。

『試練を望む者達よ。その行く末に幸あれ』

その声と共に、周りの景色が変わった。
スラム街の雑多な街並みから、木々が鬱蒼と生い茂った森の中へと。
別のサーバーに飛ばされたのだ。

これが、今回のバトルフィールド。
その一部。
《カウントダウンを開始します。10、9、8、7、6……》
さっきの声とは違う、音声ガイドがカウントダウンを始めた。
《5、4、3、2、1、0。――――これより、【アドベンチャーズ・オンライン】第一回公式イベントを開始します》
そして、イベントが始まった。

11　『剛力』

開幕速攻。

俺は《隠密》のスキルと高い機動力を最大限に生かし、木々の上を高速で移動しながら、見つけた獲物に人体の死角である上空から襲いかかり、デスサイズの餌食にした。

さすがデスサイズと言うべきか、生半可な装備では鎧ごと真っ二つにするような凶悪な切れ味を見せてくれた。

俺の攻撃力、ＳＴＲの数値は、装備とスキルによる補正を含めれば、余裕で三桁の大台に乗っている。

この結果はむしろ当然と言えた。

それに、β版時代にずっと使い続けてきた武器はとても手に馴染む。

重さ、長さ、形状、そういった要素を完璧に把握し、まるで体の一部のように自在に操る事ができる。

単純なステータスも、プレイヤースキルも大幅に向上した。

今の俺は相当強い。
そう実感できる。
そうして狩りを続けながらエリア内を移動する。
今回のバトルフィールドはこの森林エリアだけではない。
他にも山岳エリアや街エリアをはじめとした多種多様なエリアがある筈だ。
その広大なフィールドに獲物（プレイヤー）は散らばっている。
この森林エリアは、俺にとってかなり戦いやすい地形だ。
生い茂る木々が身を隠し、こちらからは《気配感知》のおかげでわりと簡単に標的を見つけられる。
戦闘になったときも、木々を足場にして立体的に動き回れば、かなり有利に立ち回れるだろう。
これがβ版の時のような、最後まで生き残れば勝ちのサバイバルなら、ここを拠点としていた。
だが、今回のルールはポイント制。
勝つ為にはより多くの標的を仕留めなければならない。

そう考えると、このエリアはあまり良くない。
身を隠しやすいという事は、逆に言えば敵を見つけにくいという事でもある。
いくら《気配感知》があるとはいえ、索敵範囲は狭し、限度がある。
できれば見通しの良いエリアに出たい。
危険ではあるが、その分、敵も見つけやすい筈だ。
そんな事を考えながら何人か見つけた獲物を仕留め、移動を続ける。
そこで《気配感知》に再び反応があった。
二人ほど、こちらに向かって来ている。
「嫌あああああああああああああ！！！」
「待てえええええええええええい！！！」
いや、《気配感知》に頼るまでもなく、大声で丸分かりだった。
現れたのは、身長二メートルを超える筋骨隆々の巨漢と、それに追いかけられる白髪の少女。
巨漢は上半身裸にマスク姿という変態だ。
リアルなら通報どころでは済まない光景だが、ここはゲームの中で、今はイベン

トの最中。

ならば、何の問題もない。

俺は追いかけられている白髪の少女に近づいた。

「こんな所で会うとは奇遇だな、マイン」

「お兄ちゃん！」

追われていた少女はマインだった。

俺を見て助かったとばかりに明るい表情になったが、それは勘違いだ。

デスサイズの刃がマインの体を両断した。

「へ？」

「悪いな。俺はこの手の勝負において、実の妹相手でも容赦はしない」

「お、お兄ちゃんの薄情者ーーー！！！」

そう叫びながら、マインは光の粒子となって消滅した。

悪いなマイン。

リスタートして頑張ってくれ。

そして、この場には、俺と半裸の変態だけが残された。

「死神ィイイイイイイッ！！！」
繰り出される変態の拳を避け、反撃にデスサイズを振るう。
しかし、変態はその巨体に似合わない俊敏な動きで刃を避けた。
まあ、予想通りだ。
「よくも我が筋肉の進む道を邪魔してくれたなぁ!!　あの少女はこの筋肉によって討ち倒し、筋肉の強さと素晴らしさを伝えるつもりであったというに!!」
出たな。
カタストロフ以上に理解できない、こいつの謎理論。
「相変わらずだなマックス。いや『剛力』。毎回思うが、あれじゃトラウマにしかならないと思うぞ」
「黙れぇい!!　こうなったら、代わりにお前を我が筋肉の糧としてくれる!!」
そう言って変態、改めマックスはパンチを繰り出して来た。
ボクシングのジャブのような、コンパクトで隙のない連続パンチ。
俺を相手に大振りは必要ないとわかっている奴の動きだ。
見た目も中身も脳筋のくせに、動きだけはよく考えられている。

スピードに任せてパンチの雨を避け、後ろに下がって強引に距離を取る。
そして、脚に力を込めてジャンプ。
木々の間を高速かつ不規則な軌道で跳び回り、奴を撹乱する。
「ぬぅ……!!」
この地形と俺の機動力は相性が良い。
今よりもステータスの高かったβ版時代に戦った相手すら翻弄できる程に。
マックスは俺を目で追えていない。
そして、完全に死角を取ったと確信したタイミングで、俺は背後から首筋目掛けてデスサイズを振った。
「小賢しいィ!!!」
「ムンッ!!」と言ってマックスが防御態勢を取った。
背中を丸め、振り上げた両腕で首と頭をガードする構え。
俺とデスサイズの前に生半可な防御は通用しない。
それこそ、そこら辺の鎧や盾なら正面から粉砕できる。
だが、そんなデスサイズの刃は、『剛力』という二つ名に相応しい太い腕を半ば

まで切り裂いたところで止まっていた。
「筋肉とは最強の鎧である!!」
攻撃を受けた事で俺の位置を特定したマックスが、背後を見ないままに強烈な裏拳を放ってきた。
それを、マックスの体に突き刺さったまま振り回されるデスサイズに合わせて跳躍する事で回避。
その時により深く傷口を抉りながらデスサイズを引き抜いて距離を取る。
……今のは危なかったな。
「ぬぅ!!　逃したか!!」
振り返って見れば、あれだけやっても腕の一本すら切断できていなかった。
しかも、そのダメージはみるみる内に回復していく。
さすがに全快するまでには時間がかかるだろうが、それでもHPを水増しされるだけでも厄介だ。
せめて部位欠損状態にできれば、少しは楽になったんだがな……。
この反則的な防御力と回復力の仕掛けはわかっている。

回復の方は高レベルの《HP自動回復》。

スキルポイントは新たなスキルを取得するだけでなく、既に持っているスキルにつぎ込む事で、そのスキルレベルを上昇させる事ができる。

そのシステムによって、《HP自動回復》ともう一つのスキルにのみポイントを集中する事によって、こいつはこんな反則級のタフネスを獲得している。

そして、こいつのプレイスタイルの根幹をなすスキルがある。

その名も《武装解除》。

装備アイテムによる恩恵を一切受けられなくなる代わりに、物理系ステータスに大幅な補正をかけるスキル。

正しく、己の体一つで戦う為のスキル。

ネタスキルと言われ、実用に値しないという烙印を押されたこのスキルを、マックスはトッププレイヤー相手でも通用する程に昇華させた。

スキルポイントのほとんどをこのスキルにつぎ込み、ステータスポイントを防御力に極振りする事によって、誇張抜きで鋼よりも頑丈な肉体を手に入れた。

このゲームの醍醐味をほとんど捨てて、強靭な肉体を作り上げた。

それを全て、筋肉への謎のこだわりと情熱によって成し遂げたというのだから、実にふざけている。

変人カタストロフの目に留まる程に。

そう。

こいつと俺はβ版時代の仲間。

同じ『サクリファイス』のギルドメンバー。

故に、お互いの手の内はよく知っている。

さっきまでの攻防で、こいつがβ版時代と全く同じ方針を貫いているという事もわかった。

だからこそ、攻略法も知っている。

速攻だ。

あいつのHPが回復する前に削り切る。

俺の攻撃力なら、それができる。

「行くぞ」

「来い！！！」

マックスに向けて正面から突っ込んだ。
その途中で腰からナイフを引き抜き、投擲する。
前に使った『錆びたナイフ』ではない。
ＮＰＣの店で買った普通の武器とはいえ、ちゃんとした攻撃力をもった凶器だ。
俺のパワーで投げれば、こいつ相手でも充分なダメージを稼げる。
それを避けるなり、防ぐなりした隙を突く。
「ウオオオオ！！！」
しかし、マックスは迎撃を選らばなかった。
飛んでくるナイフを完全に無視して、俺に突進してくる。
ナイフがマックスの胸に突き刺さる。
ダメージは与えている。
しかし、奴は意にも介さない。
隙を突くなんて考えは甘かったな。
いいだろう。
正面からの殺し合いといこうか。

「ハァアアア！！！」

正面からデスサイズを振り下ろす。

マックスは左腕を盾にしてそれを防ごうとするも、その腕にはさっき刻んだ傷痕がある。

寸分違わずそこを狙ったデスサイズの刃は、マックスの左腕を切断し、肩口に大きく沈み込んだ。

だが、僅かに浅い。

奴のHPを削り切れてはいない。

「筋肉を斬らせてぇ!!　骨を断ァつ！！！」

残った右腕が俺を狙って振りかぶられる。

デスサイズを振り切った今の体勢では避けられない。

こいつは防御力特化型とはいえ、《武装解除》のスキルのせいで、それなり以上の攻撃力を持っている。

この拳が直撃すれば、一撃で死ぬだろう。

俺はそれを、同じく拳で迎え撃った。

マックスの右拳に、俺の左腕のパンチをぶつける。
俺の左腕が根元からちぎれ飛ぶが、単純な攻撃力のステータスならば、実は俺の方が上だ。
左腕の代償と引き換えに、マックスの右腕は大きく弾かれ、その巨体が傾いた。
「ぬおお!?」
その最大の隙を見逃しはしない。
残った右手を、マックスの体に刺さって振るえないデスサイズから離し、腰に差していたもう一本のナイフに伸ばす。
そのナイフで、マックスの喉を刺し貫いた。
「……見事だ。死神」
最後にそう呟いて……マックスは光の粒子となって消滅した。
《レベルアップ！　ＬＶ１５からＬＶ１６になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
……勝った。

だが、代償は大きい。
左腕の部位欠損。
それにHPも随分削れている。
HPは回復ポーションで何とかなるが、左腕はそうもいかない。
部位欠損は時間経過か高レベルの《回復魔法》でしか回復しない。
5分もすれば生えてくるだろうが、5分間片腕が使えないのは痛い。
これが戦闘中なら致命的だ。
ポーションの消費も決してバカにはならない。
今回のイベントでは、アイテムの持ち込み制限がある。
イベントリの中の回復アイテムは使えず、装備の腰につけた分しか使えないのだ。
これだけの死闘を演じて、獲得したのは他の獲物を狩った時と同じ2ポイントか。
割に合わないな。
「避けて通るべきだったか……」
今回のルールに乗っ取って考えれば、強敵との戦闘は避けるべきだったな。

つい熱くなってしまった。

反省だ。

そして、デスサイズとナイフ、それと左腕と一緒に吹っ飛んでしまった籠手を回収し、さっさとポイントを割り振って、その場を去った。

左腕の回復を待ちつつ、次の狩場を目指して移動する。

イベントはまだ始まったばかりだ。

12　乱戦

ようやく森林エリアを抜けるという段になって、左腕が回復した。
回収しておいた籠手をつけ直し、次のエリアへと飛び込む。
森林エリアを抜けた先にあったのは、巨大な城壁。
始まりの街を思わせる……というより始まりの街のデータを使い回していると思われる城壁だ。
もしかしたら、内部も始まりの街と同じになっているかもしれない。
街エリアか。
得意か不得意かと言えば、どちらでもあるといったところだな。
広い場所で大人数を相手にするなら不利だろうし、狭い場所で少人数相手なら有利だろう。
だが、大人数を相手にするとしても、今回のルールなら協力プレイはまずあり得ない。
それならば、初日のように撃破数を大きく稼ぐ事も夢ではないかもしれない。

少なくとも、森林エリアよりは敵が見つけやすそうだ。
そう分析をしながら城壁に沿って進む。
さすがにこれを飛び越えるようなマネはできない。
ステータス的に無理がある。
だから、この城壁の中に入るには入り口を見つけなければならない。
ここが始まりの街と同じ作りなら、城壁に沿って進めば必ず正門に辿り着く筈だ。
あるいはスラム街に出るかもしれない。
とにかく、獲物（プレイヤー）のいる所へ行かなくては始まらない。
そうやって少し移動すれば、予想通り始まりの街と同じ作りの正門に出た。
静まりかえっていた森林エリアとは違い、街の中からはけたたましい音が鳴り響いている。
武器がぶつかり合う音、魔法の着弾音、悲喜こもごもなプレイヤー達の声。
どうやらここは当たりのようだ。
早速、正門を抜けて街の中へと足を踏み入れる。
「死ねぇい!!　……ぶぎゃっ!?」

待ち伏せしていた奴がいたが、奇襲前に声を出すような間抜けだったので、即行でデスサイズの餌食になった。

襲撃者の体が光の粒子となって消える。

だが、そのタイミングで《危険感知》に反応があった。

「ッ!?」

消滅の光を目眩ましにして飛んで来た一本の矢を、咄嗟に首を傾けて避ける。

すぐに障害物に隠れ、矢が飛んで来た方向を見るが、射手の姿はない。

《気配感知》にも引っ掛からない隠密性と、あの精密すぎる狙撃……。

ハンターの仕業か。

マックスに続いて面倒な奴と当たってしまった。

ハンターもまた俺やマックスと同じで、『サクリファイス』のギルドメンバー。

そして、マックスと同じく一つのプレイスタイルを突き詰めたキワモノ。

近づければ簡単に倒せる相手だが、あいつは遠距離戦やゲリラ戦に特化している。

こういう、かくれんぼになったら見つけ出すのは至難の技だ。

ここは、奴を放置して進んだ方がいいな。

野放しにして、戦ってる最中に後ろから射たれるのは怖いが、奴を気にしすぎて時間をかけるのも愚策だ。

今回のイベントは、制限時間が1時間しかないのだから。

幸いにして、俺には《危険感知》のスキルがある。

ハンターの矢はやたらと速いが、注意していれば避けられない攻撃ではない。

よし。

行くか。

ハンターを撒くという意図もあって、建物に囲まれた路地裏を疾走する。

目指すのは、戦闘音のする方向。

そこかしこで鳴り響いている、この音のする場所に獲物がいる。

道中、路地裏に隠れていたプレイヤーを何人か仕留め、大通りに出た。

そこでは、十人以上のプレイヤーが入り乱れて、派手な乱戦を繰り広げていた。

魔法が飛び交い、武器がぶつかり合う。

しかし、俺のような特化型でもない限り、ほぼ同レベルのプレイヤー同士の戦いにおいて、一瞬で勝負が決するという事はあまりない。

一撃でHPを削り切る攻撃力を誰しもが持っている訳ではないからだ。
故に、この場所では奇妙な硬直状態が出来上がっていた。
全員、派手に戦ってはいるが、脱落者はほとんどいない。
誰かが誰かを仕留めようとすると、みすみすポイントを渡してなるものかとばかりに、他の連中が妨害する。
その間に狙われた奴は回復を済ませて戦線復帰。
三竦みならぬ、十竦みといったところか。
だが、とても危うい均衡の上に成り立つ状態。
そう長くこの状態が維持される事はないだろう。
数分もしない内にどこかが崩れ、そこから一気にこの場の勝者が決まる筈だ。
だが、それは俺が手を出さなければの話。
こんなに獲物が纏まってくれている場面に、俺が介入しない訳がない。
《隠密》によって気配を薄くした状態で、俺は一番近くにいた獲物、軽装の剣士の後ろへ高速で接近した。
そのまま首筋目掛けてデスサイズを振るう。

剣士も俺の攻撃に気づいて咄嗟に防御したが、大鎌の独特な形状の攻撃を防ぐにはコツがいる。

咄嗟の判断でそこまではできなかった剣士を嘲笑うかのように、デスサイズの刃は防御態勢をいとも容易くすり抜け、その首を飛ばした。

残った体が光の粒子となって消滅する。

「死神……ッ!?」

「ッ!?　《サンダーボール》!!」

「《フレイムランス》!!」

俺の突然の登場に驚愕して動きが止まったのもいたが、さすがにイベントに出てくるだけあって、対応が早いのが何人かいるな。

魔法剣士と魔法使いの攻撃、雷と炎の魔法が俺に迫る。

だが、統率のとれていない単発の遠距離攻撃など恐れるに足りない。

スピードに任せて移動するだけで簡単にかわせる。

「速い……!?」

「チィ!!」

次の標的は、今、雷の魔法を放ってきた魔法剣士。
理由は一番近くにいたからだ。
手近にいる奴から狩っていく。
「舐めんな!!　《ソニックブレイド》!!」
魔法剣士が中距離攻撃のアーツで迎え撃とうとしてくるが、それは悪手だろう。
アーツは何も考えずに使えば、ただのテレフォンパンチだ。
《ソニックブレイド》は斬撃を飛ばすアーツ。
横薙ぎに剣を振るって放たれた斬撃を、身を屈める事で避ける。
来るとわかっている攻撃を避けるのは、実に容易い。
そして、アーツの反動で一瞬動きが止まった魔法剣士を、股下から頭にかけて切り裂いた。
「クソッ……！」
光の粒子となって消滅する魔法剣士。
その光を目眩ましにするかのように、前方から槍使いと斧使いが攻撃を仕掛けて来た。

「「もらったァ!!」」

その武器が振られる前に、俺はさらに前方に加速し、二人を追い越す事で攻撃を避ける。

そして、流れるようにアーツを使った。

「《デスワルツ》」

回転斬りが、軌道上にあった二人の首をはね飛ばした。

だが、アーツの反動を受けるのは俺も同じ。

それを狙ったかのようなタイミングで、炎の槍が俺に迫って来る。

俺はそれを、普通にサイドステップで避けた。

「なっ!?」

アーツは考えて使わなくてはならない。

反動も計算に入れた上で動く。

そうすれば足を止めずに、ノーリスクでアーツを繰り出す事ができる。

もっとも、技によるがな。

《デスワルツ》はレベル1のアーツなだけあって、大鎌のアーツの中では隙が

小さく、反動も小さい。
扱い易いタイプの技だ。
「《フレイムラン……ぐ!?」
尚も俺に魔法を浴びせようとしていた魔法使いにナイフを投擲した。
ナイフは後衛職の紙装甲を簡単に突き破り、腕を吹き飛ばす程の大ダメージを与えた。
それで動きの止まった魔法使いにトドメを刺すべく距離を詰め、確実に殺す。
これで五人。
残りは俺の姿を見た途端に逃走を始めていたから、ここにはもういない。
賢い選択だ。
今回のルールは誰を倒しても獲得ポイントは同じ。
強い奴を避けて通るのは、実に理にかなっている。
だが、逃がしはしない。
バラバラの方角に逃げたから、何人か取り零しはするだろうが、それでも背を向けた獲物を放置する程、俺は優しくない。

1ポイントでも多く稼ぐ為に、一人でも多く殺す。
そうして追撃を開始しようとしたところで、《危険感知》が反応。
慌てずに、飛来した矢を避ける。
……ハンターに見つかったか。
だが、あいつらしくないな。
俺に対しては闇雲に射っても当たらないとわかっているだろうに、それでも射ってくるとは。
妨害が目的か？
とりあえず、射線を切る為に建物の陰に隠れる。
そして、少し移動し、消費した分のナイフをイベントリから出して腰に再装填する。
そうしていると、今度は《気配感知》に反応があった。
いや、スキルに頼らずとも、戦いの音がこちらに向かって近づいて来るのが聞こえた。
そして、その元凶がすぐに目の前に現れた。

「《ソニックブレイド》！」
「《風切り》」
ほぼ同じ効果を持った二つのアーツがぶつかり合い、相殺し、それを放った二人がこの場に降り立つ。
一人は狐の仮面を付け、和服に身を包んだ女。
もう一人は、軽鎧の上から白いマントを身につけた、金髪の青年。
……なるほど。
ハンターがあのタイミングで射って来たのは、俺をこの場に誘導し、この二人とぶつける為か。
嫌みな事をしてくれる。
二人の視線が俺に向く。
青年は純粋に驚いたという顔をした。
女の方は仮面で表情はわからないが、何となく顔をしかめたような気がした。
「驚いた。まさかここで君と遭遇するなんてね」
「……面倒な事になったわね」

まったくだな。

今日はよく強敵とぶつかる日だよ。

「俺も驚きだよ。ここでお前らとぶつかるなんてな。『妖刀』――そして『剣聖』」

決して侮れない強敵二人を相手に、俺は静かにデスサイズを構えた。

13　激突

「二対一……という訳でもないのかな？」
剣聖が俺と妖刀、サクラをを油断なく見回しながらそう言った。
そう。
これはバトルロイヤル。
たとえ、同じギルドの仲間だろうと協力するとは限らない。
実際、俺はここに来るまでにマックスとマインを殺っている。
サクラも、この手のルールで仲間を斬る事を躊躇うような奴ではない。
お互いに背中は見せたくないというのが本音だ。
少なくとも俺はそうだ。
だが……。
「妖刀。一時休戦して手を組まないか？」
俺はあえてサクラに協力を要請した。
できる事なら、協力どころか、こいつらを無視して他を狩りに行きたい。

だが、この地点はおそらくハンターに狙われている。
いくら俺でも、ハンターの狙撃を気にしながら、この二人に背中を向けて逃走するのは危険すぎる。
だからといって、こいつらと長々と三竦みを続けるのも時間の無駄だ。
ならば、多少信用ならなくとも、サクラと組んで即行であいつを倒してしまった方が良い。
もっとも、サクラが了承すればの話だが。
「……わかったわ。それで行きましょう」
幸いにして、少し躊躇いながらもサクラはこの提案を呑んだ。
一応、こいつにもメリットのある提案だからな。
サクラの体には、細かい傷がいくつも付けられているが、それに対して、剣聖はほとんど無傷だ。
サクラと剣聖の戦い方は似ている。
使う武器が剣か刀かという違いだけで、どちらも正統派剣士。
そして、純粋な実力において、サクラは剣聖に一歩劣る。

同じスタイル故に相性を使って戦力差を覆す事ができず、正面から戦えばどうしてもサクラが不利。
俺と共闘するのは賭けではあるが、ありかなしかで言えば、決してなしではない選択肢という訳だ。
「気をつけろよ。ここはおそらく『狩人』に捕捉されている。それを意識して動け」
「あいつもいるのね……。ますます面倒な事になったわ」
俺達は顔を見合わせて頷き、まずは俺が剣聖に向けて飛び掛かった。
言い出したのが俺である以上、俺から行くのが筋というものだろう。
そうでなくとも、相性的に俺がメインで攻めた方が良い。
「やれやれ。結局、二対一になってしまったか。厳しいね……！」
剣聖が苦笑しながらもデスサイズの一撃を避ける。
さらに動きながら連続で攻撃を仕掛けるも、冷静に避けられ、さばかれ、防がれた。
……さすがの動きと剣さばきだな。
相変わらず強い。

「ハッ！」

反撃に振るわれた剣を受け止め、つばぜり合いになる。

だが、攻撃力では俺の方が上だ。

デスサイズに力を籠めて剣聖を弾き飛ばす。

剣聖はその力の流れに逆らわず、自ら後方に飛んで距離を取った。

しかし、そこにサクラの攻撃が突き刺さる。

「《風切り》」

斬撃を飛ばす、刀のアーツ。

その崩れた体勢じゃかわせまい。

案の定、剣聖はその攻撃を剣を盾にして受け止めた。

それなりにダメージは通っている筈だ。

そこをさらに追撃する。

斬撃を飛ばせるのは、お前らだけじゃない。

「《鎌鼬》」

《大鎌：ＬＶ５》で習得できるアーツを使う。

途端にデスサイズが重く感じる。
その重さを斬撃に乗せて解き放つように、デスサイズを振り抜いた。
サクラの攻撃よりも遥かに大きい斬撃が剣聖に襲いかかる。
同じ斬撃を飛ばすという効果のアーツでも、剣や刀と大鎌では攻撃力が違う。
その分、大振りになって隙が大きいから、俺は普段あまりこのアーツを使わない。
遠距離攻撃は基本的に《投擲》を使っている。
その方が隙が小さいからだ。
だが、今回はサクラとの共闘で、このアーツを当てられる程の隙が剣聖に出来た。
この状況。
ハンターの矢が怖いが、それにさえ気をつければ、重量武器の真骨頂である破壊力を存分に引き出す事ができる。
さあ、これをどう凌ぐ剣聖？
「《ソニックブレイド》!!」
迫る《鎌鼬》に、剣聖は手に持った騎士剣を振りかぶり、同じく空飛ぶ斬撃で迎え撃った。

もちろん、その程度の攻撃で《鎌鼬》を打ち消す事はできない。
だが、《鎌鼬》の軌道を僅かに剃らし、同時に自分の剣に合わせて体を捻る事で受け流した。
サクラの攻撃を受けた直後の無理な体勢から、それをやってのけた。
見事だ。
しかし、それも所詮は一時凌ぎにすぎない。
すぐに終わらせる。
《鎌鼬》が剣聖に到達するよりも早く、サクラは走り出していた。
それに続いて、俺も駆け出す。
サクラの振るった淡い紅色に輝く刀『紅桜』が、《鎌鼬》を無理矢理受け流して完全に体勢の崩れた剣聖に迫る。
しかし、突如飛来した矢がサクラの進路を妨害し、その隙に剣聖は体勢を建て直した。
ハンターめ。
余計な事を。

だが、間を置かずに、今度は俺が剣聖に斬りかかる。
体勢を建て直したといっても、絶え間ない連続攻撃でかなりのダメージを与え、リズムも崩した。
ペースは完全にこちらが握っている。
事実、剣聖は反撃する余裕もなく防戦一方だ。
そして、防戦に徹しようとも、俺とサクラの連携の前に、剣聖は確実にダメージを蓄積させていく。
たまにハンターが妨害の矢を放って来るが、来る方向がわかっていれば余裕を持って避けられる。
あいつの狙いは、おそらく優勝候補を一ヶ所に纏めて足止めする事だろう。
この戦いが長引けば長引く程、ハンターを含めた他の連中がポイントを伸ばしてしまう。
特にハンターは遠距離攻撃の達人。
ここを牽制しながら、同時に別の場所を狙ってポイントを稼ぐ事なんて容易だ。
その思惑に乗るつもりはない。

早く終わらせる。
最悪、剣聖の撃破ポイントはサクラに譲ってもいい。
とにかく、早期に決着をつける事が望ましい。
だが、焦りは禁物だ。
このまま攻めて、確実に仕留める。
それでいい。
そして、その時はやって来た。
デスサイズの刃が剣聖の左腕を切り落とす。
同時に、紅桜の切っ先が脇腹を貫いた。
「くっ……！」
「終わりだ」
大鎌と刀が剣聖の首を目掛けて振るわれた。
とった。
そう思った瞬間、《危険感知》に反応があった。
直後、光が視界を埋め尽くす。

これは……!?

「避けろ！　妖刀!!」

「言われるまでもないわ！」

俺達が飛び退いた場所を、光の奔流が通過して行った。

《光魔法：ＬＶ１５》で覚えられる範囲殲滅魔法（シャインストリーム）。

広範囲に効果を及ぼす魔法を、速度に特化した俺はともかくサクラは避けきれず、片足がごっそりと削れていた。

部位欠損だ。

あの足では機動力激減だろう。

そして、光が過ぎ去った後には、九死に一生を得た剣聖が立っていた。

あれだけ密着していた剣聖を巻き込まないようにして、あの範囲攻撃魔法で俺達だけを狙った。

相当の技術がなければできない事だ。

それだけの事をやってまで剣聖を守ろうとする奴には心当たりがある。

光の発射地点を見れば、剣聖に走り寄る銀髪の女の姿が見えた。

「ユリウス!!」

「ジャンヌ……！　助太刀無用と言いたいところだけど……正直、助かったよ。ありがとう」

「ううん！　無事で良かった！」

ユリウス。

剣聖のプレイヤーネームだ。

俺達PKと違って、あいつらには名前を隠す必要がない。

故に、あいつらの名前は普通に知られている。

問題はジャンヌと呼ばれた女だ。

「厄介な奴が来たな」

「リア充……!!」

隣のサクラがゾッとするような殺気を放っていたが、相手の女もそれに負けないような強い視線でこちらを睨んでいた。

今日は本当に強敵とばかり当たる日だ。

運が良いのか悪いのか。

イベントのルール的に考えれば、悪いのだろうな。

「『聖女』」

剣聖とだけは組ませてはいけない女。

β版時代の強敵の再来に、俺は仮面の下で凶悪に笑った。

14　『剣聖』

「ユリウス！　今、回復魔法を……」
「させん」
聖女に向けてナイフを投擲して牽制しながら走った。
狙いは剣聖だ。
もうあいつのHPはほとんど残っていない筈。
回復される前にケリをつける。
だが、ナイフは剣聖に叩き落とされ、聖女は魔法を行使した。
「《アタック・エンチャント》！」
聖女の持つ杖から放たれた青い光が、剣聖を包み込んだ。
回復魔法じゃない……!?
支援魔法を使って来たか！
振るわれたデスサイズの刃を、剣が残った片手で受け止めた。
それでもまだ、攻撃力は俺の方が高い。

しかし、力の差が小さくなった事で、今までよりも遥かに簡単に受け流された。
「チッ……！」
「《リペア・ヒーリング》！」
今度は白い光が剣聖を包み込む。
HP回復ではなく、部位欠損を治す為の魔法。
みるみる内に斬り落とした筈の剣聖の左腕が治っていく。
ならばと聖女を狙ってみるが、両腕を回復させた剣聖が剣を振るって俺を牽制し、そのまま聖女を抱き抱えて距離をとった。
「お姫様抱っこォ……!!」
後ろのサクラが呪い殺さんばかりの殺気を放っていたが、無視して走り出す。
あいつらに時間を与えてはならない。
幸い、まだHPまでは回復していないのだから、一撃でも直撃させれば殺せる状態である事に変わりはない。
デスサイズを振り下ろす。
だが、両腕を取り戻し、支援魔法を受けた剣聖のパワーは、俺とほぼ互角の域に

まで押し上げられていた。
デスサイズの刃は受け流され、返す剣を柄で受け止めた。
つばぜり合いにもつれ込む。
「ジャンヌ、下がっていてくれ」
「ユリウス!?　でも、まだ回復が……」
「いいんだ。君のおかげで僕はまだ戦える。……それに、彼はそんな暇を与えてはくれないだろう」
よくわかっているな。
剣聖の言う通りだ。
HPを回復させる魔法は、部位欠損の回復と違って一瞬で終わる訳ではない。
魔法を発動している間、徐々にHPが回復していくという仕組みだ。
そして、その間、発動者は他の魔法が使えなくなる。
それを見過ごす俺ではない。
「大丈夫。僕は勝つよ」
「ユリウス……」

剣聖の勝利宣言を聞いて、聖女はまるで恋人を案じる女の子のような顔をしていた。

なんだ、この三文芝居は？

これはゲームだぞ？

実際に死ぬ訳じゃあるまいし。

だが、お前らは忘れている。

この場には、その三文芝居で状態異常『怒り』になるモンスターがいるという事を。

「死になさい、リア充……！」

「わっ!?」

「ジャンヌ!!」

《隠密》で気配を消して忍び寄っていたサクラが、怨念を刀に乗せて聖女に斬りかかった。

削られた足でよくやる。

そして、こっちは……

「隙ありだ」
「くっ!?」
つばぜり合いから急に後ろに下がってデスサイズを振るう。
剣道で言うところの引き技だ。
だが、それも剣聖の足を僅かに掠めるだけに終わった。
外したか……。
「戦闘中によそ見とは余裕だな」
連続で攻めたてながら、俺は口を開いた。
真面目にやれという意図を籠めて。
「……そうだね。すまない。だが、君は仲間が心配じゃないのか？」
「今はバトルロイヤルの最中。あいつとは一時的に手を組んでいるだけ関係だ。心配する必要性がない」
「……やっぱり、君のそういうところは好きになれないな」
好きになられても困る。
俺は適切な間合いを保ちながらデスサイズを振るい続けた。

剣と大鎌では、基本的な間合いが違う。
速度の差を生かして、剣の間合いの外側、大鎌の間合いを維持しながら攻め続ける。
だが、あと一手が詰められない。
あと一撃当てれば勝てるのに、巧みな剣さばきで全ての攻撃を防がれ、トドメが刺せない。
それどころか、たまに反撃が飛んで来る始末。
それでも問題はない。
今、剣聖がこれだけ戦えているのは、聖女のかけた支援魔法のおかげだ。
そして、支援魔法の持続時間はスキルレベルに依存する。
まだ正式サービス開始から一週間。
こんな短時間で上げられるスキルレベルなど、高が知れている。
この状況は、そう長くは持たない。
ならば、待つ。
焦らず、確実に狩りとれる瞬間を。

そして、その時はやって来た。
剣聖を包んでいた青い光が消え、武器越しに感じる力が急に弱くなる。
ここだ。
「ハァアアア！！！」
武器ごと叩き潰すつもりでデスサイズを振り下ろす。
剣聖の元のステータスでは、正面からこの一撃を防ぐ事はできない。
避けるか、受け流すしかない。
だが、いきなり腕力が弱まったこのタイミングで、冷静にそれができるか？
たとえできたとしても、続く連続攻撃には耐えられまい。
詰みだ、剣聖。
「《スラッシュ》!!」
そんな俺の考えは覆された。
アーツにより予想外の威力で上から被せるように叩きつけられた剣がデスサイズの軌道を変え、その刃は目的から外れて地面に突き刺さった。
そして、デスサイズを抑えつけていた剣が振られる。

俺の体を両断する為に。

「ぐっ……!?」

咄嗟に後ろに下がったが、完全には避けきれず右腕を斬り落とされた。

それだけではない。

少しでも速く動く為に、デスサイズを手放してしまった。

今、デスサイズは剣聖の足元に転がっている。

やられた。

勝利目前で生じた僅かな気の緩み。

そこを突かれた。

あのまま続けていれば、俺が勝っていただろう。

互角の技術を持ち、速度で勝る敵を相手に、一撃も食らわないように戦うのは至難の技。

さっきまでの勝負は、小さなミス一つで俺に軍配が上がる戦いだった。

だからこそ、剣聖は自分の最大の隙になる支援魔法が切れる瞬間を狙って勝負をかけた。

支援魔法の効果時間にばかり気がいっていたのは、俺のミス。
そして、間抜けにも詰みだと勘違いして気を緩めてしまった俺は、まんまとハメられ、腕も武器も落としてしまったという訳だ。
「やあああああ!!」
形成は逆転した。
剣聖が鋭く踏み込んで来る。
勝負を決めに来てるな。
あいつの性格を考えれば、早く決着をつけて隣でサクラと戦っている聖女を助けに行きたいのだろう。
だが、勝利した後の事を考えるというのは、勝利直前の気の緩みと同義だ。
さっきの俺と同じように、そこには隙が生じる。
俺が犯したミスを、今度はお前がやらかしたな。
ピンチとチャンスは表裏一体。
デスサイズも右腕もHPも失った俺にとって、このタイミングが最後の勝機となるだろう。

ここは危険を犯して、飛び込まねばならない場面。
顔を狙った剣聖の刺突を、最小限の動きでかわして懐に踏み行った。
「ッ!?」
剣の切っ先が『死神の仮面』の一部を砕き、俺の左目を切り裂いた。
右腕を斬り落とされたダメージと合わせて、HPは風前の灯火となる。
だが、そのダメージに見合うだけの成果があった。
剣の間合いの外側は、俺のメインウェポンである大鎌の間合い。
そして、剣の間合いの内側は、俺のサブウェポンであるナイフの間合いだ。
今まで距離を取って戦っていた相手が、最後の最後で超至近距離へと飛び込んで来る。
その動きは、絶望的な状況から逆転し、勝利目前となって気の緩んだ剣聖の虚を突いた。
残った左手で腰から引き抜いたナイフが剣聖の喉を切り裂く。
「……また負けたか……悔しいなぁ……。ごめん……ジャンヌ……」
そして、剣聖は光の粒子となって消えた。

《レベルアップ！　ＬＶ１６からＬＶ１７になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
……何とか勝てたか。
マックスとの戦い以上に危なかった。
そして、マックスの時といい今回といい、今日はよくナイフに助けられるな。
本当に持っていて良かった。
「ユリウス!?」
聖女の悲鳴のような声を上げた。
それを聞きながら、俺はナイフを手放し、急いでデスサイズを回収する。
そして構えた。
剣聖との戦いは終わったが、イベントはまだ終わっていないのだから。
満身創痍の俺の前に、多くのプレイヤー達が現れた。
「やっと終わったか」
「やべぇ戦いだったな」

「乱入する気も起きなかったぜ」
「でも、狙い通り死神ボロボロだ。今なら殺れる」
「俺らは既に上位入賞は絶望的。だったらどうするか？　せめてトッププレイヤーの首取って自慢話にしたいよな!!」
「て、事で……」
「「「死ね!!　死神!!」」」
そう言って飛び掛かってくる雑魚軍団。
対して、俺は右腕を斬り落とされ、左目は潰れ、HPも風前の灯火。
しかも、近くにはまだ聖女とサクラという強敵がいる。
さっきから矢が飛んでこないが、ハンターもまだ近くに潜んでいるかもしれない。
かなり厳しい状況だ。
今回のルールなら協力プレイはまずあり得ないと思っていたが、甘かったな。
だが、わざわざ殺されてやるつもりはない。
俺は意外と負けず嫌いなんだ。
手負いの獣の恐ろしさを見せてやろう。

《残り時間5分となりました。これよりボーナスタイムに突入します。撃破ポイントが二倍となりました。現在のポイント数トップ10のプレイヤーを標的として設定しました。標的を撃破した場合、撃破ポイントは十倍となります》

突如、そんな音声ガイドが流れた。

雑魚軍団がにわかにざわめき出す。

「マジかよ!?　どんでん返し来たな!!」

「これ、もしかして、またとないチャンスなのでは？　死神って絶対トップ10に入ってるっしょ」

「ヒャッハー!!　俺の獲物だ!!」

「あ!?　こいつ、抜け駆けしやがった!!」

「待てゴラァ！！！」

「遅れは取らんぞ！」

「勝つのは俺だァ！！！」

さて。

残り5分。

最後の踏ん張りどころだな。

「行くか」

俺は残った左手でデスサイズを強く握り締め、残った右目でしっかりと前を見据えながら、戦いに臨んだ。

15　ラストスパート

血気に逸った奴の首を飛ばし、まずは一人斬り捨てる。
片腕とはいえ、プレイヤーを一撃で即死させるだけの攻撃力はまだ残っている。
そして、斬った後、すぐにバックステップで後ろに下がった。
直後、さっきまでいた場所に大量の矢と魔法が炸裂する。
「チッ！　外れた！」
「クソッ！」
「やっぱ速ぇな……」
「おい!!　俺らも巻き込まれるところだったぞ!!」
「俺なんか普通に当たったぞ!!」
「気をつけて撃てや!!」
「知るかボケェ!!」
「何だとコラァ!!」
口汚く罵り合いながら、それでも仲間割れまでは起こさずに俺を狙って来る雑魚

軍団。

多対一という状況は初日の大虐殺にも似ているが、あの時とは根本的なところが違う。

初日の連中は他のプレイヤーに攻撃を当てるのを嫌がって動きが鈍ったが、今はバトルロイヤルの最中。

徒党を組んだとはいえ、あいつらは元々敵同士。

巻き込んで攻撃する事に、欠片の躊躇もない。

それで味方を殺ってしまっても、むしろポイントが増えるのだから。

巻き込まれる側である前衛は多少動きが鈍ったが、もう残り時間も少なく、今さら死を恐れる必要はない。

ぶつくさと文句を言いながらも、俺に突撃してきた。

こんな混沌とした軍団の中へ突っ込んだら、確実に死ぬ。

故に、バックステップで後ろへ後ろへと下がりながら、さっきの奴みたいに血気に逸って突出してきた奴だけを狩る。

遠距離攻撃は普通に避けるか、敵と障害物を壁にして防ぐ。

俺のHPは風前の灯火。
《HP自動回復》が多少は仕事をしてくれているが、それもないよりはマシという程度。
一撃でも食らったら終わりだ。
だからこそ、今は死なない事を最優先とする。
《残り時間4分です》
「ユリウスの仇!!　食らいなさい!!　《シャインストリーム》!!」
音声アナウンスが流れると同時に、ここで聖女が俺を狙って来た。
光の範囲攻撃魔法が、周りの雑魚軍団を呑み込みながら俺に迫る。
危ないが、ちょうど良い目眩ましだ。
これは使える。
俺は後ろを向いて全速力で走り、魔法を避けると同時に、雑魚軍団から距離を取った。
「もう一発……」
「あなたの相手は私よ」

「うっ!?」

俺に追撃をしようとしていた聖女に、サクラが斬りかかった。

向こうは放置してよさそうだな。

欲を言えばあいつらも倒してポイントを奪いたいが、今のHPでは危険すぎる。

女の戦いには手を出さないのが懸命だ。

そのまま裏路地に入って《隠密》で気配を消し、雑魚軍団を撒く。

「どこ行きやがった!?」

「逃げ足の速い奴だぜ！」

「でもよ、これって死神を敗走させたって事で、俺らの勝ちじゃね？」

「確かに！」

「確かに、じゃねぇよバカ共!!　お前らは死神を見失うって事がどういう事かわかってねぇ!!　いいか！　死神ってのはなぁ……ギャアアア！！！」

死神は、気づいた時には後ろにいるものだ。

呑気に話していた雑魚軍団の一部を路地裏から奇襲した。

突然の不意討ちに対応できなかった5人ほどを一瞬で仕留め、再び路地裏に姿

を隠す。
「チィッ!!　ゲリラ戦になったか!!」
「死神の得意分野じゃねぇか!!　ど、どうするんだ!?」
「落ち着け!!　とにかく探せ!!　探すんだ!!」
「なるべく一塊になって動けよ！　単独じゃ良い的だぞ!!」
《気配感知》のおかげで、雑魚軍団がそこそこ統率のとれた動きをしているのがわかった。
これでは迂闊に飛び出せないな。
路地裏に潜みながら、少しでもHPが回復するのを待つ。
できれば腰の回復ポーションに手を伸ばしたいが、今は一本しかない腕がそれで塞がれてしまうのは危険だ。
ポーションを飲んでいる時に襲撃されるなんて事になったら、目も当てられない。
《残り時間3分です》
そして、時間は過ぎていく。
このままタイムアップでも俺はかまわないのだが、どうやら、そうもいかないら

しい。

「フハハハハ!!　困っているようだな死神よ!!」

建物の屋根の上に立った、それなりに豪華なマントを身につけた男が話しかけて来る。

見るまでもなく誰だかわかる。

「仲間のよしみだ。ギルドマスターとして、せめて私の手で葬ってやろ……」

一人で語るカタストロフに攻撃を仕掛けた。

武器の届かない距離、魔法の間合いにいるカタストロフを狙うには、遠距離攻撃を使わなければならない。

ナイフを投げようにも、右腕は斬り落とされ、左腕はデスサイズを持って塞がっているから不可能。

《鎌鼬》は予備動作が大きい。

故に、俺は現在使える最速の遠距離攻撃を使った。

《投擲》のスキルを使って、カタストロフ目掛けてデスサイズを投げつけた。

回転しながら飛翔する曲刃が、カタストロフを真っ二つに切り裂いた。

「は？」
間抜けな声を上げながら、崩れ落ちるカタストロフ。
「まさか、この私が……!!　こんな、あっさりと……!!」
油断して話しかけて来るのが悪い。
そうして我らがギルドマスターは、実にあっさりと光の粒子となって消滅した。
「いたぞ!!　あそこだ!!」
「チッ……」
だが、代償として、宙を舞うデスサイズを見た連中に居場所がバレてしまった。
しかも、デスサイズまで手放した。
持ち主から一定以上の距離が離れたアイテムは、自動でイベントリに戻って来るが、今はメニューを操作している暇もない。
腰のナイフを引き抜き、四方八方から迫って来る雑魚軍団に応戦する。
戦闘回避を優先して、ひたすら走る。
「逃がさない！　《ウォーターランス》!!」
「《アースランサー》!!」

「《速射》!!」
「《剛射!!》」
後ろから放たれる矢と魔法を《危険感知》に任せて察知し、回避する。
狭い路地裏では横には避けられない。
建物の間の壁を蹴ってジャンプし、森林エリアの時のように立体的な動きで避ける。
「化け物かよ!?」
「動きが人間やめてるな……」
「リアルチート野郎が!!」
後ろの集団は速度の差で撒ける。
問題は《気配感知》が捉えた、正面の曲がり角から近づいて来る集団。
対処にもたつけば挟み撃ちに合うだろう。
速攻でカタを付ける。
「見つけた！」
「今度こそ!!」

「殺ってやらぁ!!」
現れたのは3人。
即座に左足を軸にして右側へと飛ぶ。
壁に張り付きながらナイフを投擲し、一人目の喉に命中させる。
「なにッ!?」
まずは、一人。
間髪入れずに壁を蹴って距離を詰め、光の粒子になる直前の一人目に刺さったナイフを回収。
迎撃に振られた剣を屈んでかわし、逆手で持ったナイフでこれまた喉笛をかき斬る。
残り一人。
「このォッ!!」
籠手をつけた拳で殴りかかろうとして来る最後の一人。
俺はナイフから手を離し、格闘家と思われる女のパンチを、腕に掌を添えて軌道を剃らす事で、いなした。

「嘘……ッ!?」

そして そのまま手を伸ばし、女の首を掴んで締め上げる。

さらに腕に力を籠めて、その首をへし折った。

このゲームには痛みも苦痛もないが、現実ならさぞや苦しい死に方だろうな。

《残り時間2分です》

仕留めた3人組が光の粒子になって消滅する。

それを見届ける事なく、俺は再び走り出す。

手放したナイフを回収する時間も惜しい。

腰からまた新しいナイフを引き抜く。

そのまま走り続け、雑魚軍団が絶賛探索している路地裏を抜け、大通りに出た。

しかし、そこで想定外の奴に遭遇してしまった。

「あーーー!!!　ここで会ったが百年目だよ!!　さっきはよくも!!」

……ここでまたお前と会うとはな。

つくづく奇遇なものだ。

「マイン……！」

《残り時間1分です》
残り1分。
おそらく、これがラストバトルになるだろう。
その相手が、さっき斬り殺した実の妹というのも因果なものだな。
「手加減はしないぞ」
「上等だよ!!　そっちこそボロボロだけど、私も手加減しないからね！」
「ふっ……それで良い」
そうでなくては、おもしろくない。
さあ、一緒にゲームを楽しもうじゃないか、妹よ。

そうして、このイベントの最後を飾る戦いが始まった。

16　決着

「《ライトボール》！」

挨拶代わりとばかりに、マインが光魔法を放って来る。

こんな最弱の魔法でも、今の俺のHPでは耐えられない。

デスサイズがあれば払いのける事もできただろうが、それはカタストロフに投げつけてしまった。

避けるしかない。

「《ライトボール》！　《ライトボール》！　《ライトボール》！」

それをわかっているからこそ、マインは容赦なく魔法を連発してきた。

《ライトボール》は《光魔法：ＬＶ１》で覚える、最も初歩的な魔法。

それ故に消費MPが低く、いくらでも連射ができる。

この上、マインが《MP自動回復》のスキルを得ていたとしたら、MP切れは狙えない。

しかも、

「《スラッシュ》!!」

マインにあるのは魔法だけではない。

このゲームに適応した生粋のゲーマーは、剣聖並みとまではいかなくとも、そこらの有象無象とは比べ物にならない程の剣技を披露してくれた。

手に持った小さなナイフ一本でこれを防ぎ続けるのは、至難の技だ。

「《ライトボール》！」

しかも、至近距離からの魔法攻撃まで避けなければならない。

魔法剣士は物理と魔法の両方にステータスを振らなくてはならないから中途半端になりやすい。

それをデメリットとするなら、メリットは圧倒的に手数が増えるという事。

手数の多さは強さに直結する。

その強さが、今の俺にとっては致命的だ。

「チッ……！」

「どうしたの、お兄ちゃん！　弱々だよ！」

「ぬかせ」

「わっ!?」

調子に乗って隙の出来たマインの横腹をナイフで切り裂く。

……浅いな。

それに、弱点でも何でもない場所を斬った程度では倒せないか。

「危なッ!?　さすがお兄ちゃん……！　運動神経抜群男子め！」

「お前が油断してるのが悪い。それに運動神経はお互い様だろう」

運動神経において、俺達兄妹のスペックはほぼ互角だ。

そんな奴を相手に、俺がこんなに弱った状態でも何とか戦えている理由は一つ。

純粋なステータスに差があるからだ。

全てのステータスにまんべんなくポイントを振っているマインと、攻撃力と速度に極振りした俺とでは、このゲームにおける運動能力に大きな差がある。

その差を生かして、何とか食らいついているにすぎない。

……だが、食らいついているだけでは意味がない。

《残り時間30秒です。カウントダウンを開始します。29、28……》

「もう時間がないね。……決着つけようか」

「ああ。そうだな」

この勝負。

俺は何としてでも勝ちたい。

イベントのルールで考えれば、ポイントの損得だけを考えれば、このまま逃げてタイムアップでもいいだろう。

だが、俺は勝ちたい。

妹に負けるのは、兄としてのプライドが許さん。

それだけじゃない。

マインとこうして戦っているのが、同じゲームで遊んでいるのが、凄く楽しいんだ。

楽しいからこそ負けたくない。

俺は負けず嫌いだ。

ゲームは、完全勝利で終わらせる。

《26、25……》

お互いに、欠片の油断もなくにらみ合い、相手の隙を探す。

時間だけが過ぎていく。
勝負は――次の一撃で決まる。
《23、22……》
「いたぞ!!　死神だ!!」
このタイミングで、路地裏から俺を探していた雑魚軍団が飛び出して来た。
マインの意識が一瞬そちらに逸れる。
今だ。
俺は全速力で、マインに向けて突撃した。
「ッ!?　《スラッシュ》!!」
迎撃に振られたマインの剣。
マインにとっての左側、俺にとっての右側から袈裟懸けに振るわれた剣をナイフで受け止める。
俺のパワーなら止められる。
後は、このナイフをそのまま喉に……
ピシリッ

その刹那。
俺の耳は確かにその音を捉えた。
小さな、何かがひび割れるような音。
何の音かすぐにわかった。
これは、ナイフの悲鳴だ。
元々、俺のナイフは投擲用の使い捨て。
ＮＰＣの店で適当に買った安物だ。
その分、耐久力が低い。
そしてこのナイフは、何度も何度もマインの剣を受け止めた。
いつ折れても不思議ではない。
それを理解した瞬間、俺は反射的に上体を無理矢理後ろに倒した。
直後、ナイフを叩き折った剣が俺の目の前を通過する。
無理な動きでは完全に避ける事はできず、剣は俺の右目を掠め、切り裂いて行った。
左目は剣聖に潰され、たった今、残された右目までも失った。

視界が完全に闇に閉ざされる。
それでも尚、視界にはHPやMPの残量が表示されている。
HPは、ギリギリ残っていた。
雑魚軍団から逃げている間に《HP自動回復》で回復した分のHPが、俺を守った。
しかし、この状況では意味がない。
目は見えず、コンマ数秒後にはトドメの剣が俺を切り裂くだろう。
ここまでか……！
そう思った瞬間、視界が開けた。
目が見える。
左目が回復していた。
剣聖との戦いから約5分。
部位欠損の時間経過による回復。
その神がかり的なタイミングに驚愕しながらも、俺の体は勝手に動いていた。
左目で見た情報を頼りに、勝利の為に動いた。
マインの剣は俺を切り裂く直前。

返す刃がすでに動き始めていた。
それを防ぐ為に、左腕を盾にする。
俺の防御力では焼け石に水だが、欲しいのはそれによって稼げる時間だ。
ほんの一瞬で良い。
死を遅らせたい。
そうすれば、反撃の手がある。
俺が左目を失ったのは、右腕を斬り落とされた直後。
一瞬の攻防の最中、ほぼ同時と言っていいタイミングだった。
つまり、左目が回復したという事は、右腕もまた回復している筈なのだ。
その右腕で、渾身のパンチをマインの頭に叩き込んだ。
同時に、マインの剣が俺の左腕を簡単に切り裂き、胴体にまで傷を付けた。
視界に表示されたHPが0になる。
体が光の粒子となって消滅していく。
だが、俺は見た。
マインの体もまた、光の粒子となって消えていくのを。

気がつけば、深い森の中にいた。
死んでリスタートしたのか。
《5、4、3、2、1、0。終了時間となりました。これにて第一回公式イベントを終了します》
そして、音声アナウンスが終了を宣言した。
周りの景色が変わる。
森の中から、スラム街の雑多な街並みへと。
イベントに参加する前に居た場所へと戻されたらしい。
《これより、第一回公式イベント結果発表に移ります》
《第9位　『妖刀』　50ポイント》
《同率9位　『ジャンヌ』　50ポイント》

空中に大々的に写し出されたスクリーンに、華々しい演出と共に一人ずつ順位が発表されていく。

……というか、あいつらは同率か。

互いに互いを足止めするような状況に陥っていたくせにランクインしているあたりはさすがだな。

《第8位　『深淵』　51ポイント》

カタストロフか。

何だかんだで、あいつもそれなりに強いからな。

《第7位　『狩人』　69ポイント》

ハンターは7位か。

ポイントが奇数という事は、一度は誰かに殺られたという事。
途中から矢が飛んで来なくなったのは、そのせいかもな。

《第5位　『剛力』　76ポイント》

マックスが5位。
まあ、一度俺が倒して、周りにプレイヤーがいない所へ送った事を考えると、妥当な順位といったところか。

《第3位　『剣聖ユリウス』　81ポイント》

剣聖が3位か。
つまり、俺と当たる前に相当狩っていたのか。
もしくは、ラスト5分のボーナスタイムで稼いだか。

《第2位　『マイン』　88ポイント》

マインが2位か……。

喜ばしいが、少し複雑な気分だ。

《第1位　『死神』　119ポイント》

スクリーンが一際派手な演出で光輝き、俺の優勝を称えてくれる。

俺は勝った。

だが、最後の勝負。

マインとの一騎討ちの結果は相討ち。

引き分けだ。

それも、限りなく敗北に近い引き分けだった。

最後に攻撃ができたのは、あの神がかり的なタイミングで左目と右腕が回復するという奇跡に助けられたおかげだ。

つまり、運が良かっただけ。
その剛運を持ってして、結果は引き分け。
俺はマインに勝てなかった。
この優勝は、完全勝利にはほど遠い。
悔しい。
だが、実に楽しかった。
マインとの戦いだけではない。
マックス、剣聖、聖女、ハンター、ついでにカタストロフと雑魚軍団。
どの戦いも、少し間違えれば殺られていたかもしれない。
その緊張感が良い。
やはり、このゲームは楽しいな。

『試練を乗り越えし者達よ。見事であった』
『しかし、この戦いは始まりに過ぎない』
『これより先、諸君らの進む道の先には、更なる試練が待ち受けている事だろう』

『今回の戦いにおいての勝利、そして敗北』
『その全てを糧として邁進するがよい、冒険者達よ』
『そして、この試練を乗り越えし者達へ。私からささやかな贈り物を授けよう』
『受け取るがよい』

例の声が響き、運営から一通のメールが送られて来た。
中身は『イベント参加特典、上位入賞特典、優勝特典をイベントリに送信しました』という内容。
早速イベントリの画面を出してみると、『プレゼントボックス』というアイテムが3つ増えていた。
それらをイベントリから取り出す。
3つの箱はそれぞれ色が違った。
1つは白。もう1つが銀色。最後の1つが金色の箱。
それぞれが、参加特典、上位入賞特典、優勝特典なのだろう。
まずは、参加賞と思われる白い箱を開けた。

中から出てきたのは、『エリクサー』というアイテム。
ポーションの一種であり、飲めば全ての状態異常を治し、HPを全快させるという凄まじい性能を誇る。
だが、消耗品だ。
参加賞にしては豪華といったところか。
続いて、上位入賞特典と思われる銀色の箱を開けた。
出てきたのは漆黒のローブ。
装備品か。
ーーー
『死神の衣EX』
分類：胴体装備
効果：〈MP＋15〉〈AGT＋20〉〈INT―25〉〈自動成長〉〈自動修復〉〈破損無効〉〈譲渡不可〉
ーーー
エリクサーなんかとは比べ物にならない、バカげた性能をしていた。

それに、まるでデスサイズのような、俺に合わせて作られたかのような性能。
これが今回の上位入賞特典か。
豪華だ。
そして俺は、最後の金の箱を開けた。
ーーー
『死神の仮面EX』
分類：頭部装備
効果：〈MP＋15〉〈STR＋15〉〈AGT＋15〉〈VIT－15〉〈INT－15〉〈DEX－15〉〈自動成長〉〈自動修復〉〈破損無効〉〈譲渡不可〉
ーーー
死神の衣に勝るとも劣らぬ凶悪な性能の仮面が出てきた。
名称から考えても、今俺が付けている『死神の仮面』の上位的装備だろう。
デザインも、何やら洗練されてかっこよくなっている。
イベントにおいて破損、損傷したアイテムは、イベント終了後に元に戻るというルールがあった為、剣聖とマインに砕かれた死神の仮面は、今も無傷の状態で俺の

顔に付いているが、今後はこっちを使うべきだろうな。
せっかくの優勝特典なのだから。

そうして特典の確認も済み、イベントは終わりを迎えた。
凄まじく濃厚な一時間だったな。
さて、この後どうするか。
とりあえず、ギルドにでも顔を出してみるとするか。
俺はスラム街の街並みを眺めながら、イベント後の感傷に浸りながら、ゆっくりと歩き出した。

17　掲示板

【激闘！】第一回公式イベントについて語るスレ【決着！】

1：名無しの冒険者
終わったーーー！！！

2：名無しの冒険者
負けたーーー！！！

3：名無しの冒険者
死にまくったーーー！！！

4：名無しの冒険者
乙ー。

5：名無しの冒険者
中継見てたぜ。見事な負けっぷりだったな。いや、匿名掲示板だから、お前らが誰とか知らんけども。

6：名無しの冒険者
見てくれたか！　俺達の勇姿を！　ちなみに俺は、最後の死神袋叩き作戦に参加してたぜ！

7：名無しの冒険者
あ！　俺も俺も！

8：名無しの冒険者
同じく！

9：名無しの冒険者
なるほど。
負け犬か。

10：名無しの冒険者
グハッ!?

11：名無しの冒険者
ストレートに言われると、めっちゃ傷つく!!

12：名無しの冒険者
言葉選べよぉおおおお!!!

13：名無しの冒険者
すまん……。つい。

14：名無しの負け犬
いや、いいよ。事実だしさ、どうせ俺なんて０ポイントの負け犬ですよ。生きててすみません……。

15：名無しの冒険者
おい、どうすんだ？
本格的にいじけ出した奴がいるぞ。

16：名無しの冒険者
ハンドルネームまで変わってんぞ。

17：名無しの冒険者
すまん。ほんと、すまん。

18：名無しの冒険者
まあ、負け犬は放置するとして、やっぱ上位入賞はβ版のトッププレイヤー達がほぼ独占したなー。

19：名無しの冒険者
自分の二つ名で登録してる奴の多い事多い事。

20：名無しの冒険者
それな。

21：名無しの冒険者
でも、何人か無名の奴も食い込んでたよな。

22：名無しの冒険者
具体的に言うと、6位、4位、2位だな。

意外と上の方。

23：名無しの冒険者
俺、特に2位の子応援したい。

24：名無しの冒険者
『死神』と引き分けた子か～。
確かに、あれは凄い戦いだった。

25：名無しの冒険者
でもさー。
引き分けたっつっても、死神、満身創痍だったじゃん。
弱りきった奴に勝っても意味なくね？

26：名無しの冒険者

その弱りきった奴に、いいようにやられた俺達の立場は……。

27：名無しの負け犬
俺なんて……どうせ俺なんて……。

28：名無しの冒険者
やめろぉ!!　掲示板の雰囲気が暗くなる!!

29：名無しの冒険者
負け犬！　ハウス！

30：名無しの負け犬
ワン……。

31：名無しの冒険者

負け犬はともかく、弱ったところ狙うのはバトルロイヤルの醍醐味だろ。
あの子は何も卑怯な事やってないし、あれは価値のある戦いだったと思います！

32：名無しの冒険者
よく言った!!　俺も同意だ!!

33：名無しの冒険者
俺も！

34：名無しの冒険者
俺も！

35：名無しの冒険者
俺も！

36：名無しの冒険者
私も！

37：名無しの冒険者
よっしゃ!!　じゃあ、俺達であの子の二つ名決めようぜ！　同士達よ!!

38：名無しの冒険者
賛成!!

39：名無しの冒険者
いいね～！　やろやろ！

40：名無しの冒険者
そんな軽いノリで決めちゃっていいのか……？

41：名無しの冒険者
いいんだよ！　今のトッププレイヤー達の二つ名だって、こんな感じで悪乗りした奴らが付けたんだし。

42：名無しの冒険者
あ、ちなみに『妖刀』は俺が言い出した。

43：名無しの冒険者
俺は『剛力』の名付け親だぜ！

44：名無しの冒険者
『剣聖』と『聖女』は私が付けました。

45：名無しの冒険者
『死神』はいつの間にか定着してたわな。

46：名無しの冒険者
何それ!?　適当!!

47：名無しの冒険者
よ〜し！　じゃあ投票開始！　案のある奴はどんどん出せ!!

48：名無しの冒険者
はいはい！　『剣姫』なんてどうよ？

49：名無しの冒険者
うーん……。それだと『剣聖』と若干被ってないか？

50：名無しの冒険者
それに、あの子は魔法も使うぞ。

51：名無しの冒険者
ボッ!!

52：名無しの冒険者
ちぇ。良い名前だと思ったのに。

53：名無しの冒険者
じゃあ、次は私が。『戦乙女』なんてどうでしょう？

54：名無しの冒険者
お、悪くないんじゃないか？

55：名無しの冒険者
うーむ……。まあ、悪くはないが……。

56：名無しの冒険者
何だろう？　このしっくりこない感じ？

57：名無しの冒険者
こう……もっと似合う名前があるんじゃね？　って気持ちが沸いてくるわ。

58：名無しの冒険者
保留!!

59：名無しの冒険者
残念です。

60：名無しの冒険者
なかなか決まらないな。

61：名無しの冒険者
もっと他に案ないのか!?

62：名無しの冒険者
うーん……。もういっそシンプルに『勇者』とかどうよ？
剣と光魔法も使うとか、それっぽいし。

63：名無しの冒険者
さすがに、それは安直すぎないか？

64：名無しの冒険者
いや……相討ちとはいえ、誰にもできなかった『死神』討伐をやってのけたんだし、勇者といえば勇者じゃないか？

65：名無しの冒険者
『勇者』マイン……勇者ちゃん、か。

66：名無しの冒険者
勇者ちゃん……悪くないかもしれん。

67：名無しの冒険者
決定!!

68：名無しの冒険者
いや、さっきから思ってたけど、何でお前が合否判定してんだ？

69：名無しの冒険者
でも、『勇者』は良いんじゃないですか？　シンプルすぎて逆に今まで付けられてこなかった名前ですし。

70：名無しの冒険者
確かに。盲点ではあったな。

71：名無しの冒険者
じゃあ、もう勇者ちゃんで決定でいいか!?
意義のある奴は意見を出せ!!

72：名無しの冒険者
意義なし！

73：名無しの冒険者
意義なし！

74：名無しの冒険者

意義なし！

75：名無しの冒険者
意義なし！

76：名無しの冒険者
よし！　決定！
これから俺達で、この二つ名を定着させていくぞ!!

77：名無しの冒険者
おー!!

78：名無しの冒険者
よっしゃ！　俺、別のスレ行って拡散してくるわ！

79：名無しの冒険者
俺も行くぞ!!

80：名無しの冒険者
上に同じく!!

81：名無しの冒険者
よろー。

82：名無しの冒険者
こうして、中二病的な二つ名が付けられ、そして拡散していくのか。
何だか、恐ろしいものの片鱗を見てしまった気がするぜ……。

18　イベント後

ギルドに向かって歩いている途中で、カタストロフから召集のメールが来た。
イベント後の打ち上げ的なものをやりたいらしい。
俺はとりあえずマインにも連絡を入れてみたが、カタストロフはギルドメンバーではないマインにもメールを送りつけたらしく、すでにこの話を知っていた。
『後で行く！』との事だ。
あいつは、イベントまでの１週間で、このゲームで知り合った連中とパーティーを組んだみたいだからな。
まずは、そっちを優先するという事だろう。
そして、俺は元々ギルドに顔を出すつもりで歩いていたので、さほど時間をかける事なく到着。
寂れた酒場の扉を開けて、中に入る。
そこには、カタストロフとサクラがいた。
「待っていたぞ！　キョウ！」

「早かったわね」
「ああ。近くにいたからな」
二人は酒場のカウンターではなく、テーブルと椅子を出して、そっちに座っていた。
テーブルの上には、大量の料理と飲み物がある。
カタストロフが買い揃えたのだろう。
このゲームには飲食のできるシステムがあるが、ゲームの中なので当然腹は膨れないし、味も現実に比べれば薄い。
だが、雰囲気作りには良い。
俺もまた、席に座った。
「俺としては、サクラが先に来ているのが意外だがな」
「私はここからイベントに参加したのよ。何だかんだでここが一番落ち着くから」
「そうか」
「それよりも貴様！　何か気がついた事があるのではないか!?」
カタストロフがこれ見よがしにマントを翻しながら、何事かほざいていた。

そのマントは、イベントの時につけていたアーマードベアの毛皮を使ったものではなく、黒地に金色の模様が描かれた豪華なマントに変わっていた。

……面倒だが、一応聞いてやるか。

「ハァ……カタストロフ。そのマントはどうした？」

「よくぞ気づいた!!　これこそが、私が今回のイベントにおいて授かった装備『支配者のマントEX』だ!!　どうだ！　私にふさわしい高貴なるマントであろう!!　フハハハハハ!!」

なるほど。

このマントが、カタストロフの上位入賞特典という事か。

よほど自慢したかったのだろう。

そして、サクラにも散々自慢したのだろう。

サクラは鬱陶しいものを見るかのように、顔をしかめていた。

「ついでに聞くが、サクラは何を貰ったんだ？」

「私は『怨霊の着物EX』っていう和服の装備よ。名前はともかく、性能と外見は私好みだったわ」

「リア充を呪っている貴様にはぴったりの装備ではないか!!」
「斬られたいの？」
カタストロフ。
そういう事は思っていても口に出さない方がいいぞ。
「まあ、いいわ。それで、そう言うあなたは何を貰ったのよ？」
「俺は『死神の仮面EX』と『死神の衣EX』の２つを貰った」
「なるほどな！　優勝者には特別なアイテムを２つ贈呈したという事か！」
そういう事だ。
「とにかく優勝おめでとう。祝福するわ」
「うむ！　最後にやられたのは悔しいが、我がギルドから優勝者が出た事は喜ばしい!!　加えて、我ら『サクリファイス』の戦闘員は全員が上位入賞!!　私も鼻が高いぞ!!」
「さあ、飲め!!」と言って、カタストロフがジョッキを差し出してくる。
未成年の俺が飲酒する事はできないが、ゲーム内の酒にアルコールが入っている訳もなく、酔う事もない。

故に、普通に受け取って飲んだ。
そうして飲んで食べて話している間に、酒場の扉が開かれ、次のメンバーがやって来た。
灰色の髪をした、二十代後半くらいの男。
目の下に出来た大きな隈から不健康そうな印象を受けるが、それ以外はいたって普通のどこにでもいそうな容姿をしている。
「ハンターではないか!!　β版の時以来だな!!」
「……あ、ああ。……ひ、久しぶりだ」
どもったような話し方をするハンター。
変わっていないな。
基本的に一番連絡が取れず、会う機会も少ない奴だが、今回は普通に来たらしい。
イベント後だしな。
「ハンター。さっきのイベントではやってくれたな」
「本当ね。あなたの妨害がなければ、あのリア充男を粛清できていたかもしれないのに」

「……す、すまん。……だ、だが、あれが俺の戦い方だ」

そうして、ハンターも食卓に加わる。

次の来訪者は、それからすぐに現れた。

ウチのギルドで唯一イベントに参加しなかった武器子だ。

「皆さんお疲れ様です!!　中継見てましたよ!!　命を刈り取る『デスサイズ』!!　流麗に舞う『紅桜』!!　唸る『ロビンフットの弓』!!　翻る『鎧のマント』!!　私の作った愛しの装備達!!　皆、大活躍で、私、大満足です!!　やっぱり、武器も装備も、それをより魅力的に扱ってくれる人に託すに限ります!!」

完全に、俺達ではなく武器の活躍を見守っていたな、こいつは。

武器子は一通り自分の作った武器の活躍がいかに素晴らしかったのかを語り、カタストロフが他のマントに浮気しているのを見てぶち切れてから食卓についた。

一瞬、武器子はサクラよりも強い殺気を放っていた。

……デスサイズは大事にしよう。

「む？　俺が最後か」

次にやって来たのは、筋骨隆々の巨漢。

『剛力』こと、マックスだ。
筋肉を強調するかのように、サイズの合っていないパツパツの服を着ている。
だが、イベントの時と違って半裸ではない。
あのスタイルは、マックスの変装した状態だからな。
「おお！　マックスも来たか！　素晴らしい！　ギルドメンバーが全員集合したのは、いつ以来であろうか!!」
カタストロフが歓喜の声を上げ、マックスも食卓についた。
体がデカいから、椅子もテーブルもサイズが合っていない。
窮屈な感じだ。
それを気にせず、マックスは豪快に飲み食いを始めた。
そして、久しぶりにギルドメンバー全員が揃い、当然、今さっき行われたイベントの事が話題となった。
「――なるほど。結局、聖女とは決着がつかなかったのか」
「ええ。最初に足を削られたのが痛かったわね。時間切れになっちゃったわ。……あのリア充カップル。次こそは必ず粛清してやるわ」

「その時は俺も共に戦うぞ!!　俺も先程、最後の最後で剣聖に敗れてしまった!!　我が筋肉が1日に二度も敗れるなど、あってはならぬ事だ!!　リベンジは必ず果たす!!」

「ほどほどにしておけよ、お前ら」

「自重する気はないわ」

「キョウ!!　俺はお前へのリベンジも果たすからなぁ!!」

サクラとマックスは再戦に向けて荒ぶっていた。

しばらくは放置しておくのが正解か。

「キョウさん！　キョウさん！　最後はデスサイズを手放して戦っていたみたいですね！　そういう事態に備えて、サブウェポンであるナイフも私謹製の特注品にしませんか？　今ならお安くしておきますよ!!」

「……それも良いかもな。よろしく頼む」

「毎度ありです！　あ、ハンターさんは矢の方を凝ってみては如何ですか？　やっぱり、ロビンフットの弓に見合う矢があった方が良いと思うんですよね！」

「……か、考えておく」

「武器子よ。私は新しい杖を作ってほしいのだが」
「浮気野郎は黙っていてください」
「浮気野郎!?」
武器子は新しい武器のアイディアで頭がいっぱいのようだ。
ハンターはいつも通り、物静か。
カタストロフは武器子に嫌われていた。
イベント特典のマントに鞍替えした件が、相当頭にきているらしい。
そうして宴会が進んでいた時、酒場の扉が開けられた。
「お、お邪魔しまーす……」
おっかなびっくりといった感じでマインが入って来た。
このギルドは奇人変人の巣窟だと言っておいたから、少し警戒しているらしい。
そんなマインを見かねて、俺は手招きした。
マインは、パッと顔を明るくさせて、俺の隣の席に座った。
「ほお！　キョウの妹ではないか！　1週間ぶりだな！」
「久しぶりね。たしか、マインだったかしら？」

「へぇ！　妹さんですか！　あれ？　この子、イベントの2位の子じゃないですか!!」

「ど、どうも……」

マインは少し気後れしていた。

本来なら人見知りするような奴ではないんだが、前回の時のインパクトで、このギルドに苦手意識が出来てしまったのかもしれない。

サクラとカタストロフのせいだな。

「む？　君はあの時の少女じゃないか」

「……ハッ!?　その筋肉は!?　まさか!?」

「うむ！　俺の名はマックス!!　『剛力』の二つ名を持つ男だ!!」

そう言ってマックスはメニューを操作し、イベントの時の半裸姿になった。

そして、筋肉を強調するかのようなポーズを決めた。

「やっぱり……！　あの時の変態……！」

そう言って、マインは俺の後ろに隠れてしまった。

マックスは気にせずにポーズを決め続けている。

「ハッハッハ！　我が筋肉の美しさに目がくらんで直視できぬと見た!!」
……ウチのメンバーは、マインにとって悪影響しか与えないのかもしれない。
少し、つきあい方を見直した方がいいかもな。
すると、今度はマインの視線がハンターに向けられた。
「あの、さっきはすみません……」
「……き、気にしなくていい。……い、イベントでの事だ」
……何かあったのか。
「マイン。ハンターと何かあったのか？」
「あ、うん。さっきのイベントで最後の方に遭遇して……その、追いかけ回して倒しちゃって……」
……なるほど。
途中から矢が飛んで来なくなったから誰かに殺られたのかもしれないと思っていたが、ハンターを殺ったのはマインだった訳か。
それで、マインの順位にも納得がいった。
ラスト5分のボーナスタイムに、ポイント数トップ10のプレイヤーを倒せば、

十倍のポイントを獲得できるというルールだった。
俺とハンターの二人を倒したからこそ、マインは剣聖を抜いて2位になる事ができた訳だ。
と、ここでカタストロフが動いた。
席を立ち、マインの前に歩み寄る。
「キョウの妹。マインよ。貴様に提案がある。我がギルド『サクリファイス』に入ってみな……」
「あ、それはお断りします」
……まあ、そうだろうな。
「何故だ!?　お前の兄もいるし、メンバーは愉快な連中が揃っている!!　ウチに入れば楽しい毎日が待っているぞ!!　もうすぐギルド設立クエストが始まる!!　その時、私は貴様のツッコミという武器がほしいのだ!!」
「何を基準にスカウトしてるんですか!?」
「そう！　それだ!!　ウチのギルドには常識人のツッコミ役が欠けている!!　その才能をウチで伸ばしてみないか!?」

「結構です!!　パーティーを組んだ人が今度立ち上げるギルドに誘われてるんで、そっちに行きますから!!」
「くっ!!　無念だ!!」
こうして、カタストロフによるマインの勧誘は失敗に終わった。
マインはこんな日陰者の中にいるような奴ではないからな。
いくら身内の所属するギルドとはいえ、合わない場所に無理矢理入れるもんじゃない。
これはゲーム。
好きに遊ぶのが一番だ。
それに、
「マイン。今度は俺が勝つぞ」
他のギルドに行くのなら、お前は仲間ではなくライバルだ。
今回は引き分け。
決着は、いずれつける。

また、一緒に戦おう。

「――うん！　私も負けないから！」

マインも俺の言いたい事を理解したのか、実に良い笑顔でそう言った。

……やはり、家族と一緒に遊ぶというのは楽しい。

次の機会が楽しみだ。

ああ。

それと、一つ気になっていた事があったな。

「そういえば、お前がパーティーを組んだのはどんな連中なんだ？」

宿題をやらせる時や、食事の時にゲームの話題は何度も出したが、

どこのエリアに行っただの、どんな事をしただのという話がほとんどで、こいつのパーティーメンバーについては聞き忘れていた事を思い出した。

マインが、そいつらが作るギルドに所属すると言い出した事で、ふと気になったのだ。

そう。

本当に軽い気持ちで俺は聞いた。

「ユリウスさんっていう人がリーダーのパーティーだよ！　皆、凄い優しい人達だから、お兄ちゃんは心配しなくて大丈夫！」

……ユリウス？

「は？」

突然出てきた聞き覚えのある名前に、俺はフリーズした。

19　ギルド設立クエスト　開始

「諸君!!　遂にこの日がやって来た!!」

イベントの翌日。

元ギルドホームの寂れた酒場にて、カタストロフが語り出した。

「本日より、ギルド設立クエストの受注が可能となった!!　最凶の闇ギルド『サクリファイス』の本当の意味での復活の日は、すぐそこにまで迫っている!!」

その演説を聞いている者など、ほとんどいない。

今朝、いつものように召集のメールがカタストロフから発信されたが、今回はほぼ全員がこれを無視した。

今、ギルドにいるのは、カタストロフを除けば、俺とマインの二人だけだ。

他の連中は、いつも通り好き勝手に動いている。

サクラはリア充狩り、マックスは筋肉の布教活動という名のプレイヤー狩り、そんなところだろう。

ハンターは知らん。

そして、俺も召集のメールに従って来た訳ではない。
昨日、ちょっとした依頼を出した武器子を待っているだけだ。
ここを待ち合わせ場所として活用したからな。
マインは用があるので、俺が連れて来た。
ＮＰＣの露店で買ったコーヒーを啜りながら、カタストロフの演説を聞き流す。
カタストロフは一人でとうとうと語り続ける。
マインは、少し居心地が悪そうだ。
「お、お兄ちゃん……。あの人、ほっといていいの？」
「問題ない。いつもの事だ。可哀想だと思うなら、お前が話しかけてやれ」
「ええー……」
嫌そうだな。
まあ、気持ちはわからなくもない。
あの変人の相手は純粋にめんどくさいからな。
「あ、あの～……。そのギルド設立クエストって、どんな感じなんですか？」
「よくぞ聞いてくれたマインよ!!　ウチの薄情者どもに見習わせたいわ!!」

それでもマインは勇気を持ってカタストロフに話しかけた。
優しい妹を持って、兄は嬉しいぞ。
それの相手は任せた。
俺は、我関せずでコーヒーを啜る。
「よいか！　ギルド設立クエストは、まず、ギルドホームとなる建物と土地の購入から始まる！　これだけでも相当のゴールドが必要だ！
加えて、ギルドホームの改造にもゴールドは必要!!
さらに、我々闇ギルドは中央ギルドの支援を受けられない為、自力でそれだけの資金を調達しなければならない!!
結論!!　ギルド設立クエストとは!!　ただ、ひたすら金策に奔走するデスマーチである!!」
「は、はぁ……」
マインがチラリとこちらを見てきたので、軽く頷いておいた。
カタストロフが言っている事は間違っていない。
まあ、俺はβ版の中盤からこのギルドに入ったので、ギルド設立に関しては又聞

き程度の知識しかないが。

「あれ？　でも、それならお兄ちゃんの首にかかった懸賞金とか使えばいいんじゃ……？」

「さらっと酷い事を考えつくなお前は」

まあ、手段の一つとしてありといえばありだが……。

「それはダメだぞマインよ!!　懸賞金はPKにとってステータスなのだ!!　それを、たかが金策程度で手放すなど言語道断!!　私が許さん!!　それでは、私が極悪賞金首を束ねる悪の組織のボスという、素晴らしいポジションを追われてしまうではないか!!」

「それ、カタストロフさんの私情ですよね!?」

完全にカタストロフの私情だな。

だが、俺とて金策の為にわざと殺されてデスペナルティーを受けるというのは、あまり気分のいい話ではない。

やらなくていいのならばやりたくはない、最後の手段だ。

と、カタストロフがひとしきり語り終えたところで、ギルドの扉が開いた。

来たか。
「お待たせしましたキョウさん！　ご依頼の品を持って来ましたよ！」
「ああ。助かる、武器子」
「いえいえ！」
メニューを操作して、武器子から依頼したアイテムを受け取り、代わりにゴールドを支払う。
受け取ったアイテムは、普通の鎧と剣。
そして、そのままメニューを操作し、身に着けた装備を変更した。
ステータス画面を開いて、装備の性能を確認する。
ーーー
キョウ　ＬＶ１７
ＨＰ１００／１００　〈＋１５〉
ＭＰ　５０／５０
ＳＴＲ：９０　〈＋２８〉〈＋１５〉
ＶＩＴ：０　〈＋２５〉

ＡＧＴ：90　〈＋４〉　〈＋15〉
ＩＮＴ：０
ＤＥＸ：０
ステータスポイント　０

スキル
《大鎌：ＬＶ17》《攻撃力上昇：ＬＶ12》《速度上昇：ＬＶ12》《危険感知：ＬＶ10》《投擲：ＬＶ10》《隠密：ＬＶ９》《気配感知：ＬＶ５》《HP自動回復：ＬＶ３》《短剣：ＬＶ１》《剣：ＬＶ１》
スキルポイント　０

装備
武器：『グラム』
頭部：なし
胴体：『鍛鋼のブレストアーマー』

右腕：『鎧熊の籠手』
左腕：『鎧熊の籠手』
脚部：『俊足のレザーブーツ』
装飾：『力のペンダント』
ーーー
『グラム』
分類：両手剣
効果：〈ＳＴＲ＋18〉
ーーー
『鍛鋼のブレストアーマー』
分類：胴体装備
効果：〈ＨＰ＋15〉〈ＶＩＴ＋15〉
ーーー
『グラム』の攻撃力が、他の剣に比べて高いところに武器子のこだわりを感じるが、見た目的には普通の剣。

他の装備も、死神スタイルのように目立つ要素はなく、まさに普通の一般的なプレイヤーが着ける装備といった感じだった。

要望通りだな。

「変装スタイル、その2……いや、新しい普段着といったところか」

変装は、賞金稼ぎをはじめとした、PKをやる上での様々なトラブルを避ける為に始めた事。

そして、PK用の変装は死神スタイルで間に合っている。

この装備は、今後、普通のプレイをする時に使っていく事になるだろう。

そう考えれば、変装というよりは新しい普段着といった方がしっくりくる。

俺は腰に差したグラムを引き抜き、軽く振ってみた。

大鎌の感覚に慣れ親しんだ今となっては、少し違和感がある。

だが、それなりに戦う事はできそうだ。

「どうですか!?　グラムの振り心地は!?」

「悪くはない。大鎌に慣れた俺でも、そこそこ使いこなせそうだ」

「そうでしょう！　そうでしょう！　その為に変な癖のないシンプルさを意識し

た作りになっていますからね!!　いや～！　良い仕事をしました!!」

武器子は実に満足そうな顔をしている。

自信のある装備を作った時の顔だ。

この剣は、デスサイズの次くらいに信用してもいいかもな。

「……ていうか、お兄ちゃん、剣とか使えるの」

「使える。β版でも最初は剣を使っていたからな」

「え!?　そうなの!?　じゃあ、何で大鎌使いなんてロマン職にジョブチェンジしたの？」

「PKを始めた時に、より効率的にプレイヤーを殺せる武器を求めて試行錯誤し、最終的に大鎌に落ち着いた」

「ああ……。そこで道を踏み外しちゃったんだね」

「おい。その残念なものを見る目をやめろ」

実の兄に向ける目ではないぞ。

そういうのは、カタストロフにでも向けておけ。

「では、私はもう行きますね！　まだまだ作らなきゃいけない武器が沢山あるの

で！　今度会った時には、グラムを実戦で使ってみた感想を教えてください！」
「わかった」
「ではでは！　これにて失礼します！」
そして、武器子は去って行った。
この後は、また作業場に引きこもるのだろうな。
ゲームを楽しんでいるようで何よりだ。
「――さて、俺達も行くか。待たせたなマイン」
「いや、それはいいけどさ……。お兄ちゃん、本当について来る気？」
「ああ」
その為に、デスサイズをはじめとした専用装備を手放して、こんな格好をしたんだ。
今さら行かないなんて言える訳がないし、言うつもりもない。
「まったく!!　貴様まで行ってしまうとはな、キョウよ!!　せっかく割の良いクエストを見つけて来たというのに、誰一人として参加しないとは!!」
「悪いな、カタストロフ。それに関してはまた今度にしてくれ」

「ハァ……。まあ、よい。他の連中もそれぞれのやり方で金策を行っている事に違いはないのだ。それを咎める程、私の器は小さくはない。それに敵情視察も大事な事だ」

別に敵情視察のつもりはないんだがな。

ただ、少し気になっただけだ。

だが、まあ、敵情視察には違いないのか。

なにせ、これから、

――剣聖のパーティーに潜入しようというのだから。

20　『剣聖』のパーティー

マインと共にギルドを出て、奴らとの待ち合わせ場所である、『第二の街』の中央ギルドを目指す。

第二の街はイベント前の1週間の間に発見され、街の門番であるボスモンスターを倒せば、誰でも入れる状態になった。

俺も武器子を第二の街に入れる為に、アーマードベアに挑んだ時と同じメンバーで門番を突破しているので、普通に入れる。

そして、第二の街の開放に伴い、街と街を繋ぐ瞬間移動装置『ポータル』が各所に設置された。

これを使えば、長々と第二の街までの道程を歩く事なく、一瞬で移動できる。

当然、スラム街には設置されていない為、始まりの街までは歩く必要があるが。

そうして、始まりの街の正門近くに設置されたポータルを使い、第二の街の中央ギルド前に飛んだ。

「ここに来るのも久しぶりだな」

中世ヨーロッパ風の世界観である【アドベンチャーズ・オンライン】において、不自然な程に大きな建物。

これが、このゲームの中心部といっても過言ではない場所。

中央ギルド。

PKは、この中央ギルドの支援を受けられず、それどころか指名手配されているので、ここには基本的に寄りつかないのだ。

「ああ、お兄ちゃんにも、ここを使うような、まともな時期があったんだっけ」

「その言い方やめろ」

そんな会話をしながら、開け放たれた巨大な入り口を通って中に入る。

建物の大きさに見合う広大なエントランスに、大量のプレイヤー達がたむろしていた。

壁際には、膨大な数のクエストを記した張り紙が、討伐、採取などの分類をされて張り出され、

奥に行けば、受付嬢のNPCが何十人も座っており、今もプレイヤー達にクエストの説明を行っている。

懐かしい光景だな。

「で、待ち合わせ場所はどこだ？」

「え～と、3番受付の近くだから……あ！　いたいた！　お～い！」

マインは少し周囲を見渡した後、ある4人組の集団に向かって手を振りながら走り寄って行った。

俺も、その後に続いて歩く。

マインと4人組の話し合う声が聞こえた。

「遅いよマイン！　いや、『勇者』様って呼んだ方がいいのかな～？」

「シャロさん！　その名前で呼ばないでください！」

「え～。せっかくカッコいい二つ名がついたんだから、堂々としてればいいのに。ユリウスみたいに」

「う～！　でもぉ……」

「まあまあ。僕も開き直るまでには時間がかかったし、そう急かすものでもないよ、シャロ」

「そうですよ。私だって未だに『聖女』と呼ばれると鳥肌が立ちます。恥ずかしが

るのは普通の事です。ね、アイギス」
「……確かに。私も二つ名で呼ばれるのは、未だに少し抵抗がある」
そんな会話をしている４人組（マインを含めると５人）に近づく。
全員の視線が俺に集中した。
「マイン。彼が昨日メールで伝えてくれた人かい？」
「あ、はい。……兄です」
マインが微妙な顔をしているのが少し気になったが、深くは考えず、俺は剣聖に軽く頭を下げて挨拶した。
「キョウだ。今日はよろしく頼む」
「はじめまして。僕はユリウス。こちらこそ、よろしく。……ところで、今のは駄洒落と捉えるべきかな？」
「断じて違う」
ただの偶然だ。
「アッハッハ！　面白そうなお兄さんだね！　あたしはシャロ！　弓使いやってます！　まあ、そっちはおまけみたいなもんで、本職は感知系のスキル使った斥

候だけどね」
「私はアイギス。見ての通り、鎧と盾を使った壁役だ。危なくなったら、私の後ろに来てくれ」
「最後は私ですね。ジャンヌと申します。光と回復、それと支援の魔法を使う後衛です。よろしくお願いしますね」
「ああ。よろしく頼む」
シャロとやらは、軽装に弓を背負い、腰にナイフを差した、俺と同い年くらいの少女。
アイギスは、ガチガチの全身鎧に身を固め、大盾を装備した正統派の壁役の女。
そして、聖女はイベントで遭遇した時と同じ、神官服のような装備を着こんだ魔法使いだ。
ちなみに、こいつらには俺が『死神』だというのは秘密の方針でいく。
バレると、めんどうな事になるかもしれないからな。
……それにしても、男1人に女4人のパーティーか。
こういうのをハーレムというのだったな。

サクラが見たら、我を忘れて殺しにかかりそうなパーティーだ。
……後でマインに忠告しておくか。
「じゃあ、メンバーも揃った事だし、そろそろ行こうか」
「はい！」
「了解！」
「うむ」
「わかりました」
「ああ」
そして、剣聖の一言で、パーティーが行動を開始する。
俺も事前にマインに聞いていたので、今日の予定は知っている。
ダンジョン攻略だ。

ダンジョンとは、その名の通り迷宮である。
このゲームの至る所に存在し、入る度に変わる地形や、凶悪なトラップ、無限に

沸き出すモンスターが、侵入者を進行を阻む。
その代わり、ダンジョン内に設置されている宝箱からレアなアイテムを得たり、モンスターの討伐によって経験値やドロップアイテムを稼いだりと、リターンも多い場所。
それがダンジョンだ。
ダンジョン攻略は、このゲームにおける王道の楽しみ方の一つといえるだろう。
今回狙うのは、第二の街周辺にあるダンジョン『死霊の洞穴』。
その名の通り、アンデット系モンスターが多数出現するダンジョンだ。
剣聖達は、このダンジョンで手に入るアイテムを狙うと同時に、中央ギルドで『死霊の洞穴のボスモンスター討伐』というクエストを受けた。
つまり、今日の予定は、ダンジョンで稼げるだけ稼いだ後にボスを倒して撤収という事になる。
それをする理由はというと、
「――――やはり、お前達も金が必要という事か」
「まあ、そういう事になるかな。やっぱりギルド設立クエストにはお金がかかるか

らね」

どこも同じという事だな。

剣聖がギルドマスターを勤めていたギルド『王道騎士団』は、β版においてかなりの知名度を誇る大規模ギルドだった。

話を聞いたところ、β版の頃のギルドメンバーも総出で金策に奔走しているらしい。

人数が多ければ、それだけ大きなギルドホームが必要になり、結果として金がかかる。

だからこそ、実入りの良いダンジョンに潜り、さらに中央ギルドのクエスト受ける事で報酬を得ようとしている訳だ。

このクエストの報酬というのが馬鹿にならない。

ゴールド以外にも、貴重なアイテムや、そのクエストでしか手に入らないものが報酬となる場合もある。

俺達闇ギルドには真似できない事だ。

「お前達もって事は、キョウもお金が必要なのかい？」

「ああ。俺もβ版時代のギルドを再興させようとしている最中だからな」
「え!?　キョウってβテスターだったの!?　いいな～！　羨ましい！」
話の途中でシャロが割って入って来た。
斥候の仕事はどうした。
「このパーティーの中じゃ、あたしとマインの二人が新参者なんだよね。最初は初心者同士二人で組んでたんだけど、なんやかんやあって、今はこのパーティーに入れてもらったんだ～」
「ほう」
俺がプレイヤーを殺して回っている間に、マインの方はそんな事になっていたのか。
まさに正統派の楽しみ方だな。
王道騎士団に入ろうとするのもわかる。
「でも、同じ初心者なのに、昨日のイベントでマインにも差をつけられちゃったんだよね……。あたしだけカッコいい二つ名持ってないとか、ちょっと悔しい！」
まあ、マインはこのゲームにおいては初心者でも、恵まれた運動神経と重度の

ゲーマーとしての経験値があるからな。

ゲームに慣れれば、他の初心者とは一線を画すだろう。

実際、多少運に助けられたとはいえ、剣聖を抜いてイベント2位になったという実績がある。

「うー……。昨日のイベントは散々だったよ。最初にいた森林エリアで突然『死神』に襲われて死ぬわ、リスタートした草原エリアでは、でっかい剣振り回してた人に殺されるわ、挙げ句の果てには山岳エリアで半裸の変態に追いかけ回されるわ……」

それはまた、なんとも運のない奴だな。

そして、気づかぬうちに、俺もこいつを殺していたらしい。

斥候のくせに危機管理が甘いんじゃないか？

「まあ、昨日のイベントは運の要素も強かったし、攻撃力の高い者が有利な内容だった。仕方がないといえば仕方がない。……それに、半裸の変態とは私も遭遇したしな」

「僕も最後の方で遭遇したね。変態だけど彼も有名なPK。強い者に負ける事は恥ではないさ。僕も『死神』にやられてしまったしね」

「私も、不意討ちなんてマネをしておきながら、満身創痍の『死神』を取り逃がし、『妖刀』も倒し切れませんでした。多かれ少なかれ、誰しも手落ちがあったのです。これから強くなればいいのですよ」

「み、皆……！　そうだよね！　こんな事で凹んでられない！　よーし！　強くなって、次のイベントで大活躍するぞー!!」

俺が黙っている間に、他のメンバーが落ち込むシャロを慰めていた。

それを受けてシャロは心打たれたのか、なにやら奮起したようだ。

そして、マックスの言われようが酷い。

事実だから、フォローは入れないが。

そして、マインは何やら微妙な顔をしていた。

「どうした？」

「いや……。こうやって改めて聞くと、半分以上がお兄ちゃん達の犯行だなって思って、なんか微妙な気分になっただけ」

「そうか」

そんな、俺の正体に繋がりそうな会話だったが、小声で行われていた為に、騒ぐ

シャロの声にかき消されて、他のメンバーに気づかれる事はなかった。

そうしてエリアを移動する事しばらく。

ようやく目的のダンジョンに辿り着いた。

「よし、行こうか」

剣聖の声に従って、メンバー達がダンジョンに入って行く。

斥候のシャロが最前列。

そのシャロをいつでも守れる位置に、壁役のアイギスとアタッカーの剣聖。

その後ろに聖女が続き、背後からの襲撃を警戒して、最後尾にマインがつく。

俺はゲストという事で、パーティーの陣形を崩さないように、マインの更に後ろからついて行く形だ。

そして、ダンジョンに入ろうとした時、――俺は、ふと後ろを振り返った。

「？」

「お兄ちゃーん！　何してるの？　おいてくよ！」

「……ああ」

視線を感じた気がしたんだが……気のせいか？
少し引っ掛かるものを感じながらも、俺は急かすマインに続いてダンジョンに足を踏み入れた。

21　ダンジョン攻略

「ダンジョンの中って、薄暗くて嫌だよね～。あ、そこの角トラップがあるから気をつけて」

ダンジョンに入ってからしばらく。

俺達は、シャロの持つスキル、《気配感知》《罠感知》《マッピング》などに助けられながら、順調に先に進み、モンスターを討伐していった。

斥候を名乗るだけあって、《気配感知》のスキルレベルも、俺とは比較にならない程に高い。

かなり離れた位置にいる敵も見逃さないし、罠の発見や道案内にも余念がない。

こうした人員がいると、ダンジョン攻略は非常に楽だな。

ウチのギルドでは真似できない。

「む！　なんかモンスターが一塊になってこっち向かって来てる！　結構数が多いよ！　注意して！」

そんなシャロが警戒を促した。

全員が、その場で戦闘態勢を取る。
さすが王道騎士団。
動きがとてもスムーズだ。
「来たよ！」
そして、目視できる範囲にまで敵が近づいて来た。
動く鎧『リビングアーマー』が2体。
動く死体『ゾンビ』の進化系である、機敏に動く死体『グール』が3体。
そして、醜い巨人を腐らせたようなアンデット系モンスター『トロルゾンビ』が1体。
計6体のモンスターが同時に現れた。
ちょうど、こっちの人数と同じだ。
この数で来るのは、少し珍しいな。
さて、戦闘が開始だ。
「《シャインストリーム》！」
「《ホーリーランス》！」

まずは、聖女とマインの遠距離攻撃が相手に襲いかかる。
アンデット系のモンスターは光属性が弱点。
これだけでも、相当のダメージを与えられる。
二人の魔法は、一番前にいたリビングアーマー2体に命中。
しかし、そいつらが壁になった事で、他のモンスターは守られた。
しかも、リビングアーマーは防御力の高いモンスター。
弱点である光魔法を食らっても、一撃では死ななかった。
範囲攻撃の《シャインストリーム》に加えて、追い撃ちのような形でマインの《ホーリーランス》を受けた1体は消滅したが、もう1体はまだ健在。
残り5体。
剣聖が瀕死のリビングアーマーを斬りふせながら、声を上げた。
「マインとキョウは僕と一緒にグールの相手を!!　ジャンヌ、アイギス、シャロはトロルの相手をしてくれ!!」
「「「「了解！」」」」
ゲストとはいえ、今は俺もこのパーティーの一員。

リーダーの指示には従う。
言われた通りに飛びかかって来るグールの１体を迎え撃った。
「ハッ!!」
グラムを振るい、グールの首筋を刺突で貫く。
プレイヤーや普通の人型モンスターならこれで終わりだが、アンデット系モンスターは例え人型をしていても、首筋が弱点とは限らない。
体がバラバラになるか、HPを全損するまで動き続ける。
それがアンデットだ。
実際、グールは首から上を失っても、普通に動き続けていた。
大振りなで隙だらけなパンチが俺を目掛けて放たれる。
その腕を斬り落としながらグールの横を抜けて後ろに回り、振り向きざまに背中を斬りつける。
「《スラッシュ》」
新たに取得したアーツによって、グラムの刃がグールの胴体を切断し、HPを削り切って消滅させた。

見れば、剣聖とマインも、俺とほぼ同時にグールを倒していた。
だが、その間に、最後に残った大物であるトロルゾンビが、手に持った巨大な棍棒を後衛組目掛けて振り下ろした。
「《ガード》！」
それをアイギスが、盾のアーツで真っ向から受け止める。
トロルゾンビは体格だけならアーマードベアに匹敵するモンスター。
ボスではないとはいえ、そのパワーは非常に高い。
その攻撃を受けて小揺るぎもしていないあたり、さすが『鉄壁』の二つ名で呼ばれるだけの事はある。
「《リフレクター》！」
そして、アイギスは更なるアーツでトロルゾンビの体勢を崩した。
《リフレクター》は、受けた衝撃をそのまま相手に返すアーツ。
モンスター相手ならともかく、プレイヤー相手には、タイミングを見計らうのが難しい技だ。
だが、今の相手はAIの性能が低く、動きが単純なアンデット系モンスター。

アーツは問題なく発動し、トロルゾンビの巨体が大きくのけ反った。
「今だ!!」
剣聖の掛け声に合わせて、全員が攻撃を集中させる。
何発もの斬撃が、魔法が、矢がトロルゾンビに突き刺さり、速攻でHPを削り切られたトロルゾンビは光の粒子となって消滅した。
戦闘が終わった後、俺は剣聖達に話しかける。
「さすがだな。あの数相手でも全く危なげがない」
「いや、それはお互い様だよ。君も相当強い」
「ほんと、普通にユリウス並みじゃない？　なんで、こんなに強いのに無名なんだろうね？」
「ああ、それは私も気になりますね」
「同感だな」
なにやら、俺の事情に興味を持たれたらしい。
俺は無名ではなく『死神』の二つ名が広まっているが、それを知られるのはまずい。

ここは適当に煙に巻くか。
「俺は、表立っては活動していないからな」
「ふ〜ん。変なの」
「まあ、そういう方もいるでしょう。他人のプレイスタイルにとやかく言うつもりはありませんよ」
「そうだな。あまり詮索するものではない」
「はーい……」
「あ、あはは……」
マインが引きつった顔で笑っていた。
その顔やめろ。
別に嘘は言っていないだろうが。
その後も順調にモンスターを倒し、宝箱を見つけ、階層を進んだ。
ゲストという事で控えめに参加している俺ですら、大分イベントリが潤ってきた。
そのタイミングで、剣聖が話し始める。
「さて、それなりにモンスターも倒したし、アイテムも手に入れた。そろそろボス

に挑もうかと思うんだけど、どうかな？」

その問いに、他のメンバー達が答えた。

「良いと思います。既に１日の成果としては充分稼ぎましたし、あまり消耗する前にボスと戦うのが一番でしょう」

「私も問題ない。ポーションも節約できているし、ジャンヌの回復魔法もある。壁役としての役目は充分果たせるだろう」

「あたしも賛成～！　そろそろこのダンジョンも飽きてきたところだしね！」

「私も大丈夫です！　まだまだ動けます！」

元気な連中だな。

まあ、この程度で音を上げるような奴らではないか。

「キョウ。君はどうかな？」

そして、剣聖が俺にも問いかけてきた。

「ああ。俺も問題ない。大分慣れてきたところだ」

剣の扱いについても、このパーティーでの動き方についてもな。

「そうか。――じゃあ、行こう」

そうして俺達は、ボスモンスターのいるダンジョンの最下層へと歩を進めて行った。

22　ドラゴンゾンビ

ダンジョン『死霊の洞穴』最下層。
そこには大きな扉があった。
元は豪華な装飾がつけられた立派な扉だったのだろうが、今は錆び付き、所々が破損し、不気味な雰囲気を漂わせている。
「開けるよ」
剣聖の言葉に全員が頷く。
そして、剣聖は錆びた大扉を開け放ち、俺達はダンジョンの最深部、ボス部屋に足を踏み入れた。
部屋の中心には、1体のモンスターがいた。
全長10メートルはあろうかという巨体。
全身が強固な鱗に覆われていながら、その一部は剥がれ落ち、腐った肉や骨が露出している。
ここの扉と同じく、元々は立派だったのだろうが、今やその面影もない。

絶対強者の成れの果て。
それが、俺のこのモンスターに対する印象だった。
そのモンスターの名は――――『ドラゴンゾンビ』。
このダンジョン『死霊の洞穴』のダンジョンボスだ。
ドラゴンゾンビが伏せていた巨体をゆっくりと起こし、こちらを睥睨する。
傷だらけの翼を広げ、何本かの牙が欠けた口を開き、咆哮を上げた。
「ボォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」
低く、くぐもった声。
それと同時に、ドラゴンゾンビの頭上にHPバーが表示され、戦闘が始まった。
「来るよ!!」
ドラゴンゾンビが、こちらに向けて突撃して来る。
「《シャインストリーム》！」
「《ホーリーランス》！」
先程の戦闘時と同じように、聖女とマインの魔法がドラゴンゾンビに襲いかかる。
あの巨体では避ける事はできず、アンデットの弱点である光魔法は二つとも直撃

した。

……しかし、ドラゴンゾンビのHPはほとんど減らない。

さすがはダンジョンボス。

タフだ。

そして、ドラゴンゾンビがの突撃が、俺達に到達する。

「《フルガード》!!」

それを、アイギスが《ガード》の上位スキルを使って受け止める。

「うぐ……!!」

しかし、さすがにこのレベルのモンスターを相手に完全には止めきれないらしく、アイギスは押され始めた。

あれだけの攻撃を受ければ、盾と鎧の上からでもHPが減っているだろう。

「《エンチャント・ディフェンス》！　《ハイヒーリング》！」

その問題は聖女が解決した。

支援魔法の青い光と、回復魔法の白い光がアイギスを包み込み、それによって強化され、回復したアイギスは、ドラゴンゾンビの突撃を受け止めきった。

「《リフレクター》!!」

そして、トロルゾンビの時と同じように、衝撃を跳ね返されたドラゴンゾンビは、腕を大きく弾かれ、体勢を崩した。

「攻撃組！　行くよ！」

「はい！」

「ああ」

剣聖の指示に従い、俺とマインと剣聖のアタッカー３人がドラゴンゾンビに攻撃を仕掛ける。

「《エンチャント・アタック》！」

聖女の支援魔法によって、攻撃力が底上げされる。

イベントの時に苦しめられた魔法だが、味方となると心強いな。

もっとも、これが終われば、また敵同士だが。

「《クロスソード》！」

「《ホーリーランス》！　《ソニックブレイド》！」

「《スラッシュ》」

それぞれのスキルをドラゴンゾンビに叩き込み、その後も通常攻撃とアーツを交互に繰り出す。

体勢を立て直したドラゴンゾンビが暴れる。

振るわれる腕や尻尾を避け続け、攻め続ける。

後方からは、ポーションでMPを回復させた聖女の光魔法と、シャロの矢が飛来している。

それでも、ドラゴンゾンビのHPは、なかなか削れない。

攻撃自体は、AIにより決められた動きしかしてこない為、避けるのは容易いが、この延々として進まない作業のような感覚はどうにも苦手だ。

しかも、俺の防御力では、直撃を受ければ一撃でアウトだろう。

緊張感があるといえばあるが……俺の求めているスリルとは、どこか違う。

やはり、モンスターの相手は、あまり好きになれないな。

「ボォオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

そんな事を思いながら、HPを削る機械となっていた時、突如ドラゴンゾンビが咆哮を上げ、その口に黒い光が集まり出した。

「ブレスだ！」

「皆！　私の後ろへ！」

言われた通りに、俺はアイギスの後ろに待避した。

アイギスが守れる位置に、パーティーメンバー全員が固まる。

そして、ドラゴンゾンビの口から、黒いブレスが放たれた。

「「《プロテクション》!!」」

聖女とマインが《光魔法：ＬＶ１０》で覚えられる魔法（プロテクション）という光の壁を、迫り来るブレスの前に展開する。

しかし、ブレスはそれを軽く粉砕した。

だが、勢いは確実に削れている。

「《ワイドガード》!!」

勢いの削れたブレスを、アイギスが更なる盾のアーツで受け止めた。

アイギスの盾を核とするように、《プロテクション》とも違う半透明のバリアが前方に現れ、それによって俺達は守られた。

ウチの壁役である半裸の変態にはできない事だ。

「さすがだな。『鉄壁』」
「……あまり二つ名で呼んでほしくはないんだが」
善処しよう。
このパーティーにいる間は。
そうこうしているうちにブレスが止み、俺達は攻撃を再開した。
アイギスの守備範囲から出て、ドラゴンゾンビに飛び掛かる。
叩きつけられる巨大な腕を紙一重で避け、グラムを突き立てる。
狙いは鱗が剥がれ落ち、骨が露出している部分。
ここが弱点だ。
他の部分を斬るよりも遥かにダメージが通る。
そのまま傷口を広げるように、グラムを突き立てたまま走り抜ける。
これだけやっても、ドラゴンゾンビのHPは大きくは減らない。
剣聖とマインが俺と同じように削り、聖女の光魔法とシャロの矢が更に削り、それでもドラゴンゾンビのHPは半分以上残っている。
これがボスモンスターの強さだ。

アーマードベアもそうだったが、とても俺一人では太刀打ちできない。
倒せなくはないだろうが、気の遠くなるような時間がかかるだろう。
だが、そんな強敵でもパーティーで挑めば勝てる。
少しずつ、だが、確実にドラゴンゾンビのHPは削れている。
その巨体には、ダメージを受けた証である赤い光が増え続ける。
こちらのダメージは、ポーションと聖女の回復魔法で回復できる。
それによって生じる隙は、アイギスの守りが補う。
共に戦ってみて、改めてわかる。
こいつらは、凄まじくバランスが良く、隙のない強力なパーティーだ。
ゲーム内屈指の個人戦闘力を誇る剣聖。
それを十全にサポートし、なおかつ自身も大きなダメージソースとなれる聖女。
パーティー全員を守って余りある鉄壁の防御力と、それを使いこなすだけのプレイヤースキルを持ったアイギス。
それだけでも厄介なのに、剣も魔法も使えて手数の多いマインが補強する。
シャロという索敵要員までいる為、不意討ちすらも容易には通らない。

俺一人で正面から敵対すれば、勝ち目はほとんどない。
イベントの時も、サクラが剣聖と聖女を引き離してくれなければ、勝率は半分を切っていただろう。
こいつらは、まごうことない強敵。
だが、だからこそ、戦う機会が待ち遠しい。
ライバルは、強い方が燃える。
マインがこのパーティーに入ってくれて良かった。
そんな強いパーティーに俺まで加わって戦っているのだ。
ドラゴンゾンビごときに遅れは取らない。
倒すのに時間はかかるが、油断さえしなければ敗北はない。
それくらい、こいつらの戦闘には危なげがない。
そして、その時はやって来た。
ドラゴンゾンビのHPが風前の灯火となる。
「《エレメンタルソード・ライト》!!」
アーツにより、剣聖の持つ剣が光輝く。

あれは、俺がアーマードベアに使った《斬首》と似ている。
威力は高いが、モーションが大きく隙も大きい、トドメ専用の大技。
それが、ドラゴンゾンビを縦に両断した。
「ボォオオオオオオオオオオオオオオ！！！」
最後に咆哮を上げて……ドラゴンゾンビのHPは尽きた。
巨体が光の粒子となって消滅していく。
《レベルアップ！　ＬＶ１７からＬＶ１８になりました》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
終わったな。
実に面倒な作業だった。
だが、とても有意義な時間でもあった。
ライバルの強さを確認できたのだからな。
「皆、お疲れ様」
「ふぅ……。本当に疲れました。やっぱりボスモンスターの相手は気が抜けません

からね。ユリウスもお疲れ様でした」
「私はひたすら守っていただけだからな。一番労われるべきは、動き続けだった攻撃組だろう」
「本当にね～。あたしなんて、ちまちまと矢射ってただけだし。あとはポーションの補給くらいしかやってないよ。お疲れ勇者様！」
「二つ名で呼ばないでください！　でも、シャロさんのサポートも助かりました！　ありがとうございます！」
剣聖達は、互いに互いを労う。
こうして改めて見ると、マインはちゃんとこのパーティーに溶け込めている。
元々、俺よりも遥かにコミュニケーション能力の高い奴だから、さして心配もしていなかったがな。
楽しそうで何よりだ。
「キョウもお疲れ様」
剣聖が俺にも話しかけてきた。
「どうだったかな？」

「……さすがに少し疲れた。慣れない事をしたからな」
「へぇ、何だか意外だよ。君も普通に疲労するんだね」
「お前は俺を何だと思っているんだ？」
この短時間で化け物認定でもしていたのか？
それにしたって、お前には言われたくないぞ。
「ふふ、冗談だよ。半分くらいはね。――さあ、帰ろうか。無事に帰るまでが冒険だ。気は抜かないようにしよう」
そう言って、剣聖はボス部屋の突き当たり、ボスモンスターを倒す事によって出現したポータルに向かって歩いて行った。
あれに乗れば、一方通行でダンジョンの外に出る事ができる。
ダンジョン内には、その手のポータルが階層ごとに設置されている。
そのポータルに順番に乗る。
その順番はダンジョンに入った時と同じだ。
すなわち、シャロ、アイギス、剣聖、聖女、マインの順で外に出て行った。
俺もそれに続く。

そうして外に出た瞬間。
「避けて、お兄ちゃん!!」
マインの焦ったような声が聞こえた。
それとほぼ同時に《危険感知》が反応。
正面から迫って来る魔法の存在を知らせてくれた。
俺は、それを冷静に避ける。
この事態は予想できた事だ。
それ故に、俺の行動には迷いはない。
魔法を避けて周りを見渡せば、剣聖達を包囲するように展開する、無数のプレイヤー達の姿が見えた。
なるほど。
状況はわかった。
俺がダンジョンに入る前に感じた視線。
どうやら、あれは勘違いではなかったらしい。
「待ち伏せか」

ボスモンスターのドロップアイテムが欲しい時などに、PKがよくやる事だ。
アーマードベアの時に、俺達も似たような事をやった。
故に、驚きはない。
まさに剣聖が言った通り。
無事に帰るまでが冒険という、ただそれだけの話だ。
俺は、俺達を取り囲む同業者の群れを、油断なく見渡した。

23　同業者

「ほう。完全に不意討ちが決まったと思ったのですが、避けますか。あなたもやりますね」

軍服のような装備を着た糸目の男が、そう言って拍手を送ってきた。

こいつが指揮官か？

見たところ、俺達を囲んでいるPKは20人近くいる。

しかも、ある程度、統率が取れている。

イベントの時の雑魚軍団と違って、血気に逸る馬鹿がいないのが、その証拠だ。

「サーベルさん、もうやっちゃっていいっすかね？」

「俺ら、もう我慢できないんすよ！」

「ハーレム野郎、死すべし!!」

訂正。

あまり統率が取れている訳ではなさそうだ。

今にも飛び掛かって来そうなのが何人かいる。

「ダメですよ。イベントで彼らの強さは知っているでしょう。連携して挑まねば犬死にするだけです」
「チッ」
「了解ー……」
「連携して殺す……！」
だが、それを糸目の男が上手く纏めている。
……少し面倒だな。
有象無象でも、連携がしっかりしていれば、それなりに強い。
数は力だ。
「一応聞くけど、目的は何かな？」
剣聖が武器を構えたまま問いかける。
「そうですね。自己紹介もかねてご説明しましょう」
糸目の男は、胸に手を当て、おどけた調子で語り出した。
「我々はこの度新しく設立する予定の闇ギルド『ダークマター』の一員です。あなた方を狙ったのは、ギルド設立クエストに伴う金策の一環。――そして、腕試し

の為ですよ」
「腕試し？」
「ええ。あわよくば、ボスモンスターあたりのドロップアイテムでも手にできればという思いもありますがね」
そちらはあまり期待していないような言い方だな。
まあ、PK行為が成功したとしても、目的のアイテムが手に入る確率は決して高くはない。
死に戻りでどのアイテムをロストするか、キルによってどのアイテムを手に入れるかは完全ランダム。
それに、ボスドロップが欲しいなら、わざわざ強い奴に挑む必要はない。
「我々は『死神』をはじめとした高名なプレイヤーキラーに感銘を受けて集った身。しかし、ご存知の通り、PKというものは意外と難しい。それも当然の事ですよね。ステータスというものが明確に定められたゲームにおいて、自身と同等の能力を持った相手を倒そうというのです。難しいに決まっている。それを容易く成し遂げてしまう『死神』は化け物としか言えません」

糸目の男の言葉を聞いて、マインが俺にジト目を向けてきた。

やめろ。

そんな目で見るな。

「故に、我々は集まりました。１人でできないのなら、皆でやればいい。小さな力でも、集まれば『死神』に匹敵する強さとなる。それを証明したいのですよ」

「なるほど。それで、僕達を狙ったのか」

「ええ。『死神』の宿敵と名高い『剣聖』のパーティーを打ち倒したとなれば、これ以上ない力の証明となるでしょう。しかも、昨日のイベントにおいて『死神』と引き分けた『勇者』までもが加入している。挑まない理由がありません」

そこまで言って、糸目の男は腰に差した剣を抜いた。

どうやら、お喋りはここまでのようだな。

「私はサーベル。闇ギルド『ダークマター』の幹部を名乗っています。『剣聖』ユリウス、『勇者』マイン、並びにそのパーティーの皆さん。――――いざ、尋常に勝負を申し込みます」

「ダンジョン攻略で疲れているから断る。……と言いたいところだけど、そう言っ

ても引き下がってはくれなさそうだね？」
「はい、もちろん。疲弊したところを狙うのは、PKの基本戦術の一つですから」
マインのジト目が強くなった。
やめろ。
あれと一緒にするな。
俺はそんなせこいマネはしないぞ。
基本的に、視界に入った奴を、無差別に襲撃してるだけだ。
「では、参ります。――皆さん」
「よしきた！」
「任せろ！」
「ハーレム野郎、ブッコロス!!」
そして、戦闘が始まった。
向こうの弓使いがこちらに向かって弓を引き、魔法使いが杖を向けた。
まずは遠距離攻撃で牽制。
正攻法だな。

「アイギス!!」
「わかっている！　《ワイドガード》！」
それに対する、剣聖の対処法もまた正攻法。
ドラゴンゾンビ戦でも見せた半透明のバリアが俺達を守る。
――だが、この場合は、こうした方が早い。
俺は、アイギスの盾が展開する前に、奴らの攻撃が放たれる前に、奴らに向かって突撃した。
「お兄ちゃん!?」
狙うは指揮官の首。
統率が取れなくなれば、あとは如何様にも料理できるだろう。
そうして振るったグラムの一撃を、糸目の男、サーベルは手に持った剣で防いだ。
「わ、重いですねぇ」
「ほう」
しかし、どうやら攻撃力は俺の方が遥かに上。
だが、グラムの勢いを止めきれなかったサーベルは、巧みな剣さばきで攻撃を受

け流し、反撃してきた。
そのまま数度剣を交え、互いに距離を取る。
俺はアイギスの守備範囲の中に待避した。
……あいつ。
弱いから徒党を組んだと言っていたわりには、普通に強いじゃないか。
「キョウ……。無茶をするね」
「ほんとだよ！」
剣聖とマインが苦言を呈してきた。
他のメンバーも、咎めるような顔で見てくる。
無茶をしたつもりはないんだがな……。
「数の多い敵に対して遠距離での削り合いは悪手だろう。こちらから速攻で攻めるのが最善手だと思うが……」
「だとしても無茶は無茶だよ。僕が言ってるのは、１人で突っ走るなって事。僕達は今パーティーなんだから、一緒に戦うべきだと思うんだ」
「……わかった」

確かに、その言葉には一理ある。
今の俺は、こいつのパーティーの一員。
リーダーの意向には従うべきだ。
「わかってくれたならいいよ。――じゃあ、反撃だ。次は攻撃組全員で出る。ジャンヌ、僕らに支援魔法を」
「わかりました。《エンチャント・アタック》」
支援魔法の青い光が俺達を包み込み、攻撃力を底上げする。
「アイギス、《ワイドガード》は後どれくらい持つ？」
「10秒といったところだな。そんなに長時間展開していられるアーツではない」
「わかった。なら、《ワイドガード》が解除されると同時に突撃だ。マインとジャンヌは、その瞬間に《プロテクション》を頼む。シャロはアイギスの後ろでサポートをよろしく」
「はい！」
「わかりました」
「任せて！」

剣聖を中心に、次々と作戦が決まってゆく。
……これが本物の連携か。
大雑把に役割だけ決めて、あとは好き勝手にやる『サクリファイス』にはない強さだな。
見習うべきかもしれん。
そして、アイギスの《ワイドガード》が解けた。
「行くよ！」
「「《プロテクション》！」」
前方に展開された二枚の光の壁が、《ワイドガード》に代わって俺達を守る。
それが砕ける前に、俺達攻撃組は相手の懐に飛び込んだ。
「させるか!!　《ワイドガード》!!」
「「「《ワイドガード》!!」」」
相手にも大盾使いの壁役は何人もいる。
そいつらが一斉に《ワイドガード》を発動。
何重にも重なった半透明のバリアが奴らを守る。

だが、このアーツには弱点がある。

相手の攻撃を防ぎ、味方の攻撃は通すという一見万能なバリアだが、実は純粋な近接攻撃に弱い。

《ワイドガード》は、あくまでも範囲攻撃から仲間を守る為のアーツ。

万能な技など、このゲームにはないのだ。

「《スラッシュ》」

真っ先に辿り着いた俺の攻撃が、半透明のバリアを打ち砕く。

そのまま、バリアの後ろに隠れていた魔法使いを１人斬り殺し、振り向きざまに大盾使いの１人の首をはねる。

バリアを展開していた内の１人が殺られた事で、俺が破った部分以外にも、バリアに穴が空く。

そこから飛び込んだ剣聖とマインが、俺と共にバリアの内部で暴れまわった。

「ハァ!!」

「とりゃぁ!!」

「クソッ……!?」

「やっぱ強ぇ……！」

それでも、奴らは数に任せて俺達を取り囲み、袋叩きにしようとしてきた。

だが、昨日今日集まった烏合の衆の連携にやられる程、俺も剣聖もマインも弱くはない。

加えて、後方からの聖女とシャロによる援護射撃。

良いタイミングで放たれる攻撃が、相手の動きを止め、ダメージを与えた。

結局、息巻いていた『ダークマター』とやらは数分としないうちに剣聖パーティーの連携に敗れ、最後に残ったサーベル以外の全員が死に戻った。

「……さすがにお強いですね。やっぱり急ごしらえのパーティーでは勝てませんか……。それでも、1人くらいは殺れるかと思っていたんですが、どうやら甘かったようです」

そう言うサーベルの体は、既にボロボロになっていた。

四肢の半分を失い、体中がダメージを受けた証として赤く光っている。

あと一撃でも食らわせれば、死ぬだろう。

そんなサーベルに、俺は容赦なく剣を振り下ろした。

「今回は我々の負けです。ですが、近いうちにまたお会いしましょう。今度はウチのギルドマスターも一緒に」

それだけ言い捨てて、サーベルは光の粒子となって消滅した。

こうして、予定になかった戦いは、わりとあっさり終結した。

ただ、闇ギルド『ダークマター』という不気味な存在の事を、俺達は知ったのだった。

24　冒険の終わり

サーベル率いる『ダークマター』を撃退し、帰路を進む。
当然、さっきのような事が二度起こらないという保証はないので、警戒しながら。
だが、このパーティーには索敵に特化したシャロがいる。
ポータルで移動した直後のような特殊な状況でもない限り、待ち伏せも奇襲も、そうそう食らわない。
故に、俺達は警戒しながらも余裕を持って歩いていた。
戦闘エリアに出ている間は、常にこうして程よい緊張感を維持する。
それは、このゲームの基本だ。
「結局、さっきの連中なんだったんだろうね～」
「通り魔、もしくはモンスターの一種のようなものだ。あの手の輩を一々気にしていては、ゲームを楽しめないぞ」
「アイギスの言う通りです。……しかし、彼らがより人数を集めて規模が大きくなるというのなら、『死神』よりもタチの悪い事になりそうですね……。そこが心配

です」

「ジャンヌは心配性だな～。大丈夫だって！　何人でかかって来ようが、今回みたいに勇者様が倒してくれるから！　ね～、マイン～」

「だから、勇者って呼ばないでください！」

女３人寄ればかしましい。

そんなことわざがある。

それを体現するかのように、パーティーの女連中はお喋りに興じていた。

……索敵が不安になってきたな。

俺はもう少し、気を引き締めよう。

「キョウ。さっきはお疲れ様」

と、そこで女連中に交ざらなかった剣聖が、俺に話しかけてきた。

「別に問題ない。対人戦は得意分野だ」

「そうか……。じゃあ、今日の冒険は楽しかったかな？　ダンジョン攻略」

「……まあ、悪くはなかった」

たまには、人を殺さない冒険というのも悪くはない。

いや、最後の最後で殺しはしたが、PK相手は例外だ。
PKを殺しても懸賞金は上がらないしな。
「そうか。良かったよ。君が楽しんでくれて」
「……お前は俺を楽しませようとしていたのか？」
「そうだね。君には普通の冒険の楽しさを知ってほしかったんだ。君は人と戦うのが好きみたいだからね。――そうだろう？　『死神』」
……。
「……気づいていたのか」
「動き方の癖や、人を相手にした時生き生きしてたのを見てなんとなくね。でも、確証はなかった。だけど、今の反応で確信を得たよ。やっぱりそうだったんだね」
「……チッ。鎌かけられたか」
「死神だけにね」
「駄洒落のつもりなら、おもしろくないぞ」
まさか、こんな事で正体がバレるとはな。
もう少し用心するべきだったか。

「で、どうする気だ？　言いふらすか？」
「いや、そんな事はしないさ。僕はそこまで陰湿じゃないからね」
まあ、そうだろうな。
敵同士とはいえ、β版の頃からの知り合いだ。
こいつの人柄は、なんとなくわかっている。
そういう事をする奴ではない。
「でも、そうだなぁ……。キョウ。僕らのギルドに入らないか？　今日一日、一緒に冒険してみて思ったんだ。僕らは仲間としてもやっていけるんじゃないかって」
「断る。俺は今のギルドを抜けるつもりはない」
「ハハ。残念。ふられちゃったか」
わかりきった事を聞くな。
冗談にしても笑えないぞ。
「前から聞きたかったんだけど、君はどうしてPKをやっているんだい？」
「そんなもの決まっている。楽しいからだ。好きなプレイスタイルが、たまたまPKだった。それだけの事だ」

「そうか……」
俺の言葉を聞いた剣聖は、少し悲しそうな顔をした。
「……君がPKが好きなように、僕は王道のプレイスタイルが好きなんだ。このゲームでいえば、モンスターを倒し、ダンジョンを制覇し、クエストをクリアする。そういう王道のプレイがね。
そして、そんな僕に賛同してくれた皆で作ったのが『王道騎士団』だ。
君とは、君達PKとは、決して相容れない」
……まあ、そうだろうな。
「だから、次に会う時はまた敵同士だ。――次こそは君を倒すよ。『死神』」
そう言って、剣聖は俺に宣戦布告をしてきた。
……ああ。やはり、こいつとは仲間じゃなくて良かった。
こいつとは敵同士の方が……ライバルでいた方が、ずっと楽しい。
「上等だ。次も俺が勝つぞ。『剣聖』」
俺は小さく笑いながら、そう答えた。
それを聞いて、剣聖もまた不敵な笑みを浮かべた。

次の戦いが楽しみだな。
イベントの時になるのか……いや、フィールドで見かけた時に俺から仕掛けるのも良いかもしれない。
剣聖1人ならまだしも、パーティー全員が揃っていれば勝ち目は薄いだろう。
だが、それもまた良し。
これはゲームだ。
負ければ悔しいが、負けて死ぬ訳ではない。
ゲームは楽しんでこそだ。
負けを恐れて、楽しみから逃げる必要はない。
「お兄ちゃーん！　ユリウスさーん！　何してるの？　置いてくよ！」
「ああ、ごめん！　すぐ行くよ！　さ、行こうか、キョウ」
「ああ」
だが、今日一日はまだ。
この冒険が終わるまでは、俺は剣聖のパーティーの一員だ。
無事に帰るまでが冒険。

あと少しの間だけ、俺達は味方だ。

そうして俺達は歩みを進め、非戦闘エリアである街の中にまで戻って来た。
そこで剣聖達と別れ、ポータルを使って始まりの街へ戻る。
そして、正門を出てスラム街に向かった。
チンピラＮＰＣが絡んで来たのを見て、何故か少し安心した。
やはり、こちら側が、このゲームでの俺の居場所という事なのだろうな。
そして当然、チンピラＮＰＣは斬って捨てた。

そのままギルドに顔を出してみたが、まだ誰もいなかった。
カタストロフもいないところを見ると、あいつもあいつで金策に行ったのだろう。
だが、誰もいなくとも、この寂れた酒場の雰囲気は落ち着く。
立派な中央ギルドよりも、剣聖のパーティーにいた時よりも、余程。
……さて。
今日はなんだかんだでボスモンスターとも戦って、少し疲れた。

ここまでにしておくか。

俺は酒場のカウンターに腰掛け、そこでメニュー画面を開いて操作し、ログアウトのボタンを押した。

こうして、俺と剣聖達の冒険の一日は、終わりを告げたのだった。

25　『サクリファイス』復活

「――で、どうだったの？　リア充パーティーに参加してみた感想は？」
剣聖達との冒険の翌日。
再びギルドに顔を出した俺は、サクラに詰問されていた。
鼻先に刀を突きつけられながら。
「久しぶりにまともな冒険をした気分になった。……まあ、悪くはない体験だったな」
「そう。つまり、リア充ライフを満喫してきたって事ね。死になさい」
「断る」
本気で振るわれた紅桜を、腰に差したグラムを抜いて受け止める。
そのまま、ギルド内の備品を壊しながらの殺し合いに突入した。
戦況は、やや不利。
俺が少し押されている。
やはり、本来の装備もなしに、怨念でパワーアップしたサクラと戦うのはキツい

な。

「フハハハハハ!!　待たせたな！　リアルで少しばかり用事が出来てしま……って、何をしている!?　殺るのならば、表で殺れ!!」

そして、遅れてやって来たカタストロフに仲裁された。

「……まさか、あなたにまともな事を言われる日が来るとは思わなかったわ」

「まったくだな」

「貴様らはいったい、私を何だと思っているのだ？」

変人。

だが、そんな変人カタストロフの珍しい姿に毒気を抜かれたのか、サクラは刀を収めた。

俺もグラムを腰の鞘に戻す。

戦うのは好きだが、こんな勝っても負けても不毛なだけの戦いは、俺の好みではない。

サクラが引き下がってくれて、正直助かった。

「なんだ、やめるのか？　この前のリベンジついでに、俺も交ざりたかったんだ

がな」
「私はもっと見ていたかったですね！　ぶつかり合う『紅桜』と『グラム』はとても綺麗でした！」
「……や、やめておけ。……な、仲間同士で争っても得る物はない。……そ、そういうのは『演習場』を手に入れてからでも遅くはないだろう」
そして、カタストロフに続いて他のメンバーもギルドに入って来た。
今日もまたカタストロフに召集された訳だが、ウチのギルドがこう何度も全員集合するのは、非常に珍しい。
まあ、今回は要件が要件だから、集まるとは思っていたが。
「キョウよ。マインは来ないのか？」
「あいつは王道騎士団の一員だ。今日は来ないだろう」
「そうか。ならば、これで全員集結だな！　早速、始めるとしよう!!」
ギルドマスターのその言葉に従い、全員がメニューを操作する。
それが終わった後、カタストロフはマントを翻して外へと歩いて行った。
俺達はそれぞれの変装スタイルへと装備を変更し、カタストロフの後を追う。

今回の目的はカタストロフの護衛だ。
今回ばかりは、目的を達する前にカタストロフに死なれでもしたらシャレにならないからな。
今日は非戦闘員の武器子ですら完全武装している。

そうして俺達は護衛対象であるカタストロフを中央に配置しながらスラム街の道のりを歩く。
スラム街と一口に言っても、その面積は意外にも広い。
俺達のギルドがある場所は、スラム街の入り口から少し裏道を通って奥に行った場所。
今目指しているのは、スラム街の中心だ。
幸いにして、今回はチンピラＮＰＣ以外に絡まれる事はなく、目的地に到達した。
全体的に雑多で汚いスラム街の中で、唯一の大きくて立派な建物。
ここは、犯罪者プレイヤーにとっての中央ギルドとでも言うべき場所。
――通称『組合』。

犯罪者にアングラなクエストを紹介したり、闇ギルドの設立を斡旋する場所だ。
基本的に、中央ギルドの下位互換のようなものだと思っておけばいい。
そんな組合の扉を開いて中に入る。
そこには、俺達と同じように顔を隠した連中が数人と、人相の悪い受付が数人いた。
中央ギルドとは天と地の差だな。
「おい、あれって……」
「『死神』だよな……」
「しかも、『妖刀』に『剛力』、『深淵』までいるぞ……！　なんだ、あのドリームパーティー……！」
おそらく同業者と思われる連中がざわめき出す。
俺達が同じギルドに所属しているという事を知らないという事は、正規版からの新参か。
まあ、どうでもいい。
組合の中は、ギルドホームを除けば、スラム街の中で唯一の非戦闘エリア。

絡んで来る事はないだろう。
連中を無視して、俺達は人相の悪い受付の所へと進んだ。
「これはこれは『深淵』の旦那。本日はどのようなご用件で？」
人相の悪い受付が、媚びるような声で対応してきた。
……中々に気色悪いな。
だが、カタストロフは慣れているのか、普通に対応した。
「決まっているだろう。ギルド設立の件だ。金が用意できたのでな」
「へい。かしこまりやした。では、設立に必要な金額を頂戴しやす」
「うむ」
そうして、カタストロフはメニューを操作し、ギルド設立に必要な金額を支払う。
さっき、ここに来る前に俺達が渡した分も含めての金だ。
「確かに頂戴いたしやした。では、ギルドホームの立地とオプションを選択してくだせぇ」
受付がそう言うと、カタストロフの前に透明なディスプレイが現れた。
カタストロフはそれを操作し、まずは立地の項目に俺達がいつも集まっているあ

の酒場の場所を。
そして、オプションの項目で『作業場』と『ポータル』を選択した。
これは、事前にメンバー全員で相談して決めていた事だ。
このオプションというのは、いわゆる増築のようなもので、追加料金を払えば、ギルドホームの性能を向上させられる。
今回選んだのは、ギルドの生命線の一つである武器子の専用作業場と、移動に便利なポータル。
武器子は今まで、始まりの街の中にあるレンタルの作業場を使っていた。
そこはあまり設備が整っていない上に、使用時間ごとに料金を取られるシステムだったらしい。
武器子には、マックス以外の全員が世話になっている以上、そこに金をかける事に異論はない。
ポータルは普通に利便性を求めての事だ。
これがあれば、一々始まりの街まで歩かなくとも、ギルドホームから直通で他のポータルがある場所まで移動できる。

ちなみに、ギルドホームに設置できるポータルは、通常のものと違って許可のある者にしか使えない仕様になっている為、他の連中がギルドホームに襲撃してくるという事はない。

そして、設定が終わる。

「では、最後にギルドの名前を入力してくだせぇ」

カタストロフは、透明なディスプレイに『サクリファイス』と入力した。

「ギルド『サクリファイス』の設立を組合の名の元に認可しやした。どうぞ、これからもご贔屓にお願いしますぜ旦那」

「うむ」

そうして、ギルド設立クエストは終了したのだった。

それを確認して、俺達は組合を後にした。

◆◆◆

「さて、諸君!!　こうして正式に『サクリファイス』は再結成された訳だが、まだまだこのギルドには足りないものが多い！　『演習場』に『金庫』！　内装も弄りたいし、バーテンダーも雇いたいな！　金はいくらあっても足りん!!　これからも金策に励んでくれたまえ!!」

そんなカタストロフの演説を聞いている者など誰もいない。

武器子は早速、酒場の地下室に設立された作業場に籠ったし、マックスとハンターとサクラは自分の狩りに行く為にポータルに乗って去って行った。

この纏まりのなさ。

実にウチらしい。

俺は、正式にギルドホームとなり、非戦闘エリアとなった酒場のカウンターに座って、少し余韻に浸っていた。

今回のギルド設立クエストを終えて、ようやくこの酒場は、正式に闇ギルド『サクリファイス』の本拠地となった訳だ。

今までは、β版の頃にギルドホームだっただけの跡地に不法侵入しているような

ものだったからな。
これからは、堂々と居座る事ができる。
この先の事を考えると心が踊る。
剣聖率いる『王道騎士団』との戦い。
新たに台頭してきた闇ギルド『ダークマター』も良いライバルになるかもしれない。
イベントも何度も開催されるだろう。
実に楽しみだ。
このゲームは、【アドベンチャーズ・オンライン】は、これこらもっとおもしろくなる。
さて。
それはそれとして、今日は何をして遊ぼうか？
宣言通り、剣聖を探して勝負を挑んでみるか。
それとも、新しいライバルになりそうな奴でも探しに行くか。
あるいは、組合で適当なクエストに手を出してみるのも良いかもしれない。

そうして俺は余韻に浸るのをやめ、今日の楽しみを探してギルドを後にした。

26　割のいいクエスト

「割りの良いクエスト？」
「そうだ！　前に見つけて来たと言っただろう！　そしてその時、お前はこう言った筈だ！　「また今度にしてくれ」とな！」
ギルド設立から数日後。
俺は、ギルドホームである酒場において、カタストロフに詰め寄られていた。
「……言ったか、そんな事？」
「言った!!　そして、あれから数日が経った!!　今日こそは、このクエストに付き合ってもらうぞキョウ!!」
カタストロフは、思いっきり顔を近づけながら、鼻息荒くそう言ってきた。
近い。うざい。
だが、こいつがこうも強引に迫ってくるのは珍しいな。
大方、この数日で他の連中を誘ってみたが、ことごとく断られたとか、そんなところだろう。

それに業を煮やして、こんな言質と言えるか微妙なものを盾にして、俺を巻き込もうとしていると見た。

「……まあ、今日は予定もないし、別に構わないが」

「よし！　決まりだな！　だが、クエストの参加人数は最低四人からだ!!　あと二人、何としてでも勧誘するぞ!!」

「……それを俺に手伝えと？」

「如何にも!!」

ハァ……。

何故、そんなクエストを取って来たのやら。

ウチのギルドで四人以上の予定が合う事なんて滅多にないとわかっているだろうに。

どうりで、今日までクエストを消化できなかった訳だ。

面倒な事になったと、俺が内心嘆いていた時、ギルドの扉が開かれた。

「邪魔するぞ。む？　どうしたキョウ？　そんな難しい顔をして？　悩みがあるなら筋トレで解消する事をすすめるぞ」

「そ、それでは根本的な解決には繋がらないと思うが」
入って来たのは、筋骨隆々の大男と、灰髪の不健康そうな男。
マックスとハンターの二人だった。
珍しい組み合わせだな。
しかし、これは、またとないチャンスだ。
こいつらも巻き込んでしまおう。
それで、ちょうど四人だ。
「おお！　マックスとハンターではないか！　ちょうど良いところに来た！　貴様らもクエストに付き合うがいい！」
「む？」
「な、何の話だ？」
そう考えたのはカタストロフも同じだったらしく、天啓を得たとばかりに二人に詰め寄って行った。
どうやら、俺の出番はなさそうだな。
交渉はカタストロフに任せればいい。

それが上手くいきそうになければ、こっそりと逃げればいい。
完璧だ。
そして、カタストロフの話を聞いた二人は、
「なるほど、そういう事か。まあ、たまには皆で協力プレイというのもいいだろう。その話、乗った！」
「お、俺も問題ない。そ、そもそも、俺が普段一人なのはタイミングが悪いだけだ。た、頼まれたなら、普通に協力する」
と言って、普通に協力を申し出てくれた。
意外だ。
こんな、すんなりと行くとは。
明日は雨かもしれない。
あるいは、クエスト中に血の雨が降るかもな。
「決まりだな！　では、出発だ！」
そうして、メンバー集めは不気味な程簡単に終わり、俺達はクエストの会場となる場所へと行く為に、ポータルに乗り込んだのだった。

◆◆◆

「ここか？　クエストの会場は？」
「その通りだ！　立派なものであろう！」
カタストロフに連れられて訪れたのは、第二の街にある巨大な屋敷だった。
貴族の屋敷か何かだろう。
だが、俺達のようなプレイヤー(PK)と縁があるような場所だ。
絶対にまともな貴族ではない。
貴族は貴族でも、頭に悪徳とつく類いの奴だろうな。
まあ、悪徳貴族とは言っても、所詮はゲームの設定の話なんだが。
「『サクリファイス』の皆様ですね。お待ちしておりました。どうぞ、こちらへ」
そして、俺達は屋敷の門の前に出てきた執事に連れられ、屋敷の主の部屋に案内

された。

ちなみに、俺達は現在、全員がPKをする時の変装をしている。

闇ギルドとしてクエストを受けるのは、PKをするのと大差ないからな。

どちらも同じ悪役プレイだ。

そんな事を考えている内に、目的の部屋の前に着いた。

「旦那様。サクリファイスの方々がお越しになりました」

「おお！　いらっしゃられたか！　お招きしろ！」

「かしこまりました」

そうして入った部屋の中にいたのは……

「いや～、待ちわびましたぞ～！　さあさあ、お入りください！」

チビでデブでハゲなおっさんだった。

……予想以上に悪徳貴族という言葉がよく似合うな。

ここまでわかりやすいと、逆に、実は良い人パターンを疑ってしまうぞ。

「では、早速依頼の話と参りましょう。

今回の依頼は護衛依頼！　ワシをとある場所まで護衛してほしいのですよ」

「ほうほう」
「そこには『お楽しみ』が待っていましてな～、グフフ。
もちろん、報酬は弾みますぞ～。なにせ、組合が推薦してくださった方々！
頼りにしておりますよ～！」
「お任せください」
カタストロフが矢面に立ち、クエストの進行に必要な会話を進めてくれる。
この時間は暇だから、早く終わってほしい。
「実は待ちきれませんでな～！　仕度は完了しているのですよ！　すぐに出発といきましょう！」
そうして、悪徳貴族は執事を連れて歩いて行き、俺達はそれを追いかける。
そのまま悪徳貴族は馬車に乗り込み、俺達はフォーメーションを決めてから、用意された馬に跨がった。
当然、馬術などやった事はないが、これはゲーム。
馬は普通に動いてくれた。
そして、馬車が出発し、クエストが始まる。

さて、今回のクエスト、何が起こるのか。
現実の護衛なら、トラブルなんて滅多に起こるものではないのだろう。
しかし、これはゲームだ。
トラブル、というかイベントが起こらない筈がない。
俺は少しワクワクしながら、馬の背中の上で、その時を待った。

27　護衛の道中

「死神、どうだ!?」
「そこの茂みに2体、高速で近づいて来るのが3体いる。どっちも小型だ」
「よし、我らに任せろ！　やるぞ、狩人！」
「りょ、了解した」
俺の《気配感知》に引っ掛かったモンスターの情報を教えると、カタストロフとハンターが遠距離攻撃の準備に入った。
馬上から放たれる闇の魔法と矢が、道中のモンスターに突き刺さる。
それだけで、俺が見つけた5体のモンスターは消滅した。
だが、すぐにおかわりが来る。
「今度は後ろからだ。反応は1体。多分、そこそこ強い」
「我が筋肉に任せるがいい！」
今度はマックスが馬から下りて背後から迫ってきたモンスター、大型の狼キラーウルフの相手をした。

キラーウルフの突撃を真っ向から受け止め、そのまま彼方へと投げ飛ばす。
「どっせい！」
そんな掛け声と共にキラーウルフが宙を舞い、どこかへと消えた。
それを見届ける事なく、マックスはダッシュで馬車に追い付き、馬に飛び乗る。
筋肉の塊に勢いよく乗られた馬が、苦しそうな呻き声を上げた気がしたが、おそらく気のせいだろう。
それよりも次だ。
「正面に待ち伏せが1体。デカイな。これは俺がやる」
「うむ！　任せたぞ！」
言うと同時に俺は馬から飛び降り、馬車の数倍の速度で駆けた。
そのまま正面に立ち塞がるモンスター、巨大な二足歩行の豚、オークに対して攻撃を仕掛ける。
オークの股下を潜るようにスライディングし、そのまま大鎌の刃で股間を斬り裂く。
そして背後に回り、男の象徴を潰されたオークの首筋目掛けて、容赦なくトドメ

の一撃を放った。
「《斬首》」
アーツによって強化された斬撃がオークの首を飛ばし、HPを削りきられたオークが光の粒子となって消滅する。
そのタイミングでちょうど追い付いてきた馬車に合流し、馬の上へ。
次の襲撃はない。
どうやら小休憩の時間のようだ。
俺は軽く息を吐いた。
「ふぅ」
「ほう。さすがの死神もお疲れのようだな」
「……当たり前だろう。これだけ連続で戦い続ければ、誰だって疲労する」
悪徳貴族護衛クエストを受けた俺達は今、ひっきりなしに襲来して来るモンスターの対処に追われていた。
一度モンスターが現れると、十分はモンスターハウス状態が続き、小休憩を挟んでは、またモンスターが大量に現れる。

それが、このクエストの仕様なのだろうが、もう少しマシな道を選べと言いたくなる。

俺のような、事故れば終わりの極振り型にとって、この状況はなかなかにキツイ。

正直、苦手なパターンの一つだ。

極振りは、ハマれば強い代わりに苦手な事が多い。

「ん？」

と、その時、《気配感知》に新たな反応があった。

「どうした、死神？　次のモンスターか？」

「……いや、違う。だが、敵には違いないかもな」

「た、たしかに」

俺の言葉にハンターが同意を示した。

ハンターは、遠くの景色を見る《千里眼》というスキルを持っている。

おそらく、それで俺が感知したものと同じ光景を見たのだろう。

そして、馬車は進み、俺とハンターが感知した通りの者が俺達の前に立ち塞がった。

「止まれ！」
そんな声を上げたのは、馬車の進行方向に仁王立ちする、鎧を着こんだ中年の男。
その後ろには、同じ鎧姿をした男が十人程整列している。
格好からして騎士だろう。
王道騎士団ではなく、おそらく、このクエストに関係するＮＰＣと見た。
俺達は、全員馬から降りて戦いに備える。
「その馬車！　悪名高いアクロイド家の者だな！　貴様らの行ってきた所業は許しがたし！
貴様らが今日この道を通り、次なる悪事の場へと赴こうとしている事はわかっている！」
先頭の中年騎士が声を張り上げ、後ろの騎士達もそれに同調した。
さしずめ、悪徳貴族を成敗しに来た正義の騎士団と言ったところか？
ならば、俺達にとっては敵だな。
「か、カタストロフ殿！　奴らはワシの命を狙っておる！　助けてくだされ！」
馬車の中から、悪徳貴族の悲鳴に似た懇願の声が聞こえてきた。

敵確定だな。
俺達は、まさに悪の役回り。
実に闇ギルドらしい。
「今ここに天誅を下さん！　かかれぇ！」
『おおおお！』
騎士達が剣を抜いて襲いかかってきた。
ＮＰＣ特有の、どこか人間になりきれていない、機械的な動きだ。
俺は背中の大鎌を抜いて飛び出し、カタストロフは杖を掲げ、マックスはマッスルポーズをとって馬車の前に立ち、ハンターは茂みの中に消える。
俺達は、それぞれの戦い方で、騎士達を迎え撃った。
「今までとは毛色の違う敵！　おそらく最終関門か、その一歩手前であろう！　もう一息だ！　気張れよ貴様ら！」
カタストロフの言葉を無視して、騎士達に襲いかかる。
まずは一番先頭にいた騎士に向かってデスサイズを一閃。
騎士は咄嗟に剣でガードしようとしたが、攻撃力に差がありすぎたのか、まるで

受け止めきれずに剣ごと真っ二つになった。
今、俺が身に付けている装備は、例の公式イベントの上位入賞特典。
その性能の凄まじさたるや、チートの領域だ。
加えて、武器子による改良によって、デスサイズの性能も向上している。
もはや、この程度の相手は敵ではない。
「《エンチャント・アタック》！」
俺に任せた方が早いと判断したのか、カタストロフが得意の闇魔法ではなく、支援魔法を俺にかける。
これで、更に戦力差は広がった。
ここから先は、蹂躙だ。
装備によって上昇した速度と、装備と魔法によって上昇した攻撃力を使い、超高速で駆け回りながらのヒットアンドアウェイ。
近づき、一人殺しては距離を取る。
その繰り返しによって、一人ずつ確実に始末していった。
俺を無視して直接馬車を狙う騎士もいたが、それはマックスによって阻まれる。

まさに肉壁。
筋肉の壁にぶん殴られ、騎士は消滅した。
更に、絶妙なタイミングで、茂みに隠れたハンターの矢が飛来する。
アーツによって放たれた矢は、魔法よりも速く飛翔し、騎士達を屠る。
だが、動き回る俺には決して当たらない。
あいつの弓の腕はゲーム内屈指だ。
本人のプレイヤースキルに加え、そうなるようにステータスもスキルも弓術に特化している。
味方に当てるようなヘマはしない。
ハンターを信頼し、俺は自分の仕事に専念した。
そうして、一分もしない内に騎士はほぼ全滅した。
弱い。
だが、それも当然。
こういう敵対ＮＰＣは、基本的に強いプレイヤーの下位互換だと思っていい。
なにせ、AIの動きは単調だからな。

たまに高性能なのがいるが、こいつらは違った。
俺の慣れ親しんだ人間（プレイヤー）の動きを単調にした感じの動き。
対人戦特化の俺からすれば、良い鴨だ。
そして、残った騎士はリーダーっぽいあの中年騎士だけ。
「お、おのれ！　覚えていろ！」
そんな、三下の悪役のような捨て台詞を残し、中年騎士は俺達に背を向けて撤退した。
まあ、逃がさんが。
簡単に狩れる経験値を逃すプレイヤーはいない。
俺は中年騎士の背中を追いかけようとして、――やめた。
何故なら、《気配感知》に新たな反応があったのだから。
高速でこちらに接近してくる反応が1体。
それに追従するような反応が多数。
「どうした、死神？」
「敵だ」

戦闘態勢を取り続ける俺を見たカタストロフの疑問に、簡潔に答える。
そして、新たな敵が俺達の前に現れた。
逃げて行った中年騎士の身体が、現れた一人の男の振るった大剣によって、頭から真っ二つに斬り裂かれ、消滅した。
「よお。お前が『死神』か。会いたかったぜぇ」
男が、大剣を肩に担ぎながら、好戦的に笑った。
どことなく人間臭い仕草。
新しいイベント用ＮＰＣかと思ったが、多分違うな。
こいつは、プレイヤーだ。
そして、こいつは、モンスターではなくＮＰＣを躊躇なく攻撃した。
間違いなく、俺達と同じこっち側の人間。
同業者だろう。
「レオンさん、あまり一人で先行しないでほしいですね。あなたはギルドマスターなんですから」
「チッ。小うるせぇなぁ」

続いて、レオンと呼ばれた男に追従して現れた集団。
人数は、騎士達と同じく十人程。
だが、纏う雰囲気が違う。
彼らの雰囲気は、まるで山賊。
その目ほ、殺戮と略奪の意思に燃えている。
なにより、俺は今レオンに話しかけた男を知っている。
以前、剣聖とパーティーを組んだ時に遭遇したPK。
軍服のような装備を纏った、糸目の男。
「貴様ら！　何者だ!?」
カタストロフが吠える。
だが、その声は少し嬉しそうだ。
どうやら、このシチュエーションを楽しんでいるらしい。
余裕あるな。
「俺達は闇ギルド『ダークマター』。そして、俺がダークマターのギルドマスター、『破壊王』レオンだ。

覚えとけよ？　お前らを潰す男の名だ」

ダークマター。

以前出会った同業者が、より強い奴を引き連れて再び現れた。

「おもしろくなってきたな」

俺は仮面の下で小さく笑い、デスサイズを構えたのだった。

28　ダークマター襲来

「破壊王！　前回のイベント4位のプレイヤーか！　相手に取って不足なし！」
カタストロフが嬉しそうに叫んだ。
強敵との対決。
いかにもこいつが好きそうなシチュエーションだからな。
わからなくもない。
かく言う俺も燃えている。
前回のイベント4位。
予想外の大物が出てきた。
カタストロフの言う通り、相手に取って不足はない。
俺は大鎌を握り締め、誰よりも早く飛び出した。
狙うは当然、大将の首。
「おっと、いきなりですね」
そんな俺の前に糸目の男、サーベルが立ち塞がった。

お供に大盾使いを一人連れている。
邪魔だ。
「ガードンさん。よろしくお願いします」
「任された。《フルガード》！」
サーベルの斜め前に立った大盾使いが、アーツを使って守りを固めた。
俺は、あえてガードの上から大鎌を叩きつけた。
「ぬぅ!?」
それを防ぎきれず、大盾使いはたたらを踏んで数歩後退した。
だが、目立ったダメージはない。
やはり、こんな力任せでは駄目か。
いかに入賞特典とは言え、さすがに、ゴリ押しだけで勝てる程の性能は有していないようだ。
まあ、当たり前だが。
「《スティンガー》！」
俺が大盾使いを攻撃した瞬間を狙い、サーベルが突き技のアーツを使ってきた。

首筋を狙った一撃を、首を傾げる事で避け、そのままバックステップで距離を取る。
そして、牽制代わりにナイフを投擲。
サーベルを狙ったそれは避けられるも、投擲されたナイフに意識が向いた一瞬を狙って再接近。
だが、あえてサーベルは狙わない。
破壊王も狙わない。
サーベルと逆方向にいた魔法使い。
完全に傍観者となっていたプレイヤーを狙い、意識を隙を突いて一瞬で首をはねた。
「へ？」
首を飛ばされた魔法使いが呆然と呟き、光の粒子となって消える。
そして、脱落者が出た事で、戦況は一気に動き出した。
「恐れるなぁ！　突撃！」
「迎え撃て！」

破壊王とカタストロフ。
両陣営のギルドマスターが号令を発し、メンバー達がそれに応える。
破壊王が先陣を切り、ダークマターの連中がカタストロフ達へと突撃していく。
マックスが壁としてそれを防ぐが、さすがに人数が違う。
長くは持たないだろう。
カタストロフと、隠れたハンターが援護射撃をしても、結果は同じだ。
ここは、機動力と攻撃力のある俺が、敵の戦線をかき乱すのが最善なんだが……
「なるほど。お前らが俺を足止めする訳か」
「そういう事です」
サーベルとさっきの大盾使いが俺の進路を塞ぎ、カタストロフ達と分断する。
無視して違う方向から突破しようとしたが、二人ともそれなりに速度が速い。
俺程ではないが、無視して強行突破すれば、追い付かれて背中から斬られるだろう。
ならば、さっさと殺すしかないな。
俺は再度二人目掛けて突撃した。

「来ますよ」
「何度来ても止める。《フルガード》！」
構える大盾使いの前で、俺はサイドにステップを踏んだ。
正確には、サイドではなく斜め前。
そして、姿勢を低く、一瞬で大盾の影に入り、敵の視界から外れた。
「消えっ……!?」
「《デスワルツ》」
「ぐぉっ!?」
アーツによって大鎌を回転させ、高威力の一撃を相手の死角から振り抜いた。
構えた盾をすり抜けるように、横方向から伸びた曲刃が、大盾使いを真っ二つに斬り裂く。
やはり、こういう時に大鎌は便利だ。
「《ソニックブレイド》！」
だが、大盾使いが光の粒子となって消えた頃、そこには剣を振りかぶり、アーツの発射準備を完了させたサーベルの姿が。

あのアーツは、飛ぶ斬撃。
回避できるタイミングではない。
ならば、防ぐ。
デスサイズの束で飛ぶ斬撃を受け、その威力に逆らわずに、両脚の力を抜いて衝撃を受け流した。
後方へと吹き飛び、地面に叩きつけられるが、すぐに一回転して起き上がる。
ダメージはあるが、30秒もあれば《HP自動回復》で治りきるだろう。
だが、直撃すれば死んでいた。
「今のは決まったと思ったんですがね……さすが死神。パワー、スピード、反射神経、判断力、どれを取っても凄まじい」
「……お前も悪くはない策だった。まさか味方が殺られる事前提の攻撃とはな」
「おっと、皮肉ですか？」
「いや、純粋に褒めている」
今の攻撃、大盾使いが殺られて消滅しなければ、サーベルの攻撃は大盾使いに命中していた。

フレンドリーファイアはないだろうが、攻撃は不発に終わっていただろう。
……いや、あるいは大盾使いごと斬るつもりだったのか？
パーティーの上限人数は６人。
襲撃者の数は約10人。
大盾使いとあえてパーティーを組まず、俺の攻撃でHPが減ったところをもろとも斬るというのは、考えられなくもない。
だとすれば、ますます感心する。
剣聖あたりなら憤慨するやり方だろうがな。
まあ、感心したからといって、殺す事に変わりはない。
いや、むしろ、より警戒し、より確実に殺らせてもらう。
俺はナイフをサーベルに向けて投擲し、それを避けて少しでも体勢を崩してから斬りかかった。
縦横無尽に振るわれる死の刃が、サーベルを襲う。
「ッ……！　大鎌というのは初めて相手にしましたが、なるほど。独特の形状でやりづらいですね。あなたが愛用するのもわかります」

余裕そうな口振りだが、サーベルの全身は一秒ごとに削られている。
デスサイズの刃を防ぎきれず、避けきれず、身体にダメージが刻まれていく。
自慢になるが、俺と一対一で戦って勝てるプレイヤーは、ほぼいない。
だからこそ、『死神』は対人戦最強と呼ばれるんだ。
デスサイズの刃が、サーベルの片腕を斬り落とした。
「ああ、これは駄目ですね。もう少し粘れるかと思いましたが、それはあなたを舐めすぎていたようです。反省しましょう。
――レオンさん！　作戦変更です！」
「ああ!?　もうかよ！　情けねぇな！」
サーベルの言葉に、マックスと互角以上の戦いを繰り広げていた破壊王が反応する。
そして、片腕を失ったサーベルは、仲間の元へと下がった。
追撃しようとしたが、一斉に放たれた魔法が、俺の足を止める。
「野郎ども！　お綺麗な決闘は終わりだ！　本気で殺るぞ！」
『了解！』

破壊王がダークマターの連中に号令を下す。
そして、奴らの動きが変わった。
俺達にとって、致命的にマズイ方向へと。

29　敗北

「む!?　こやつら!?」

ダークマターの連中は、カタストロフ達を無視して護衛対象である馬車を狙い始めた。

魔法が、矢が、飛翔するアーツが、馬車目掛けて放たれる。

あの馬車はイベントオブジェクトだが、決して破壊されない訳ではない。

モンスターの襲撃から必死で守っていた事からもわかる通り、攻撃を受ければ普通に破壊され、中にいる悪徳貴族は死ぬだろう。

そうなれば、クエスト失敗。

俺達は、何がなんでも馬車を守り切らねばならない訳だ。

「剛力！」

「ぬぉおおおお！」

カタストロフの指示により、マックスが身を呈して馬車を守る。

その圧倒的な防御力と回復力に任せて耐えるが、どう考えても長くは持たない。

このゲームは、一人のプレイヤーかそこまでの突出した耐久力を得られるようにはなっていない。
援護がいる。
「《ダークボール》！　《ダークボール》！　《ダークボール》！」
カタストロフが連射性重視で闇魔法を放つが、正面の壁役に全て阻まれる。
隠れたハンターも矢を放って援護するが、それも焼け石に水。
ならば、俺が突撃し、奴らの隊列を乱すのみ。
結局、やるべき事は変わらない。
敵が手段を選ばず勝ちにきたというだけの話だ。
不利になったのではなく、本来あるべき形になっただけ。
そう思えば、何も不思議な事ではない。
俺は奴らの後ろから強襲した。
「死神ぃ！　今度は俺が相手をしてやろう！」
だが、そんな俺の前に破壊王が立ち塞がる。
ギルドマスター直々に来るか。

……いや、最も強い個人が俺を止め、お荷物を抱えたカタストロフ達は数で袋叩きにする。
なるほど、合理的だ。
考えている。
「死ねぇえええ！」
こんな脳筋全開のくせに。
破壊王が大剣を振るう。
唐竹割りだ。
俺は体を回転させながらそれを避け、そのままカウンター気味に大鎌を振り抜いた。
「ふん！」
「……ほう」
しかし、その一撃は即座に引き戻された大剣によって防がれる。
そのまま、力任せに大剣が振り抜かれる。
その一撃は大鎌を押しきり、俺の体を後方へと吹き飛ばした。

凄まじいパワー。
こいつも、俺と同じで攻撃力に極振りしているのかもしれない。
下手したら、俺以上に。
「そら、次行くぜ！　《大破断》！」
破壊王が大剣を振り上げ、振り下ろしながら飛ぶ斬撃を放つ。
その威力は、サーベルが使った《ソニックブレイド》よりも遥かに強い。
俺の《鎌鼬》に匹敵するが、凌駕しているだろう。
さすがは、大鎌と同じ重量武器。
その破壊力は折り紙付きだ。
「はっ！」
俺はそれを大きく横に避け、流れるように腰から抜いたナイフを放った。
さっきまでの、ただのナイフではない。
「小賢し……ぬぉっ!?」
武器子謹製の特注品。
標的に当たった瞬間に大爆発を起こす、爆裂投げナイフだ。

武器子がやたらと品質に拘ったが故に数が少なく、値段も高く、しかも危なくて近接戦闘では使えない。
だが、それだけのデメリットを許容できるだけの爆発力、攻撃力を持っている。
普通のナイフと思って迎撃を選んでしまえば、初見での対処はまず不可能。
破壊王の姿が爆煙に飲み込まれた。
「終わりだ」
その爆心地に向けて、俺は駆ける。
破壊王の姿は目視できないが、俺には《気配感知》がある。
大体の位置さえ捕捉できれば十分だ。
「ッ!?　なめんなぁあああ！　《大破断》！」
「!?」
しかし、破壊王は視界が塞がった中で、的確に最善手を打ってきた。
放たれたのは、さっきと同じ飛ぶ斬撃。
だが、俺の《危険感知》が反応している。
当てずっぽうに放ったにも関わらず、俺に当たる攻撃。

すなわち、横薙ぎに撃った広範囲攻撃。
致命の破壊力を持った斬撃が俺に迫る。
だが、
「甘い」
「ぐあっ!?」
俺は八艘飛びで斬撃をかわし、上空から破壊王を斬りつけた。
手に持った大鎌から、標的をかなり深く斬り裂いたという手応えが伝わってくる。
しかし、急所は外したようだ。
殺した時特有の光の粒子が出ない。
「なら、もう一発……」
「いえ、そこまでですよ」
その声が聞こえると同時に《危険感知》が反応。
すぐに、その場を飛び退く。
直後、そこに大量の魔法と矢が飛んできた。
直線上にいた破壊王を巻き込みながら。

「うぉい!?　当たってんぞ！」
「ご安心を。レオンさんとパーティーを組んでいるメンバーによる攻撃です。ダメージはありませんよ」
「チッ！　なら、まあ、いいだろう。気に入らねぇがな」
爆煙の中から破壊王が現れる。
肩口に大きなダメージエフェクトが付いているが、まだまだ健在そうだ。
そして、破壊王と呑気に喋っているのはサーベル。
こいつは、破壊王と入れ替わるようにカタストロフ達の相手をしていた筈だ。
つまり、こいつがこっちの戦いに手を出してくるという事は……
「ええ、お察しの通りですよ。こちらは今終わったところです」
「ギャー！」
見れば、ダークマターの連中によって馬車は破壊され、中から悪徳貴族が引き摺り出されて、剣や槍でグサグサと殺られているところだった。
そして、すぐに悪徳貴族も光の粒子となって消滅する。
近くにマックスとカタストロフの姿はない。

殺られたか。
「チッ」
俺は小さく舌打ちをした。
これでクエストは失敗。
こっちのメンバーも倒され、相手はまだ結構な人数が残っている。
加えて、ダメージを受けているとはいえ、健在の破壊王とサーベル。
正面からでは勝ち目がないな。
全くないとも言わないが、護衛対象を失った今、正面から相手をしてやる義理はない。
「退却だな」
「！　待ちやがれ！」
俺は近くの茂みに飛び込み、ハンターと同じように姿を眩ました。
それを追って破壊王が駆ける。
追って来るようならゲリラ戦だ。
俺の得意な戦場へと引き摺り込む。

……というか、足遅いな破壊王。
攻撃力の代わりに速度を犠牲にしたのか。
「待つのはレオンさんの方ですよ」
「ぶげっ!?」
あ、サーベルが破壊王の足引っ掻けて転ばせた。
チャンスだ。
俺は爆裂ナイフを投擲する。
しかし、それは残っていた大盾使いに防がれた。
俺が倒したのとは別の奴だ。
「何しやがる、サーベル!?」
「あなたが無策で追いかけようとするからですよ。こういうのは森の中などでのゲリラ戦は死神の土俵です。
追いかけても殺されるだけですよ」
「じゃあ、どうすんだ!?」
「どうもしません。彼らの護衛対象を殺し、『深淵』と『剛力』をも打倒した私達

の勝利です。

死神の首は欲しいですが、まあ、無理してまで狙うものでもないでしょう」

どうやら、サーベルはここで退散するつもりらしい。

尚も納得できずに吠える破壊王を、他のメンバーが必死に宥めていた。

あいつがギルドマスターじゃなかったのか？

それでも、最終的には多数決の意見が通り、破壊王は丸め込まれて、しぶしぶ撤退して行った。

だが、最後に、

「おい、死神！　聞こえてんだろ!?

今回は俺達の勝ちだ！　だが、俺の勝ちじゃねえ！　俺はお前を倒せなかったからなぁ！

次に会う時は、必ず俺の手でお前を殺す！　覚悟しとけ！」

大声でそう告げて、破壊王は去って行った。

追撃はキツイと判断し、俺は残っていたハンターと合流してギルドへと戻った。

こうして、闇ギルド『サクリファイス』は、闇ギルド『ダークマター』に敗北し

たのだった。

30　急転

「ええ!?　お兄ちゃん負けちゃったの!?」
「違う。負けたのはサクリファイスであって、俺ではない」
あの後、普通にログアウトし、その日の夕飯の時間。
俺は舞に今日の事を聞かれて、襲撃の事を話し、驚愕された。
舞は驚愕のあまり、口からご飯粒を飛ばして、母さんに怒られていた。
「それにしても『ダークマター』かー。
それってあれだよね？　前にお兄ちゃんが私のパーティーに参加した時に襲って来た人達」
「ああ」
「へぇ、あの人達、本気になればそんなに強かったんだ。
まさか、お兄ちゃんが負け惜しみを言うなんて」
「負け惜しみではない」
むしろ、負け惜しみの言葉を言いまくったのはカタストロフだ。

あの後ギルドに戻ったら、死に戻りしたカタストロフが半狂乱で暴れていたからな。

口から出るのは言い訳の言葉ばかり。

あまりにウザくて、一緒に死に戻ったマックスと、偶然居合わせたサクラの二人と力を合わせ、殴っておとなしくさせた。

ハンター？

あいつは、いつの間にか消えていたよ。

「それで、それで？　お兄ちゃんはリベンジしたいとか考えてるの？」

「まあな」

舞の言葉に軽く答える。

だが、その軽い言葉とは裏腹に、俺は内心でかなりの闘争心を燃やしていた。

当然だろう？

いくら俺自身は負けていないとはいえ、チームとしては負けたんだ。

お荷物を抱えていたとかは言い訳にならない。

負けは負けだ。

悔しくない訳がない。
リベンジはする。
必ずだ。
「わー、お兄ちゃんが静かに燃えてるー。ダークマターの人達に合掌しておこう。ごちそうさまでした」
「ごちそうさまでしたと混ぜるな。夕飯に合掌するか、ダークマターに合掌するか、どっちかにしろ」
もしかして、ボケたつもりか？
大しておもしろくないぞ。
そんな会話をしつつ、俺と舞は食べ終わった食器を台所へと持っていって洗った。
これで、食事も洗い物も終了だ。
「さて！　じゃあ、ゲームの続きといきますか！」
「宿題」
「チッチッチ、甘いよ、お兄ちゃん！　私は同じ失敗を繰り返さない女！　宿題なんて、既に片付けてあるのだ！」

「なら、いい。夜更かしはするなよ」
「はーい！」
そうして、舞はドタドタと二階の自分の部屋に駆け込んで行った。
俺は、この時の事を、後に後悔する事となる。
そう。
宿題を終わらせたという舞の言葉。
その証拠を確認せず、舞の証言を鵜呑みにしまった事を。
それによって、後に悲劇が起こったのは言うまでもない。
しかし、この時の俺は、その絶望の未来を知るよしもなかった。

◆◆◆

明けて翌日。

自分の分の勉強を済ませ、午後からゲームにログインした俺は、ログイン地点であるギルドホームの中が騒がしい事に気づいた。
いや、カタストロフが一人で七転八倒しているだけなのだが。
「＊@¥＃％◆・§＃@！」
と、このように意味不明の叫びを垂れ流している。
ついに壊れたか。
昨日、殴って止めた時に、打ち所が悪かったのかもしれん。
いや、ゲーム内でいくら殴られようと、現実の体に影響は出ない筈だが。
それでも、今のカタストロフは脳に異常をきたしているとしか思えなかった。
あるいは、システムの故障かもしれない。
俺は壊れたカタストロフの成れの果てから目を背け、我関せずでカウンターに座っていたサクラに近づいた。
「おはよう」
「ええ、おはよう」
「早速だが本題に入ろう。何があった？」

単刀直入にサクラに事情を問い正す。
いくらカタストロフが変人とはいえ、さすがに何もなしに、ああなるとは思っていない。
おそらく、何か事情がある筈だ。
サクラは憂鬱そうにため息を吐いた後、手の中でグラスを弄びながら、説明してくれた。
「昨日、あなた達がダークマターとかいう連中に負けたでしょう。それが原因よ」
「いや、さすがにそれは……」
ないだろう。
昨日の事が原因だと言うのであれば、昨日の時点で壊れていなければおかしい。
何か、他にも理由がある筈だ。
「まあ、お察しの通り、それだけが理由じゃないわね。でも、昨日の事が原因なのも本当よ。
……少し前に、ある掲示板にこんな事が書き込まれてね」
サクラはメニュー画面を操作すると、それを俺にも見えるように表示してくれた。

その掲示板に書かれたタイトルは、『犯行声明』。
投稿者のハンドルネームは、『ダークマター』だ。
この時点で、もう嫌な予感しかしない。
そして、俺は掲示板の内容に目を通す。
そこには……
『我らは闇ギルド『ダークマター』。
『死神』率いる元最強の闇ギルド『サクリファイス』を倒し、最強の称号を奪ったギルドである。
そして、我らは現在、新たに発見された第三の街への街道を封鎖している。
我らの目的は強者との戦い。
正規のプレイヤー達よ、第三の街を解放したくば、全力を持って我らを倒してみせるがいい。
諸君らの挑戦を楽しみに待っているぞ』
……なるほど。
これを見て、カタストロフはぶっ壊れたと。

「見てわかると思うけど、私達を倒したって堂々と宣言している事と言い、死神率いるとか書いてる事と言い、

これの内容は、思いっきりカタストロフの神経を逆撫でしちゃったのよ。

それで、ご覧の有り様って訳」

「よくわかった」

たしかに、カタストロフにクリティカルヒットしそうな内容だ。

ウチのギルドマスターはカタストロフであり、そして、こいつは自分のギルドに誇りを持っている。

自分一人への罵倒ならばともかく、サクリファイス自体を貶めるような事には我慢できない奴なのだ。

まあ、つまり良いリーダーなのだ。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！」

まあ、今は咆哮を上げながら、ブレイクダンスじみた奇っ怪な踊りを披露する謎の生物に成り下がっているが、良いリーダーなのだ。

それに、ここは変人奇人の巣窟ギルド。

ちょっとくらい気が狂ったとしも、誰も気にしない。
大丈夫だ。
問題ない。
「……ふぅ」
だが、カタストロフは踊り疲れたのか、ふとした拍子に冷静になった。
そのまま幽鬼のように立ち上がる。
賢者タイムというやつだろうか？
「キョウ、サクラ。メンバーを集めるぞ。リベンジマッチを開始する」
そうして、カタストロフは静かにそう告げた。
さっきまでの狂いっぷりが嘘のような変わりようだ。
そこに、いつものふざけた雰囲気はなく、ただ雪辱に燃える男の姿だけがあった。
だが、一つだけ言わせてほしい。
「キャラ、変わり過ぎだろう」
「誰よ、あなた？」
俺とサクラのツッコミが、虚しくギルドホームに響いた。

それを無視して、カタストロフは動き出したのだった。

31　対策会議

「諸君、よく集まってくれた」

ギルドホームに集結したメンバー達を見据えながら、カタストロフが静かに告げた。

そう。

静かにだ。

未だに賢者モードが続いているのか、その雰囲気にいつもの騒がしさや、やかましさはない。

ただ、用意したテーブルに実に偉そうなポーズ（司令官ポーズというらしい）で座っている様子を見れば、あ、こいつカタストロフだな、とわかるんだが。

そして、その用意されたテーブルに着席しているのは６人。

つまり、サクリファイスのメンバー全員だ。

しかし、残念ながらカタストロフの召集（という名のメール）で集まった訳ではない。

カタストロフ本人はそう思い込んでいるかもしれないが、おそらく、全員が集まったのは、召集メールの後にサクラが気を利かせて打ったメールのおかげだ。

『今回は本気でカタストロフの精神がヤバイわ。もし彼に少しでも友情を感じているのなら、助けると思ってギルドに集合してちょうだい』

という内容のメールが、カタストロフ以外のメンバー全員に送られた。

一斉送信のリストから取り除くのが面倒だったのか、一緒にいた俺にまで送信されていたがな。

だが、それでもサクラの優しさが垣間見える。

サクラは、リア充死すべしという危険思想こそ持っているが、それを除けばメンバー内で最もまともで仲間意識の高い奴だからな。

つまり、良い奴なのだ。

危険思想さえなければ、リアルでも友達になりたいと思える程度には。

「さて、まずは情報の共有といこうか。

非常に不本意だが、我らが昨日ダークマターの連中に負けたというのは事実だ。

ハンデを背負っていたとはいえ、負けは負け。

素直に認めねばなるまい」

素直に認められずに半狂乱で暴れた奴の言葉とは思えないが……まあ、この短時間で成長したのだと、好意的に捉えておこう。

「そして、奴らは我らを倒した事で調子に乗っている。

街道封鎖という大掛かりな事を仕出かす程にな。

しかも、情報によると街道を封鎖しているダークマターのメンバーは、１００人に届く程の大人数だそうだ」

１００人。

尋常な数ではないな。

ちなみに、情報源は掲示板だ。

ゲームというのは、こういう時の情報収集が楽で助かる。

「おそらく、我らを倒したという情報に食いついた野良のPKの多くがダークマターに流れたのだろう。

時間的な問題を考えれば、それ以前からメンバーを集めていたのだとは思うがな」

前にサーベルが言っていたが、PKというのは、普通一人でできる事ではない。

ステータスやレベルといった能力値が明確に定められているゲームにおいて、単独で自身と同等以上の力を持ったプレイヤーを狩るのは至難。

それができるのは、一部の高いプレイヤースキルを持ったトッププレイヤーだけ。

だが、悪役プレイに憧れる奴は意外に多く、弱くてもPKがやりたいという輩はそれなりにいるらしい。

今回の件は、そういう弱くて燻ってる大量の野良PKをダークマターが吸収したんじゃないか、というのがカタストロフの見解だ。

俺も、その見解は、当たらずとも遠からずだと思っている。

まあ、ダークマターには、明らかに徒党を組む必要がないような強者も交ざっているが、それはそれだろう。

そいつらは、大規模な悪の組織プレイがしたかったとか、そんな下らない理由でやっていたとても、なんらおかしくない。

これはゲーム。

楽しければ良いのだから。

「さすがに、それだけの人数を相手に我ら6人だけで挑むのは無謀だ。

よって、有効な作戦を立てる必要がある。
意見があったら、挙手して発言してくれ」
その言葉を聞いて、ハンターがおずおずと手を上げた。
意外だ。
あいつは、あまり自己主張しないタイプだというのに。
「そ、そもそも戦う必要がない。か、街道封鎖なんて真似、絶対に途中で飽きてやめるだろう。
た、単純にそれまで待てば……」
「却下だ！」
喝！　とばかりの大声で、カタストロフはハンターの至極もっともな作戦を却下した。
ハンターは意気消沈した。
哀れな。
だが、いくら有効な作戦であろうとも、カタストロフの目的が雪辱を果たす事である以上、最初から通る筈のない作戦だったな。

「他にはないか？」

カタストロフが他の意見を求める。

それに対して、今度は俺が手を上げた。

正直、ハンターが撃沈した今、真面目に作戦を考えているのは俺くらいだろうからな。

武器子は上の空だし、マックスは脳筋。

サクラは、フォローはしても作戦まで考えてはくれないと思う。

何故なら、あいつには今回の戦いにおけるモチベーションがないから。

カタストロフを助けると思って参加はしてくれているが、それ以上の事をしてくれるかは怪しい。

つまり、俺がなんとかしなければ、この会議はいつまで経っても進まない訳だ。

そういう訳で、俺は意見を出す事にした。

「どこぞのギルドと一時的に同盟を結ぶのはどうだ？　それで数の差を埋める事はできると思うが」

「む」

俺の作戦を聞いて、カタストロフが思案するように沈黙した。
どうやら、一考の余地ありと判断したらしい。
「……リベンジを他の奴らと一緒にやるのは嫌だが、背に腹は変えられないか。よかろう。
他に意見がなければ、その作戦案を受理する。
反対意見はあるか？」
カタストロフがそう問いかけるも、反対意見は上がらなかった。
まあ、作戦なんてどうでもいいと思ってる奴が過半数だろうからな。
これは予想できた。
「では、作戦の詳細を詰める。まず、どこのギルドに声をかけるかだが……」
「王道騎士団でいいだろう。『剣聖』の性格を考えれば、ダークマター討伐という点では利害が一致する筈だ」
「待ちなさい」
我ながらナイスなアイディアだと思ったが、思わぬところから苦情がきた。
サクラだ。

「あのリア充どもと手を組めと？　私はごめんだわ」
「手を組むのではなく、利用するとでも考えておけばいい。実際、その通りになるだろうしな」
「それでも、嫌なものは嫌。リア充と一緒にいると、拒絶反応が出るのよ」
「……はぁ」
俺は思わずため息を吐いた。
本当に、サクラはこれさえなければな……。
仕方なく、俺は立ち上がってサクラの側まで歩き、サクラの耳元に手を当てて、小声で囁いた。
「今回だけだ。カタストロフを助けると思って呑み込んでくれ」
「……それは、ズルいわ」
サクラが今回メンバーを集める為に使った言葉。
この言葉を使えば、断れないと思ったのだ。
サクラは、基本善良だからな。
たしかに、ズルい。

だが、許せよ。
「はぁ。本当に今回だけだからね。それと、これは貸しにしておくわ」
「それはカタストロフにつけといてくれ」
「……それもそうね」
こうして、サクラの説得には成功した。
これで、作戦を阻むものは何もないだろう。
「む、終わったのか？」
「ああ。サクラも一応は納得してくれた」
「どんな魔法を使ったのか知らんが、よくやった」
その魔法の代価は、いつかカタストロフが支払う事になるのだろうが、今は黙っておこう。
「では、我らは王道騎士団に共闘を持ちかける事としよう。異論はあるか？」
サクラが落ちた今、異論を出すメンバーはいなかった。
そうして、俺達は王道騎士団に話を持ちかける事が決定したのだった。

32　同盟を組む

会議が終わった後、俺は早速メールを送った。
送り先は剣聖だ。
前にパーティーを組んだ時、剣聖の方からしれっとフレンド登録されたのだが、それが役に立った。
『ダークマター討伐に対して同盟を結びたい』という感じのメールを送ったら、『とりあえず話し合いたいから、王道騎士団のギルドホームに来てくれ』という感じの返信がきた。
聞く耳は持ってくれたようだ。
まあ、あいつの性格を考えれば、いきなり断られる可能性は低いとは思っていたが。
という訳で、俺達は王道騎士団のギルドホームへと出向く事となった。
メンバーは、俺とカタストロフの二人だ。
サクラはリア充アレルギーが出るから無理だし、ハンターは口下手、武器子は話

し合ってる暇があったら工房に籠る。
マックスにいたっては、半裸の変態として、王道騎士団には最悪に近い印象を持たれてるからな。
連れて来ないのが正解だろう。
それに、どうせ街中もギルドホームも非戦闘エリア。
俺達だけで行って袋叩きにされるという事はない。
ならば、人数が多くても少なくても変わらないという訳だ。

ポータルで王国騎士団のギルドホームがある第二の街に向かい、奴らのギルドホーム近くの路地裏でPKスタイルに変装してから乗り込む。
王道騎士団のギルドホームは、ウチの寂れた酒場とは比べ物にならない程に立派な建物だった。
中央ギルドには劣るが、それでも相当の敷地面積を誇っている。
さすが、大手の正規ギルド。
少数闇ギルドのサクリファイスとは格が違う。

そのギルドホームを見上げて、カタストロフが悔しそうに歯ぎしりしていた。
前提条件からして違うのだから、こういう面では勝てないとわかり切っているだろうに。
面倒な奴だ。
そんなカタストロフを引き摺って中に入ると、ザワザワと王道騎士団のメンバーと思われる奴らがザワめき出した。
「おい、あれって……」
「『死神』だよな？　なんで、ここに？」
「お前、聞いてないのか？　ダークマター退治で、一時的にサクリファイスと手を組むって話」
「なにそれ、キイテナイ……」
「ま、まあ、ついさっき決まった事だしな」
「フ、フフフ……」
隣を見ると、カタストロフが少し笑っていた。
注目されるのが嬉しいようだ。

賢者タイムは終わってしまったのだろうか？
そんな感じで少し待っていると、一人の女プレイヤーが早足で俺達に近づいて来た。
マインだ。
その顔は、本当に来たのか、とでも言いたそうな微妙な感じに歪んでいた。
「本当に来ちゃったかー……」
口に出しおった。
「じゃあ、とりあえず、こっちに来て。ユリウスさんが待ってるから。行くよ、お兄ちゃ……」
「待て」
余計な事を口走ろうとしたマインの口を手で塞ぐ。
んーんー！　と唸っていたが、知った事ではない。
そのまま、マインの耳元に顔を近づけて呟く。
何故か、一部の連中が歓声を上げた。
「この格好の時は知らない人で通せ。PKの正体がバレると面倒な事になる。

わかったか？」
マインが、コクコクと頷いたのを見て、手を離してやる。
まったく。
鈍い妹を持つと大変だ。
「失礼しました。では、こちらにいらっしゃってください」
「……別に敬語にしろとは言ってないぞ」
「あ、そっか」
そうしてマインに連れられ、会議室みたいな場所に通された。
ウチのギルドは、酒場の真ん中にテーブルを持ってきて会議していた事を考えると、酷い格差だ。
そして、その部屋の中心に剣聖はいた。
前にパーティーを組んだ時にいた連中もいる。
聖女と、アイギスこと『鉄壁』、それとシャロ。
あとは、幹部っぽい連中が数人だ。
ほぼ全員、どこかで見たような気がする。

おそらく、知らない内に殺した奴らだと思う。
「ようこそ。我が王道騎士団のギルドホームへ。歓迎するよ『死神』。そして『深淵』さん。
立ち話もなんだし、座ってくれ」
「ああ」
「……ふん」
カタストロフが若干不機嫌になっている。
自分が俺の後に呼ばれたのが気に食わないのだろう。
本当に面倒な奴だ。
俺はカタストロフだけを席に座らせ、俺自身はその護衛のようにカタストロフの背後に佇んだ。
こういうのが好きなんだろう、カタストロフ？
そして、俺の予想通り、カタストロフは一気に機嫌を直した。
面倒だが、まあ、扱えなくはない奴だな。
「それで、ダークマター討伐において、僕達と手を組みたいという話だったね。

僕達としても強い戦力は欲しい。
だから、手を組む事に異論はないよ。背中から斬りかかりでもしない限りは、ね」
「安心しろ。我らにもそれくらいのモラルはある」
「うん。それはわかってる。あくまでも確認の為だよ」
ぶっちゃけ、約一名、後ろから刺さないと保証できない危険人物がいるんだが……
まあ、なんとか抑え込むしかないな。
できるだけ隔離する方向で検討しておこう。
「さて、それじゃあ作戦の詳細を話し合おうか」
「よかろう」
そうして、カタストロフと剣聖の間で話し合いが進んでいく。
途中、俺や向こうの幹部連中も口を出したが、特に問題はなく作戦が決まっていった。
その結果、王道騎士団が雑兵を抑え、俺達がダークマターの幹部級の相手をする事に決定。
連携を取るのは難しいと見て、完全に役割を分担した形だ。

これは俺が進言した事でもある。
目的は、言うまでもなく危険人物（サクラ）の隔離だ。
あいつと王道騎士団を同じ場所にいさせてはならない。
混ぜるな危険。
そうして、会議は大きな問題もなく、意外な程あっさりと終了し、
王道騎士団の準備を整えた一時間後に、ダークマター討伐作戦が決行される事となった。

33　ダークマター討伐

俺達は現在、第三の街へと繋がる道、つまりダークマターが占拠している場所へと、モンスターを倒しながら進んでいた。

サクリファイスの戦闘員５名。

そして、現在ログイン中の王道騎士団戦闘員、約１００名が足並みを揃えて進行する様は壮観だろう。

もっとも、俺達の間には物理的にも精神的にも、結構な距離があるがな。

サクラが血走った目でリア充（この場合はネト充というのだったか？）の王道騎士団を睨み付けているのも原因の一つだが、王道騎士団の中にも、俺達を睨み付けてくる連中がいるのだ。

まあ、当然といえば当然の事。

俺達は所構わずPK行為を繰り返してきた。

王道騎士団の中にも被害者は多数いるだろう。

そいつらが、俺達に対して敵愾心を持つのは当然だ。

これが、俺達と奴らが連携を取れない最大の理由。
だからこそ、お互いに協力するのではなく、利用し合う。
どうせ、敵の敵は味方という理屈に基づいた一時的な同盟でしかないのだから、これでいいのだ。

そうして、ギスギスとした進軍を続ける内、遂にダークマターの布陣が見えてきた。
……やはり、多いな。
向こうも約１００人という情報はガセではなかったようだ。
雑魚でも群れると手が出せない。
一撃食らったらアウトの俺は特にだ。
初日に数の暴力をねじ伏せたが、あれは、あくまで装備もスキルもステータスもろくに揃っていない最序盤で、
なおかつ、相手がその場に居合わせただけの烏合の集だったからこそできた事。
ある程度ゲームに慣れ、破壊王やサーベルみたいな強い奴に率いられた『ギルド』

が相手では無理だ。
少なくとも、正面から全滅させるのは。
手段を選ばなければ、倒せなくもないんだがな。
だが、こうして見晴らしの良い場所に構えられるとキツイ。
「来たな！　正規ギルドども！」
俺がそんな事を考えていると、ダークマターの先頭に立った破壊王が、大声で話しかけてきた。
それに相対するように、剣聖が王道騎士団の先頭に立つ。
「はじめまして。僕はユリウス。ギルド『王道騎士団』のギルドマスターを務めている」
「知ってるぜ。剣聖だろ？
お前みたいな強い奴が出て来てくれて嬉しいぜぇ。
わざわざ、こんな所で待った甲斐があったってもんだ」
「……一応聞くけど、素直にここから立ち去る気はないんだね？」
剣聖が、本当に一応といった感じで問いかける。

まあ、その答えは決まっていると思うが。

「ある訳ねぇだろ！　ここを通りたきゃ、力ずくで俺達を倒す事だな！」

ほらな。

「なら、仕方ないな。

――皆！　攻撃開始だ！」

「野郎ども！　迎え撃て！」

『おお！』

そして、戦端が開かれる。

両軍の遠距離攻撃が飛び交い、それを壁役が防ぎながら、両軍共に突進して行った。

その後は、すぐに乱戦になる。

壁役の守りを食い破った奴らが暴れ、迎え撃つ奴らと激突。

ダークマターは、破壊王が先頭に立ち、防衛に残った剣聖と戦っている。

王道騎士団は、マインを中心とした攻撃部隊が突入し、サーベル率いる防衛組とぶつかる。

怒号が飛び交い、魔法やスキルのエフェクトが派手に輝くき、
この場は、まさに戦場となった。
「我らも行くぞ！　《エンチャント・アタック》！　《エンチャント・スピード》！」
そして、カタストロフの支援魔法を受け、俺達サクリファイスも参戦する。
狙うはもちろん、大将の首。
破壊王目掛けて突撃を敢行。
「な!?　死神だと!?」
「なんで、王道騎士団と一緒に!?」
「関係ないぜ！　所詮は負け犬だ！」
「その首、貰ったぁ！」
正面から、ダークマターのメンバーの一部が攻撃を仕掛けてきた。
数は5人。
ちょうど俺達と同数。
剣を持った奴が1人、槍を持った奴が一人、拳で戦ってる奴が1人。

それと、後衛に弓使いと魔法使いが１人ずつ。
偶然にも、構成まで俺達に似ていた。
「死ねぇ、死神！　《スパイラルランス》！」
槍使いが俺に向けてスキルを放つ。
対人戦において、無闇やたらとスキルに頼るとは。
素人め。
「邪魔だ」
「へ？」
体を横に倒してスキルを避け、そのまま大鎌を一振り。
槍使いの上半身と下半身が分離し、光の粒子となって消えていく。
「目障りね」
「マッスルパンチ！」
見れば、サクラとマックスも、ほぼ一撃で剣士と格闘家を仕留めていた。
紅桜が剣士の首をはね飛ばし、マックスの拳が格闘家を後衛の所まで吹き飛ばす。
「《速射》」

そして、後衛が飛んできた格闘家に目を奪われた隙に、高速で放たれたハンターの矢が、連中の喉を正確に貫き、絶命させた。
ギリギリ存命していた格闘家も、結局はマックスの巨体に踏み潰されて死んだ。
《レベルアップ！　ＬＶ２１からＬＶ２２になりました！》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
「フハハハハハ！　雑魚など我らの敵ではないわ！」
カタストロフが、いつもの調子を取り戻したように高笑いを上がる。
だが、お前は何もやっていないだろうに。
せいぜい、支援魔法をかけた程度だ。
……まあ、調子が出てきたのなら何よりだが。
他のメンバーもそう思っているのか、珍しく余計な口は挟まなかった。
そうして、俺達は進む。
リベンジを果たす為に、敵の大将を目指して、ただひたすらに直進した。

34　混戦

剣士を殺し、槍使いを殺し、格闘家を殺し、盾使いを殺し、魔法使いを殺し、弓使いを殺す。

そうして進軍を続ける俺達を、敵は無視できない。

俺達を止めようと、より多くの敵が群がって来ては、デスサイズの錆びとなって死んでいく。

敵の数は多いが、王道騎士団と戦いながらでは、ろくな連携は取れない。

連携のない烏合の集など、突出した個人戦闘力を持つ俺達からすれば、さほど脅威ではない。

標的である破壊王に、どんどん近づいて行く。

だが、さすがに、そう簡単にはいかないらしい。

「《鎌鼬(かまいたち)》！」

突然、スキルによる巨大な斬撃が俺達を襲った。

これは、俺と同じ大鎌のスキル。

俺は、咄嗟の判断でマックスを突き飛ばし、ギルドメンバー全員の盾にして耐える。

マックスもまた、持ち前の防御力と回復力で耐えきってくれた。

そして俺は、この一撃を放った襲撃者の姿を見る。

予想通り、俺と同じく大鎌を構えたプレイヤー。

だが、そいつは俺と違い、体つきが2メートルを超える巨体で、筋骨隆々。

大鎌という巨大な重量武器も、こいつが持つと少し小さく見える。

筋肉を強調するかのように、ピッチリと肌に張り付いた服。

その上から装着された、胸と腰を守る部分鎧。

そして……

「あら～！　死神ちゃんとこんな所で会えるなんて、アタシ、ついてるじゃな～い！」

野太い声で女言葉を話す、オカマだった。

なるほど。

変態か。

「はじめまして～。アタシはカマー。見ての通り、オカマの大鎌使いよ。
さあ、アタシの宿命のライバル、死神ちゃん！
どちらが真のオカマ……じゃなくて大鎌使いなのか、ここで決めようじゃな～い！」
「断る」
俺は戦いが好きだ。
特に強いプレイヤーとのバトルが好きだ。
たが、そんな思いを超越して、あれには関わりたくないと俺の本能が叫んでいる。
俺にも、苦手な相手くらいいるという事だ。
「あら、いけず～」
「ハッハッハ！　だったら、俺が相手をしてやろう！
その素晴らしい筋肉！　我が筋肉の相手に取って不足なし！」
俺が変態に引いていたら、ウチの変態が前に進み出てくれた。
おお、マックス。
よく言ってくれた。

「ここは俺に任せて、先に行けぇ！」
ああ、今だけはマックスの筋肉が輝いて見える。
頼もしい。
「行こう」
「うむ！　任せたぞ、剛力！」
「しっかりやりなさい」
「な、なんだ、この無駄に濃い戦いは……」
ハンターの呟きがやけに耳に残ったが、それを無視して俺達は駆ける。
マックスの頑張りを無駄にしない為にも。
「さあ！　では、闘ろうか！　同志よ！」
「誰が同志ですって？　アタシは、リアルじゃただの乙女よ！」
背後から、変態同士による戦いの音が聞こえてきたが、意識して聞かないようにする。
あれは、立ち入ってはいけない世界だ。
そうして、オカマとマックスから意識を外した瞬間、俺の眼前に刃が突き出され

た。
「ッ!?」
「チッ」
それを咄嗟に避け、大鎌を振るって反撃。
襲撃者は、それを見て即座に距離を取った。
……俺の《危険感知》が発動しないという事は、相当高レベルの《隠密》を持っているのだろう。
今度の襲撃者は、全身を忍者のような黒装束で包み、手に小太刀を持ったプレイヤーだった。
顔まで隠れているが、ボディラインから女だとわかる。
女のキャラクターを使っているだけのオカマ（この場合はネカマというのだったか？）かもしれないが、それはどうでもいい。
さっきの奴みたいに、それをオープンにして精神攻撃の域に昇華させていない限りは。
「……レオンの所へは行かせない」

女忍者はボソリとそう呟いて、乱戦の中に消える。
おそらく、退いた訳ではなく、他のプレイヤーに紛れて奇襲を狙っているのだろう。
俺も似たような事をやるから、よくわかる。
「面倒だな」
「なら、ここは私に任せなさい」
そうして、今度はサクラが飛び出した。
何を……と思ったら、サクラは乱戦の中、ピンポイントで女忍者を発見し、斬りかかっていた。
「なんで!?」
「あなたからは嫌な匂いがするのよ。私の大嫌いなリア充の匂いが！」
……恐るべし、サクラの怨念。
スキルすらも上回る超直感とでも言ったところか？
本当に恐ろしい。
「……ここは任せてよさそうだな」

「う、うむ。先を急ぐぞ！」
サクラが離脱し、これで俺達は残り３人。
それでも、烏合の集を相手にするなら十分だ。
前衛１人に、後衛２人。
そこまで、バランスも悪くない。
そして、破壊王まであと一歩というところで、今度は闇の魔法が俺達目掛けて飛来してきた。
「《ダークランサー》！」
それをカタストロフが、同じく闇魔法で迎撃し、術者を睨み付ける。
術者は、破壊王の側に控えていた奴。
黒い神官服のような装備を身に付けた魔法使いだ。
何人かの前衛を引き連れている。
「ふむ。ここは私に任せてもらおう。同じ闇魔法使いとして、格の差を見せてつけてくれる！」
「え、援護する。お、お前１人で前衛の相手まではキツイ筈だ」

「助かるぞ、狩人！
死神！　破壊王は任せた！」
カタストロフとハンターは、邪神官の一味と遠距離での撃ち合いを始めた。
ギルドマスターの指示には従う。
言われた通り、俺は破壊王の相手だ。
俺は、単身、戦場をひた走る。
1人になった事により、これまで他のメンバーに合わせていたせいで出せなかった全速力で、駆ける。
速度に極振りした俺の足は極めて速く、追い縋る敵を置き去りにして、あるいは斬り殺して、
そして遂に、――破壊王の元にまで到達した。
破壊王は、他のメンバーを肉壁のように使いながら、剣聖のパーティーと互角に近い戦いを繰り広げている。
そこに乱入。
まずは先制で《鎌鼬》を叩き込み、それに驚いた隙に、大鎌を振りかぶって斬り

かかった。

「ッ!?　来たか、死神！　待ってたぜ！」

そして、俺の大鎌と、破壊王の大剣が激突した。

35　『破壊王』

「おらぁ！」

大鎌と大剣はつばぜり合い、少しの間拮抗してから、俺の方が押し負ける。

やはり、パワーでは破壊王の方が上か。

押し負けた俺は、その衝撃に逆らわずにフワリと後ろに飛び、ノーダメージで着地した。

「くたばれ！　へぶっ!?」

着地の隙を突こうとしたのか、襲いかかってきた雑魚を一刀両断する。

そして、間を置かず、破壊王に再接近した。

「そら！」

「《デスワルツ》」

「ぬおっ!?」

大剣の一撃を屈んでかわし、その体勢から、アーツによる回転斬りを仕掛けた。

狙いは足下。

まずは、機動力から殺す。
だが、破壊王は凄まじい反射で、これを防いだ。
避けるのではなく、逆に接近し、刃ではなく柄の部分を足で受け止めた。
これでは、威力半減だ。
ダメージは与えたと思うが、斬れなかった。
そうと認識した瞬間、俺は即座に横へ跳んで追撃を避けた。
同時に、引き技の要領で大鎌を一閃したが、それは当たり前のように大剣で防がれる。
……強いな。
剣聖並みか、それ以上の手応えを感じる。
だが、
「僕を忘れてもらっては困るね」
「あぁ!?」
その剣聖が、俺との戦いに集中していた破壊王を強襲した。
剣聖の一撃が、破壊王の背中を斬り裂き、反撃に振るわれた大剣はアイギスこと

『鉄壁』が完璧に防いだ。
聖女の魔法が周りの雑魚を散らし、シャロの矢が申し訳程度に破壊王に突き刺さる。
他はともかく、シャロの攻撃はあまり効いていないように見えるな。
そして、破壊王の意識が剣聖達に向けば、今度は俺が斬りかかる。
周りを彷徨く雑魚が鬱陶しくて仕留めきれないが、確実にダメージは蓄積してきている。
「チィッ！　寄ってたかって袋叩きにしやがって！　恥ずかしくねぇのか!?」
「お前が言うな」
破壊王の反論を切って捨てる。
たしかに、俺も自分一人の力で戦いたいと思ってはいるが、これは共同作戦だ。
さすがに、こっちから話を持ちかけた手前、剣聖達に邪魔するなとは言えない。
悪いが、このまま死ね、破壊王。
そう思っていたのだが。
「とー！」

「ぐっ……！」

離れた所で戦っていたマインとサーベルが、率いる部隊と共にこちらへと乱入してきた。

戦っている内に移動してしまったのだろう。

あるいは、サーベルに誘導されたか。

結果として、この場は多くの敵味方がゴチャゴチャに入り乱れる乱戦となり、それぞれが自分の事だけで精一杯、協力は難しくなった。

だが、俺にとっては悪くない展開だ。

剣聖達はマインの援護を優先し、サーベルに付いて来た敵の方を相手している。

今ならば、そこまでの邪魔が入らずに破壊王と戦えるかもしれない。

俺は、とりあえず邪魔な雑魚を何人か斬り殺しながら、破壊王を狙う。

向こうも俺に気づいたのか、サーベルの援護をやめて、俺に向き直った。

破壊王の口元に笑みが浮かぶ。

「《バスタード》！」

「《デスワルツ》」

大きく振り下ろされた大剣のアーツを、回転斬りのアーツで相殺。
その際、回転の流れによって大剣を受け流すような形とし、大剣の上から大鎌を被せて、地面に押し付ける。
「あ!?」
そして、地面に押さえつけられた大剣の上に片足を乗せ、それを軸にもう一度回転。
「《デスワルツ》」
「うぉ!?」
破壊王は、咄嗟に大剣を手放して回避した。
思い切りが良いし、おそらく、それが最善の選択だろう。
武器に固執していれば、避けきれずに真っ二つになっていた。
だが、武器を失っては、俺の相手は務まらないぞ。
大鎌を、なるべく隙晒さないよう、コンパクトに振るう。
決して懐には入らせない。
大鎌の、俺の間合いで確実に仕留める。

その連続攻撃を防ぎきれず、破壊王の体にダメージエフェクトである赤い光が増えていった。

「なめんなぁ！」

ここで、破壊王が賭けに出た。

前にマックスがやったように、破壊王は片腕を犠牲にして大鎌の刃を止めにかかる。

だが、あの時よりも俺の攻撃力は大きく上昇している。

止めきれる筈もなく、大鎌は簡単に盾にされた左腕を切断して胴体に食い込む。

これまでの累計ダメージを思えば、これだけで死にかねない重症の筈だ。

だと言うのに、破壊王の顔には不敵な笑みが浮かんでいた。

何かある。

そう思った瞬間、破壊王が動いた。

「《正拳突き》！」

これは、格闘術のアーツ!?

アーツの力によって、瞬間的に加速した破壊王の拳が、俺の脇腹を抉った。

俺の紙装甲では、今の一撃だけで死にかねない。
ヤバイと思って咄嗟に回避したからこそ、脇腹だけで済んだのだ。
直撃すれば死んでいた。
「《百烈拳》！」
「くっ……！」
続く連続攻撃のアーツをなんとか避け、避けきれない分は大鎌の柄を盾にして防ぐ。
だが、懐に入られてしまった。
ここは、大鎌の間合いではない。
拳の間合いだ。
「形成逆転だなぁ！」
破壊王が笑いながら攻め続ける。
だが、調子に乗っているように見えて、打撃は正確。
下手を打てば、その瞬間に再び形成が逆転するとわかっているのだろう。
破壊王の拳に、油断はなかった。

「チッ……！」
思わず舌打ちが漏れる。
あと一撃だ。
おそらく、破壊王のダメージから言って、あと一撃を浴びせれば勝負はつく。
だが、その一撃が遠い。
拳はリーチが足りない代わりに小回りが利き、攻撃が素早い。
反撃に転じる隙がない。
「おらおらおらおら！」
「くっ……！」
キツイな。
あと一撃で死にかねないのは俺も同じ。
それが攻撃力極振りの宿命だ。
というか、ガードの上からでも少しずつ削られている。
《HP自動回復》がダメージを相殺してくれているが、長くは持たない。
どうにかして、隙を見つけなければ……！

「勝負ありだな！　死にやがれぇ！」
ここで大振りの一撃でも繰り出してくれたなら殺せるんだが、発言に反して、破壊王の攻撃は手数重視のままだ。
見た目に反してセコいというか、なんというか。
しかし、このままでは……
そう思った、その時。
「《ダークブラスター》！」
「何ッ!?」
どこかから飛来した闇の魔法が、俺と破壊王を呑み込もうとする。
咄嗟の判断で互いに距離を取り、俺は破壊王のラッシュから解放された。
魔法が飛んできた方向をチラリと見ると、親指を立てたカタストロフの姿が。
カタストロフ……！
まさか、お前の事をカッコいいと思う日が来ようとは。
あ、こっちに意識向けた瞬間、雑魚に殴り飛ばされた。
やはり、カタストロフはカタストロフのようだ。

だが、お前がくれたチャンスを無駄にはしない。

「クソッ！　あと一歩のところで！」

腹立たしいとばかりに吐き捨てる破壊王を無視し、俺は上空へと飛び上がる。

そして、新たなるアーツを発動させた。

「《ギロチンスマッシュ》」

俺の体が、縦に回転しながら、ターゲットである破壊王へと高速で落ちていく。

その速度はアーツによって引き上げられ、見てからの回避では間に合わないだけの超速となっている。

いや、それなりに速度のあるプレイヤーならば、あるいは見てからでも避けられるだろう。

だが、俺は知っている。

破壊王は足が遅い。

おそらく、攻撃力や防御力にステータスポイントを集中させる為に、速度を犠牲にしたのだろう。

そんな破壊王に、この一撃を避ける事はできない。

高速回転した大鎌の振り下ろしが、破壊王に命中した。
「ぬぉおおおお!?」
咄嗟に残った右腕を盾にしたのはさすがだが、それでは防ぎきれない。
デスサイズの刃は、右腕を斬り裂き、そのまま頭から尻までを通り抜けて、破壊王の体を縦に両断した。
「マジかよ。やるじゃねぇか」
最後にそう呟いて、――破壊王は光の粒子となって消滅した。
《レベルアップ！　ＬＶ２２からＬＶ２３になりました！》
《ステータスポイントを入手しました》
《スキルポイントを入手しました》
「……レオンさんがやられましたか。仕方ありません。撤退しますよ！」
「逃がさないよ！」
「いいえ、逃げさせていただきます」
破壊王が死んだのを見て、サーベルが撤退を宣言した。
それに従わない者も多くいたが、そういう統率の取れていない連中など王道騎士

団の敵ではなく、簡単に討ち取られていく。
だが、サーベルは宣言通り、指示に従ったメンバーの大部分を逃がしてみせた。
あっぱれだとは思うが、それでも俺達の勝ちだ。
こうして、俺達はリベンジを果たしたのだった。

36　討伐作戦を終えて

「では！　リベンジ達成を祝して！　乾杯！」

ダークマター討伐を終え、王道騎士団の標的が俺達に移る前に、それとサクラの我慢が限界に達する前に撤退した俺達は、ギルドホームで祝勝会をしていた。

カタストロフのテンションがやたらと高い。

だが、もうすっかり、いつも通りだ。

どうやら、精神崩壊は避けられたようだな。

いや、この場合はキャラ崩壊というのだったか？

よくわからん。

「それにしても、キョウ。あなたが一対一で苦戦するなんて珍しいわね」

「……見てたのか」

「ええ。あの忍者が割りとあっさり片付いたから、チラッとね」

サクラに指摘され、少し悔しい思いが沸いてくる。

あの時、カタストロフの援護がなければ、俺は破壊王に負けていたかもしれない。

それは事実だ。

勝ちはしたが……勝利の実感はないな。

「まあ、相性も悪かったし、状況もあなたの苦手な乱戦だったし、仕方ないとも思うけれどね」

「いや、それは言い訳になる」

「……ストイック過ぎるのもどうかと思うわよ。これはゲームなんだから、程々に力を抜いて楽しまないと」

全身全霊でリア充狩りをしてる奴に言われたくないが、まあ、言っている事は正論か。

たしかに、言い訳をしようと思えば、いくらでもできる。

攻撃力極振りの俺は、破壊王やマックスのように、相討ち覚悟でカウンターを狙えるような防御力を持った相手が苦手だ。

しかも、そんなのと戦いながら、乱戦で周囲にも気を配る必要があった。

初日のような連携の取れていない、装備も整っていない雑魚相手ならともかく、破壊王のような強敵を相手にしながら、そこそこのレベルに達した集団にまで気を

払うのはキツイ。
そんな不利な状況でも、なんだかんだで勝ちを拾えた。
味方の力を借りたとはいえ、勝ちは勝ちだ。
なら、深く考えず、素直に喜んでおいた方がいいか。
サクラの言う通り、これはゲームだしな。
「それもそうだな」
「ふふ。いつもの調子に戻ったわね」
「貴様ら！　何を静かに飲んでいる!?　ここはもっとパーッと騒ぐところであろうが！」
俺とサクラが話している間に、カタストロフはすっかり出来上がってしまったようだ。
ゲーム内の酒にアルコールは入っていない筈だが、雰囲気に酔ったのだろう。
特に、カタストロフにとって今回の酒は、格別に旨い勝利の美酒だろうしな。
そうして、酔ったカタストロフが延々とテンションを上げ続け、宴はまだまだ続いたのだった。

◆◆◆

数時間後。

カタストロフが「リアルで二次会をするぞ！」と無茶な事を言い出した辺りで、俺は後の事をサクラに託してログアウトした。

サクラに恨みがましい目で見られたのが少し怖いが……まあ、今度機嫌を取っておこう。

VRギアを外し、ベッドから起き上がって部屋を出る。

喉が乾いたからと適当に冷蔵庫を漁っていると、同じくログアウトしたらしい舞と出くわした。

「あ、お兄ちゃん！　お兄ちゃんも、お疲れ様。大活躍だったじゃん」

「ああ、お前もな」

そのまま、俺は茶を、舞はオレンジジュースを冷蔵庫から取り出し、それを飲みながらリビングで少し話す。

舞曰く、剣聖は俺によろしくと言っていたらしい。

それを素直に受け取るかべきか、それとも「次は君の番だ」的な宣戦布告と受け取るべきか。

悩むな。

「それにしても驚いたよ。ユリウスさんがお兄ちゃんの正体知ってたなんて。「キョウにもよろしくね」って意味深に微笑みながら言われた時は、心臓が止まるかと思った」

「大袈裟な」

別に、バレたからといって、そこまで問題はないだろうに。

不特定多数に知られると、ゲーム内で少し動きづらくなるというだけだ。

気にはするが、そんな心臓が止まる程、気に病むような事じゃない。

そんな話をしている内に、舞はジュースを飲み終わった。

「プハァ！　さてと。じゃあ、私はゲームに戻るね」

「程々にな」
「わかってるって。今日は徹夜だ！」
「おい」
全然わかっていない、というか、聞く気すらないじゃないか。
そのまま、舞は走って自分の部屋へと入り、ガチャンという音を立てて鍵を閉めた。
誰にも邪魔はさせないとばかりに。
……まあ、夏休みの宿題はやらせているし、別に構わないんだが。
それでも、生活習慣が乱れるのは良くないだろう。
それに、徹夜でゲームとか、頭がおかしくなりそうだ。
とりあえず、夕飯の時になっても起きてこなかったら、メールを送ろう。
それでもゲームにのめり込むようなら、鍵開けして強制ログアウトの刑だ。
そんな事を考えながら、俺も自分の部屋へと戻った。

第三弾終了。
次行きます！

プレイヤーキラー伝説!　～死神プレイの最強PK～

著者　　カゲムチャ

発行日　　2020年4月7日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/217634/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。